

鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告

1988

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会



1. 調査地遠景



2. SD22断面



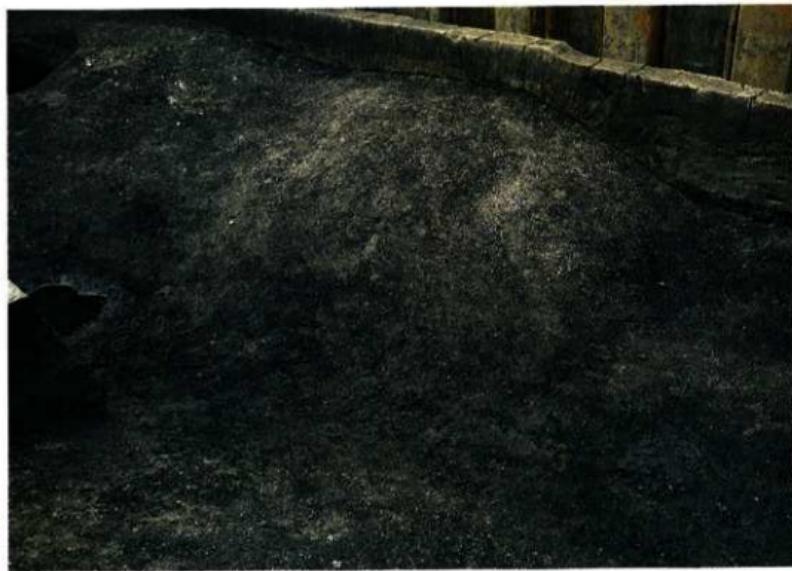
1. 第8号方形周溝墓マウンド断面



2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺



1. 第9号方形周溝墓遺景



2. 第9号方形周溝墓マウンド



第9号方形周溝墓北側土器一括

卷頭図版五 矢柄付石鏃



序

鬼虎川遺跡は、地下5m以上の深さに埋没した弥生時代の農耕集落であり、同じく東大阪市内の瓜生堂遺跡とともに、全国的にもよく知られた遺跡であります。特に出土遺物は、保存状態が良好なために、今までに貴重な資料を数多く発見しています。

今回刊行いたします鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告でも、方形周溝墓、土壙墓群と周囲をとりまく大溝を検出し、集落と墓域の関係がさらに明らかになるとともに、矢柄付石鏃の出土など他に類例のない貴重な資料を得ることができました。これらの成果が、弥生時代研究の一助になるとともに、遺跡の保存・活用になれば幸いと存じます。

最後に、調査・整理の実施にあたって、多大なる御指導、御協力を頂いた関係諸機関、諸氏に感謝の意を表するとともに、今後とも一層の御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

昭和63年7月

財団法人 東大阪市文化財協会
理 事 長 木 寺 宏

例　　言

1. 本書は、大阪府が建設を予定している一般国道308号内共同溝建設に伴う鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、大阪府の委託を受けて、東大阪市教育委員会の指導のもと、財団法人東大阪市文化財協会が担当実施した。
3. 調査は、現地調査を昭和60年11月1日～昭和62年7月30日まで実施し、整理調査は昭和62年12月1日～昭和63年7月30日まで実施した。
4. 調査は、次の体制で実施した。（昭和60年11月1日当時）

理事長　木寺 宏（東大阪市教育委員会教育長）

事務局長 寺澤 勝（東大阪市教育委員会社会教育部参事）

庶務部長 吉田照博（東大阪市教育委員会文化財課課長代理）

庶務部 安藤紀子（東大阪市教育委員会文化財課）

調査部長 原田 修（東大阪市教育委員会文化財課主査）

調査部 上野節子（財団法人東大阪市文化財協会）

調査担当 下村晴文（東大阪市教育委員会文化財課主任）

現場調査・整理調査に從事した調査補助員

大坂徹 森幸三 小川幸一 堀耕司 今村浩 任田邦嗣 細井達雄 木下誠司 奥山隆

一 西田豊 赤木重隆 小林修 烏村展弘 石田誠吾 村上俊次 松井廉浩 奥田淳一

橋本圭一 山河正裕 竹山功一 山木剛 田所和佳 竹田泰代 高橋尚子 山田厚子

谷阪智子 辻林美幸 江尻聰子 背戸香津 小西朋子 安原文子 中野彰子

5. 本書の執筆、編集は下村が担当した。

6. 調査における土色名は、農林省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所監修の「新版標準土色帖」に準じた。方位は、座標軸の北をあらわし、高さはT.P.（東京ポイント）で表示している。

7. 本書の作成にあたって、人骨の鑑定を大阪市立大学の多賀谷昭氏に依頼した他、出土材の樹種鑑定及び保存処理をパリノ・サーヴェイ（株）、（財）元興寺文化財研究所へ委託して実施した。

8. また出土遺物、遺構について多くの方々に有益なご教授をいただいた。記して深謝します。
佐原 真（奈良国立文化財研究所）、泉拓良（奈良大学）、宮崎泰史（大阪府教育委員会）、伊藤健司（（財）元興寺文化財研究所）、那須考悌（大阪市立自然史博物館）、梅野博幸（大阪市立自然史博物館）

9. 調査の実施にあたっては、大阪府道路課、大阪府八尾土木事務所、鹿島建設株式会社の御協力を頂いた。記してお礼申しあげます。

本文目次

序

例言

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の経過	2
II	位置と環境	4
III	調査の概要	6
1.	調査の方法	6
2.	層序	7
3.	中世～近世の遺構	8
4.	古墳時代の遺構	9
5.	弥生時代の遺構	11
6.	出土遺物	31
	古墳時代の出土遺物	31
	弥生時代の出土遺物	31
	縄文土器	48
IV	鬼虎川遺跡第30次調査出土人骨について	(多賀谷 昭) 49
V	鬼虎川遺跡第29・30次調査出土材同定	(パリノ・サーヴェイ株) 52
VI	まとめ	55

挿 図 目 次

第1図 調査地点位置図	1
第2図 矢柄付石築取り上げ作業風景	2
第3図 同上	2
第4図 航空写真測量作業風景	3
第5図 現地説明会風景	3
第6図 遺跡周辺図	5
第7図 調査地点地区割図	6
第8図 基本層序	7
第9図 掘り上げ田に伴う水路 (SD 1)	8
第10図 A 9・10区中世の遺構	8
第11図 C地区中世の遺構	8
第12図 A地区古墳時代遺構実測図	10
第13図 D地区古墳時代遺構実測図	11
第14図 SD 22 A 10区断面図	12
第15図 SD 22 A 8区断面図	12
第16図 SD 21平面実測図	13
第17図 SD 21西壁断面実測図	13
第18図 SD 20平面実測図	14
第19図 SD 20西壁断面実測図	14
第20図 SD 26平面実測図	15
第21図 SD 3断面図	16
第22図 SD 2南壁断面図	17
第23図 SD 2平面実測図	17
第24図 SD 5南壁断面図	18
第25図 SD 5平面実測図	18
第26図 SE 1西壁実測図	19
第27図 第4号方形周溝墓板材実測図	20
第28図 第5号方形周溝墓第1主体部実測図	20
第29図 第1～5号方形周溝墓実測図	21～22
第30図 SD 3、SE 1、第6～8号方形周溝墓実測図	21～22
第31図 第7号方形周溝墓第2主体部実測図	23

第32図 第6号方形周溝墓（鬼虎川第12次報告書）	
5号方形周溝墓第1主体部より掲載）	23
第33図 第7号方形周溝墓第1主体部実測図	24
第34図 第8号方形周溝墓マウンド断面図	25
第35図 第8号方形周溝墓第1主体部実測図	25
第36図 第9号方形周溝墓実測図	26
第37図 第9号方形周溝墓西溝断面図	27
第38図 1号土墳墓人骨実測図	27
第39図 2号土墳墓人骨実測図	28
第40図 3号土墳墓人骨実測図	28
第41図 4号土墳墓人骨実測図	29
第42図 5号土墳墓人骨実測図	29
第43図 縄文時代海岸線実測図	30
第44図 古墳時代遺構内出土土器	32
第45図 古墳時代遺構内出土土器	33
第46図 弥生時代遺構内出土土器	34
第47図 弥生時代遺構内出土土器	35
第48図 弥生時代遺構内出土土器	36
第49図 弥生時代遺構内出土土器	37
第50図 弥生時代遺構内出土土器	38
第51図 弥生時代遺構内出土土器	39
第52図 弥生時代遺構内出土土器	40
第53図 弥生時代包含層内出土土器	41
第54図 弥生時代包含層内出土土器	42
第55図 弥生時代包含層内出土土器	43
第56図 弥生時代包含層内出土土器	44
第57図 古墳時代包含層内遺物実測図	45
第58図 縄文土器拓影	46
第59図 木製品実測図	47
付図1 鬼虎川遺跡第29・30次調査弥生時代平面図	
付図2 鬼虎川遺跡遺構全図	
付図3 C2区西壁断面図 D9～D5区南壁断面図	

表 目 次

第1表 鬼虎川遺跡29・30次調査出土材の樹種.....	54
第2表 方形周溝墓主体部頭位.....	56
第3表 上墳墓人骨頭位.....	56

図 版 目 次

巻頭図版一	1. 調査地遠景 2. SD22断面
巻頭図版二	1. 第8号方形周溝墓マウンド断面 2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺
巻頭図版三	1. 第9号方形周溝墓遠景 2. 第9号方形周溝墓マウンド
巻頭図版四	1. 第9号方形周溝墓北側土器一括
巻頭図版五	1. 矢柄付石鎌
図版一	調査前の風景
図版二	調査風景 1. 機械掘削風景 2. 人力掘削風景
図版三	中世～近世の遺構 1. SD1完掘状況 2. 足跡状遺構検出状況
図版四	古墳時代の遺構 1. SD13・SD15・SK8完掘状況 2. SK10完掘状況
図版五	古墳時代の遺構 1. SD14内遺物出土状況 2. 須恵器出土状況
図版六	古墳時代の遺構 1. SK18完掘状況(東より) 2. SK18完掘状況(北より)
図版七	古墳時代の遺構 1. 土器出土状況 2. 柱材立割状況
図版八	古墳時代の遺構 1. D地区遺構検出状況 2. D地区遺構検出状況
図版九	弥生時代の遺構 1. 第3号方形周溝墓全景 2. 第2・3号方形周溝墓全景
図版一〇	弥生時代の遺構 1. 第2・3号方形周溝墓検出状況

2. 第1~3号方形周溝墓検出状況
- 図版一一 弥生時代の遺構 1. 第4号方形周溝墓板材検出状況
2. 第4号方形周溝墓板材検出状況
- 図版一二 弥生時代の遺構 1. 第5号方形周溝墓マウンド断面
2. 第5号方形周溝墓主体部人骨検出状況
- 図版一三 弥生時代の遺構 1. 第5号方形周溝墓主体部人骨検出状況
2. 第5号方形周溝墓主体部人骨検出状況
- 図版一四 弥生時代の遺構 1. 第7・8号方形周溝墓全景
2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺検出状況
- 図版一五 弥生時代の遺構 1. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺底板
2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺小口板
- 図版一六 弥生時代の遺構 1. 第7号方形周溝墓第1主体部掘形
2. 第7号方形周溝墓第2主体部人骨
- 図版一七 弥生時代の遺構 1. 第8号方形周溝墓マウンド検出状況
2. 第8号方形周溝墓マウンド断面
- 図版一八 弥生時代の遺構 1. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺小口板検出状況
2. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺・人骨検出状況
- 図版一九 弥生時代の遺構 1. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺底板検出状況
2. 第8号方形周溝墓第1主体部墓壇掘形全景
- 図版二〇 弥生時代の遺構 1. 第9号方形周溝墓全景(北より)
2. 第9号方形周溝墓とヤナギの木の根(西より)
- 図版二一 弥生時代の遺構 1. 第9号方形周溝墓とヤナギの木の根(西より)
2. 第9号方形周溝墓北西周溝出土土器検出状況
- 図版二二 弥生時代の遺構 1. 第9号方形周溝墓マウンド断面
2. 第9号方形周溝墓西周溝断面
- 図版二三 弥生時代の遺構 1. 第9号方形周溝墓北側土器群一括出土状況
2. 第9号方形周溝墓北側土器群一括出土状況
- 図版二四 弥生時代の遺構 1. 1号土壙墓人骨検出状況
2. 5号土壙墓人骨検出状況
- 図版二五 弥生時代の遺構 1. 2号土壙墓人骨検出状況(西より)
2. 2号土壙墓人骨検出状況(北より)
- 図版二六 弥生時代の遺構 1. 3号土壙墓人骨検出状況(北より)
2. 3号土壙墓人骨検出状況(西より)
- 図版二七 弥生時代の遺構 1. 2号土壙墓人骨検出状況
2. 4号土壙墓人骨検出状況(南より)

- 図版二八 弥生時代の遺構 1. S E 1、第7・8号方形周溝墓全景
2. S E 1、第8号方形周溝墓全景（北より）
- 図版二九 弥生時代の遺構 1. S E 1 内西壁断面
2. S E 1 全景（北より）
- 図版三〇 弥生時代の遺構 1. S E 1 内土器（159）出土状況
2. S E 1 内鉗（296）出土状況
- 図版三一 弥生時代の遺構 1. S D 22検出状況
2. S D 22検出状況
- 図版三二 弥生時代の遺構 1. S D 21全景
2. S D 21西壁断面
- 図版三三 弥生時代の遺構 1. S D 20全景
2. S D 20西壁断面
- 図版三四 弥生時代の遺構 1. S D 20内矢柄付石鐵出土状況
2. S D 20内矢柄付石鐵出土状況
- 図版三五 弥生時代の遺構 1. S D 26全景
2. S D 26全景
- 図版三六 弥生時代の遺構 1. S D 5 全景
2. S D 5 南壁断面
- 図版三七 弥生時代の遺構 1. S D 3 全景
2. S D 3 北壁断面
- 図版三八 弥生時代の遺構 1. S D 7 全景
2. S D 2 全景
- 図版三九 弥生時代の遺構 1. A 4区 S D 22内鐵出土状況
2. 磨製石鐵出土状況 3. D地区土器出土状況
- 図版四〇 繩文時代の遺構 1. A 3～A 5区繩文時代の海岸線
2. A 7～8区鯨骨・シカの骨出土状況
- 図版四一 繩文時代の遺構 1. 動物遺体出土状況
2. 動物遺体（タヌキ）出土状況
- 図版四二 繩文時代の遺構 1. D地区断面下層
2. D地区断面下層
- 図版四三 古墳時代の遺物 1. 須恵器杯、土師器杯・甕
- 図版四四 古墳時代の遺物 1. 遺構内出土須恵器杯
2. 包合層内出土須恵器杯、土師器
- 図版四五 古墳時代の遺物 1. 遺構内出土土師器
2. 遺構内出土須恵器、土師器

図版四六	弥生時代の遺物	広口壺・細頸壺
図版四七	弥生時代の遺物	壺・短頸壺・細頸壺
図版四八	弥生時代の遺物	壺・広口壺・短頸壺・高杯・鉢
図版四九	弥生時代の遺物	甕・広口壺・壺・小形壺・鉢
図版五〇	弥生時代の遺物	広口壺・甕
図版五一	弥生時代の遺物	短頸壺・小型壺・壺蓋・把手付鉢・高杯
図版五二	中世～弥生時代の遺物	壺・細頸壺・紡錘車・不明土製品・双孔円板・開元通宝
図版五三	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. 遺構内出土土器
図版五四	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. S D 3 内出土土器
図版五五	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. 遺構内出土土器
図版五六	弥生時代の遺物	1. 包含層内出土土器 2. 遺構内出土土器
図版五七	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. 遺構内出土土器
図版五八	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. 包含層内出土土器
図版五九	弥生時代の遺物	1. 遺構内出土土器 2. 包含層内出土土器
図版六〇	弥生時代の遺物	1. 包含層内出土土器 2. 包含層内出土土器
図版六一	弥生時代の遺物	1. 包含層内出土土器 2. 包含層内出土土器
図版六二	弥生時代の遺物	1. 包含層内出土土器 2. 包含層内出土土器
図版六三	古墳時代の遺物	1. 轉式系上器 2. 製塙土器
図版六四	縄文時代の土器	1. 縄文土器深鉢 2. 縄文土器深鉢
図版六五	弥生時代の遺物	1. 板状木製品・加工木・鍬・鋤
図版六六	縄文・弥生時代の遺物	1. 動物遺体（タヌキ） 2. 磨製石鉄
図版六七	縄文時代の遺物	1. クジラ、シカ、イノシシ

2. クジラ

図版六八 自然木顎微鏡写真

図版六九 自然木顎微鏡写真

図版七〇 自然木顎微鏡写真

図版七一 人骨写真

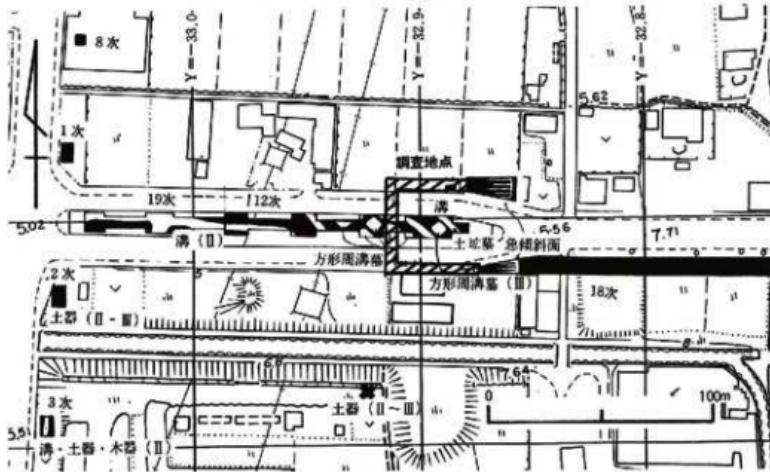
I. はじめに

1. 調査に至る経過

国道308号線は、東大阪市の北部地域を東西に横切り、大阪の中心部と阪奈道路を経由して奈良県とを結ぶ重要な幹線道路である。しかしながら、近年の交通量の増大により飽和状態を呈するところとなり、都市再開発とともに、新交通網の整備が切望されていた。その後国道308号線の整備計画とともに、大阪市営地下鉄中央線の延伸及び新鉄道（現在の近畿日本鉄道東大阪線）建設、阪神高速道路東大阪線の延伸工事が総合的に実施されることになり、現在工事の大部分は完成し、東大阪市域の景観は大きく変貌している。

さて、国道308号線の整備計画の一環として、拡張される道路敷の中で、近畿日本鉄道東大阪線石切駅以西について、ガス管、水道管、電話線などを一括して埋納する共同溝の建設計画があった。共同溝建設予定地の内、西石切町3丁目付近は、周知の鬼虎川遺跡の範囲内にあたり、これまでの周辺の調査結果からも当然遺構、遺物が検出されることが明らかな地域であった。

このため、大阪府八尾土木事務所は、東大阪市教育委員会に対して、土木工事等による発掘通知を提出した。東大阪市教育委員会では、大阪府教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議をおこなった結果、工事予定地内全域の発掘調査の実施を決定した。東大阪市教育委員会では財團法人東大阪市文化財協会に発掘調査の依頼をおこなうとともに、大阪府八尾土木事務所を含めた三者により、「一般国道308号内共同溝建設工事に伴う埋蔵文化包蔵地の調査」につい



第1図 調査地点位置図

ての協定書を締結した。

発掘調査は、建設工事計画に合わせて、昭和60・61年度の2カ年にまたがって実施することになったが、予定地が現道にかかる箇所などがあり、付替工事などの遅れもあって、最終的には、昭和62年度6月末日まで実施した。本調査は、昭和60年調査分を鬼虎川遺跡第29次調査、61年度調査分を鬼虎川遺跡第30次調査として区別をおこなっている。第29次調査は、昭和61年1月1日より昭和61年7月31日まで国道308号北側地区的調査をおこなった。第30次調査は、昭和61年6月3日より昭和62年7月31日まで途中道路の付替工事期間を含めて、道路の南側及び東西のつなぎ部分の調査をおこなった。調査対象面積は、約815m²となる。

現場調査終了後、三者により整理調査の協議がおこなわれ、昭和62年12月1日付をもって、「一般国道308号内共同溝建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査」の整理協定が締結された。整理調査は、昭和62年12月1日より昭和63年7月31日までの期間実施されることになった。

2. 調査の経過

調査地点は、鬼虎川遺跡の範囲内では、北東地域にあたり、昭和56年以来実施された新鉄道建設工事に伴う発掘調査（鬼虎川遺跡第12次・19次・22次・25次調査）^④で弥生時代中期の大溝、方形周溝墓、土壙墓などが発見された地点に隣接している。このため同様の遺構が発見される可能性の高い地点であった。しかしながら、弥生時代の遺構は現地表下約4～5mの深さに埋没しており、又昭和59年の25次調査で検出した、縄文時代前期の海岸線を追求するには約7m以上の深さまで確認する必要があった。幅5m前後の細長い調査地で土層断面を残しながらの調査は困難が予想された。

調査は、まず上留用の鋼矢板の打ち込み作業から始められた。打ち込みが完了した段階で、盛土及び、旧表土を Yunpo で掘削をおこなった。一段目の切梁が架工されたのち、人力で掘削をおこなった。地表下約2mで古墳時代



第2図 矢柄付石巻取り上げ作業風景



第3図 同 上

の遺構面を検出した。古墳時代の遺構は、第23次調査で6世紀頃の掘立柱建物跡を検出しているため、今回の調査地でも精査をおこなったが、小規模な溝、ピットを検出したのみで、性格は不明であった。

古墳時代の遺構は、航空写真測量によって遺構図の作成をおこなった。今回の調査地は、細長く、また深いことが予想されるため、航空写真測量を多用することにしたが、調査地内には高架の鉄道、高圧線があるため、第4図のようにクレーンによる撮影方法で実施した。

古墳時代の遺構面の調査が終了した地区よりさらに掘り下げ、弥生時代の遺構面の検出にかかった。弥生時代の最終面は、黒色粘土層であるが、この層の上に砂層やブロック土で覆われた層が堆積しているが、この面での遺構検出が非常に困難である。この層で方形周溝墓盛土上面、大溝の肩上面の検出をおこなった。第29次調査では、方形周溝墓と考えられるマウンド5基、大溝3条を検出した。引き続き遺構内の掘り下げを実施すると、SD20の大溝中央部より矢柄付石鎌が出土した。石鎌に矢柄が装着したまま出土する例はほとんどなく、今回のように矢柄全体が遺存していた例は他になく、保存方法について検討がおこなわれた。その結果、矢柄を土からはずして取り出すことは困難と考えられたので、まず出土状況を記録するため、現地でレプリカを作ることになった。

シリコンで矢柄全体を覆ったのち、周囲の土とともに取り上げをおこなった。この方法で、レプリカを作成したのち、現在保存処理をおこなっている。

(第2・3図)

弥生時代の遺構内の掘削を終了し、調査地の東端では、縄文時代前期の海岸線まで掘削した状態で、昭和61年6月1日に現地説明会を実施し、研究者や一般市民の方々に公開をおこなった。

(第5図)

以上今回の調査では、多くの新知見が得られたとともに、関係諸機関や関係者のお世話になった。明記してお礼申し上げたい。



第4図 航空写真測量作業風景



第5図 現地説明会風景

II. 位置と環境

鬼虎川遺跡は、東大阪市弥生町、西石切町に広がる縄文時代～中世までの複合遺跡である。

本遺跡は、大阪府と奈良県との境界を画する生駒山地西麓の末端に位置し、丘陵の末端から河内平野の低湿地にかけて広がっている。現在までの調査によって、遺跡の状況が徐々に明らかになってきているので、周辺の遺跡を含めて概観してみたい。

本遺跡で出土するもっとも古い土器は、縄文時代前期に遡る。前期の土器は遺跡の東端で、縄文時代前期の縄文海進時の汀線と考えられる崖付近で集中して出土している。出土する土器の大半は、他地域からの搬入品であり、今まで鬼虎川遺跡周辺には前・中期の遺跡は発見されておらず、大規模な遺跡が存在したとは考えられない。

縄文時代の終末、次第土器の時代になって、鬼虎川遺跡の西端、水走遺跡と重複する地点で長原式と弥生前期（中）段階の土器が共伴して出土した。^{注10}この他、鬼虎川遺跡では前期の包含層の最下部で長原式と弥生前期の上器が混在することがわかっていたので、縄文時代終末には、農耕を目的とする人々の集落が小規模ながら成立していたと思われる。長原式土器や弥生前期の甕は、生駒西麓産の胎土をもつ在地産の土器であり、ここで初めて鬼虎川遺跡内に人々の定住を認めることができる。しかしながら、今まで長原式に確実にともなう農耕を証明する遺構、遺物の発見はない。また周辺では西に2.5km離れて稻葉遺跡、北に2.5km離れて中垣内遺跡があり、共に弥生時代前期の上器が出土しており、從来遺跡のなかった河内平野の低湿地にも、小規模な弥生時代の集落が確認されるようになった。

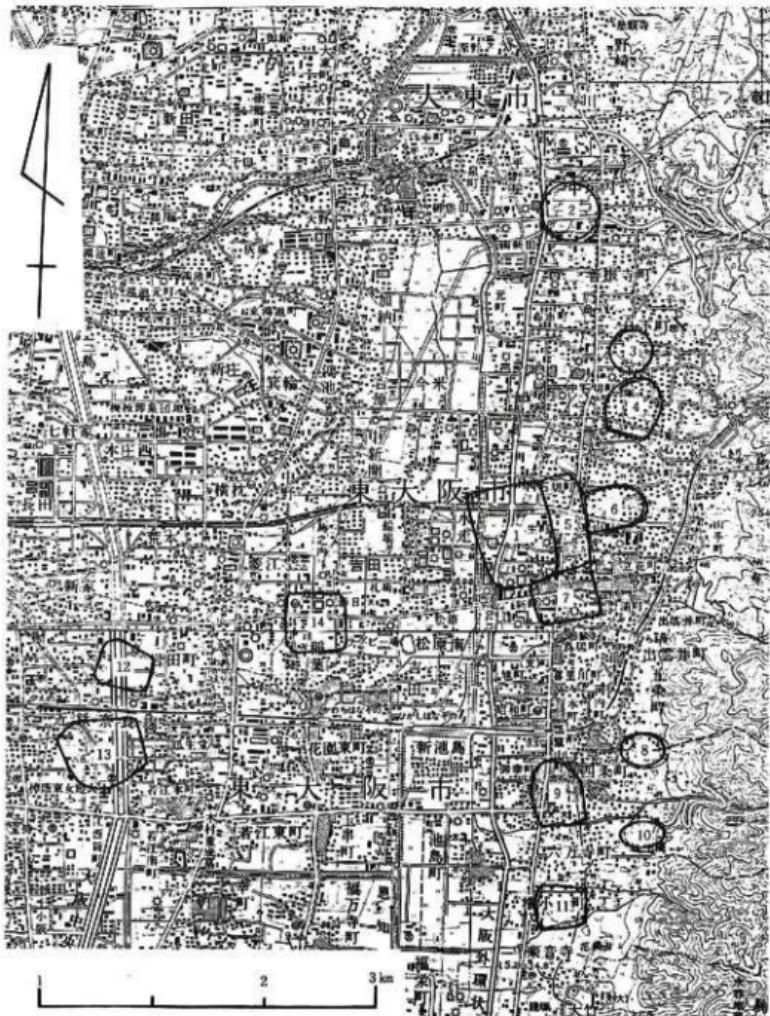
縄文時代晩期の遺跡をもう少し紹介すると、北から日下遺跡、芝ヶ丘遺跡、鬼塚遺跡、押手遺跡、馬場川遺跡があり、生駒西麓の谷川を挟んだ一支丘ごとに点々と分布している。中でも鬼塚遺跡では長原式と弥生前期の土器が共伴することで有名であるが、大略縄文時代終末には集落の規模を減じる傾向にあり、低湿地に集落が出現する要因となった。

弥生時代中頃には、河内平野には瓜生堂遺跡の他、山賀・龜井遺跡など多くの遺跡が出現し、生駒西麓にも本遺跡の他、四条畷市雁屋遺跡・寝屋川市高宮八丁遺跡など大規模集落が出現する。

これらの集落は出土遺物とくに土器の分布などから密接な交流がうかがえるが本遺跡で検出したような大規模な溝で集落をとり囲むいわゆる環濠集落の存在は、集落問には明確なテリトリーがあり、他からの進入を許さないきびしい規制がはたらいていたと考えられる。

本遺跡では、弥生時代後期の遺構は著しく縮小し、集落の中心は近接する四ノ辻遺跡、山畠遺跡、岩滝山遺跡などの小規模な集落に移る。

その後、古墳時代の5世紀後半から6世紀にかけて、本遺跡や植附、神並遺跡で建物跡などが発見されており、丘陵部を中心にして大規模な開発がおこなわれている。この状況は、中世頃まで続くようである。しかしながら、鬼虎川遺跡の大部分を占める低湿地では、再び集落として利用されることなく、中世以降水田として利用されて今日に至っている。



- | | | | |
|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 鬼虎川遺跡 | 5. 西ノ辻遺跡 | 9. 繩手遺跡 | 13. 瓜生堂遺跡 |
| 2. 中垣内遺跡 | 6. 神並遺跡 | 10. 岩滝山遺跡 | 14. 稲葉遺跡 |
| 3. 口下遺跡 | 7. 鬼塚遺跡 | 11. 馬場川遺跡 | |
| 4. 芝ヶ丘遺跡 | 8. 山畑遺跡 | 12. 西岩田遺跡 | |

第6図 遺跡周辺図

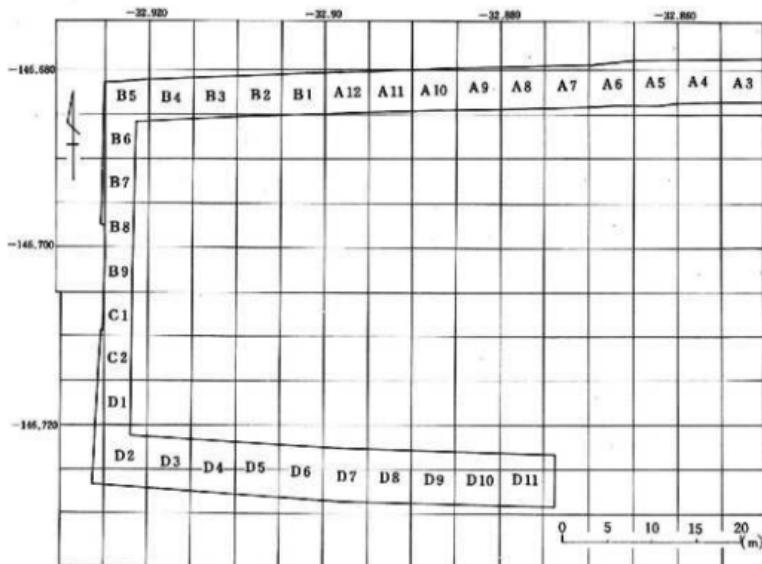
III. 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査地は、幅5m前後の逆コの字形をしており、座標軸で5mメッシュの地区割をおこなっていた従来の調査方法をそのまま使うことは困難であった。このため、調査順序にしたがって、A、B、C、D地区に分割し、さらにその中を5m間隔で区割することにした。このため、各地区の大きさは不統一である。

A地区は、Y軸-32.840を基点とし、5mごとにA1、A2区と区画し、A12区まで続く。A1・A2区は、昭和58年の大阪府教育委員会が実施した23次調査で古墳時代の遺構面までの調査が完了していた地区で、今回の調査で遺構のなかった地区である。A地区とB地区の境は、昭和61年度に調査対象外になっていた地区がちょうどY軸の-32.90であったためにここを境界とした。

C地区、D地区が第30次調査範囲にあたり、C地区は付替道路部分であるため、先行して調査を実施したため、小規模な調査範囲となっている。遺構は、座標軸の数値を明示するように



第7図 調査地点地区割図

努め、遺物の取り上げは、今回の調査地区割で実施した。

2. 層序

今回の調査地は、東西に細長く、堆積層も厚いため層序は地点によって大きく異なって T.P. 2.0m いる。このため、同一基準で整合することはなかなか困難な作業である。

そこで、今回の主たる遺構である方形周溝墓及び溝などの弥生時代の遺構がもっとも良く理解できる地点を選んで基本的な層位を説明しておきたい。

第8図は、C地区とD地区の境で東西断面を観察したものである。厚さ約1mの盛土を除去したのちの土層は以下のとおりである。

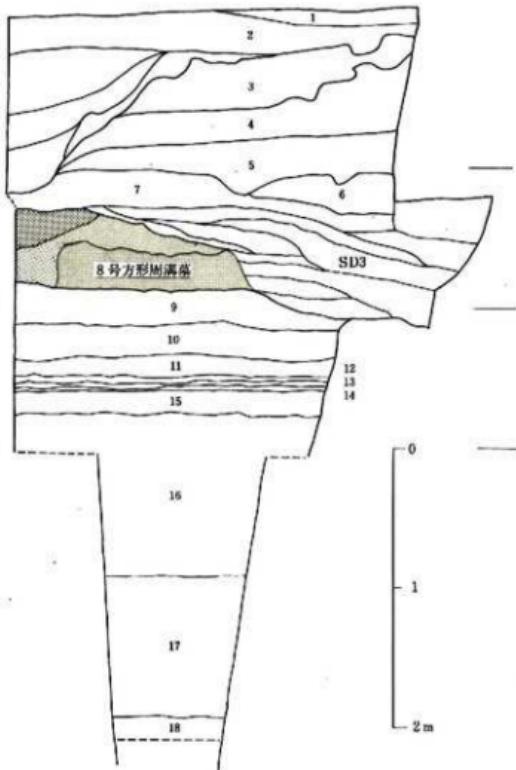
第1層は、旧表土。

第2層は、床土として

客土した土で、いずれも近代以降に属する。第3層は、灰オリーブ（5 Y 4/2）で、第3層を切り込んで、近世以降の掘り上げ田に伴う溝などが検出されている。

第4層オリーブ黒色（10 Y 3/1）砂混粘土質シルトで、4層上面で中世から古墳時代の遺構を検出した。断面観察している地点では古墳時代の遺構は検出できないが、調査地の東側では、第3層内から古墳時代の上器が出土し、第4層上面で溝、柱穴、土坑などの遺構を検出した。第5層青緑灰色（10 G Y 4/1）粘土質シルト、第6層青黒色（5 B G 2/1）粘土質シルトと続く。

第7層は黒色（10 Y 2/1）シルト質粘土で植物遺体を含み、弥生時代中期の遺構を覆っている。弥生時代後期頃に相当すると思われる。第8層は遺構内堆積土、方形周溝墓・大溝の盛土を一括する。第9層黒色（10 Y 2/1）粘土層で植物遺体を含み、地点によって縄文時代晚期突



第8図 基本層序

帶文土器が少量出土している。

第10層オリーブ黒色（10Y3/1）シルト質粘土、11層暗緑灰色粘土質シルトと無遺物層が続き、以下に12層黒色（2.5G Y2/1）混暗オリーブ灰色（5 G4/1）粘土質シルト、13層黒色（2.5G Y2/1）粘土、14層黒色（2.5G Y2/1）混暗オリーブ灰色（5 G4/1）粘土質シルト、15層黒色（2.5G Y2/1）粘土と続く。今回の調査では12層～15層では、A3～A5区で縄文時代中期の土器が少量出土したが、他地区では何らの遺物も認められず黒色粘土と暗オリーブ灰色粘土のブロック層で交互に続いている。河内湖が淡水から湿地帯に変わる頃の堆積と思われる。

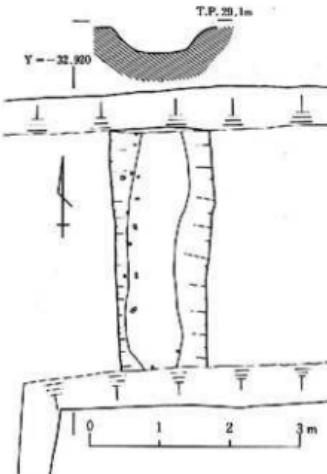
16層以下は層の堆積に変化はない。特に16層、17層はほとんど同一層で、17層下層で細砂～細砾を多く含むようになる。16層は暗オリーブ灰色（2.5G Y3/1）シルト質粘土、17層灰色（10Y4/1）シルト～細砾層となる。第18層は礫層（細～中礫層）である。第18層が地山となる。縄文海進以前の陸地と考えられる。第17層下部、18層上面から、タヌキ、シカ、クジラの骨が出土している。第18層は、調査地の東側から西へゆるやかな傾斜をつくって続いている。

3. 中世～近世の遺構

近世以降の遺構としては、D地区で検出したSD1がある。旧表上直下で検出した溝で、幅1.5m以上、深さ30～40cm以上を測る。溝底付近の西肩部で、肩に沿って並ぶ杭列を確認した。杭列の間隔は、不規則で20～50cmの間隔で、10本を確認した。杭は、径10cm前後で、長さ約30cmが残存していた。

この溝は、恩智川周辺の水田で近世以降畑作に伴って盛んにつくられた水路と考えられ、掘り上げ田と言われている。

中世の遺構で明確なものは検出できなかった。ただ第2層上面、第3層上面で幅20～30cm、深さ10～



第9図 掘り上げ田に伴う水路（SD1）



第10図 A9・10区中世の遺構



第11図 C地区 中世の遺構

20cmの小規模な溝が等間隔に並んで検出されている。周辺より、瓦器碗などの細片が出土しているので、中世の鋤溝などの可能性が考えられる。

4. 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、第29次調査区のA 7～A 12区及び第30次調査D地区（X = -32.87～-32.90の間）で遺構を検出した。この地点より西では遺物は少量混入するものの、遺構は検出できない。また、第29次調査範囲の方により遺構が密集して検出した。さらに、昭和59年の大阪府教育委員会の22次調査では、古墳時代の掘立柱建物を中心とする良好な遺構を検出しているので、古墳時代の遺構の中心は今回の調査地の北側及び東側にかけて広がるものと思われる。

古墳時代の遺構面はT.P.2.5mの深さで検出されるが、南側のD地区では中世以降の遺構と重複して検出される。今回の調査範囲では、明確な建物跡等の遺構は検出できず、溝状遺構、土坑状の遺構が主体をなしている。以下遺構毎に記述をすすめていく。

柱穴群

今回の調査範囲では、計50ヵ所の柱穴を検出しているが、規則的な配列などは認められない。第29次調査A 7・A 8区で検出したS P 1～S P 8は、掘形とともに柱痕を確認しており、小規模な掘立柱建物の存在がうかがわれる。

S D 13

幅25～50cm、深さ10～15cmでA 8～A 9区にかけて約5mの「」弧状に確認した。溝は途中でS D 15を切り、S D 16と交差している。内部より、土師器・須恵器の細片が出土している。

S D 14

幅45cm、深さ15cmの小規模な溝で、A 8区内を南から北へ延長約5mを検出した。内部より土師器甕（14）、瓶（13）須恵器片などが出土しており、出土遺物から5世紀末～6世紀前半の遺構と考えられる。

S D 15

幅40cm、深さ15cmを測る小規模な溝で、中央でS D 13に切られ、北端でS X 2で削平されている。出土遺物は、ほとんど認められない。

S D 16

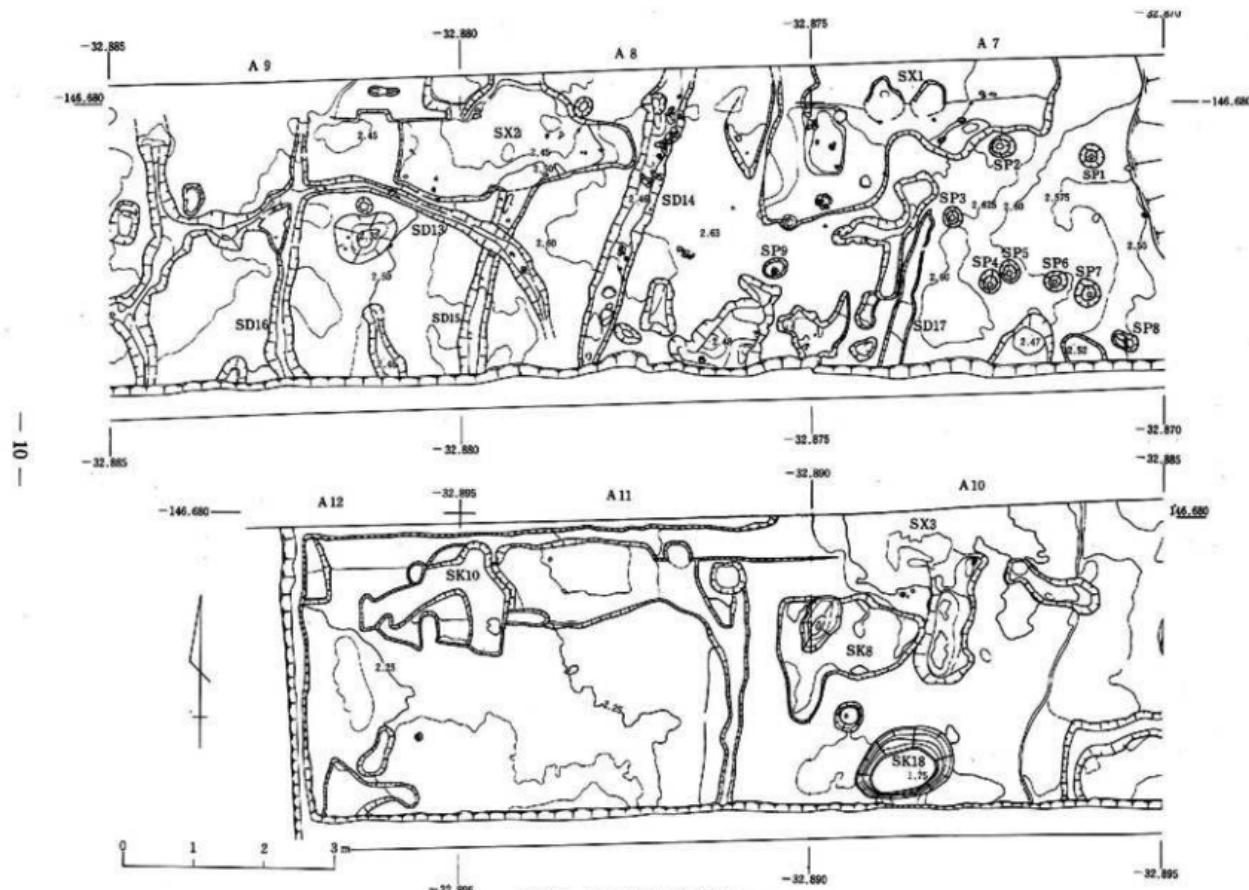
幅45cm、深さ15～20cmの規模で北から南へのびている。北端でS D 13と交差するが、先後関係は不明である。

S X 1

A 7～A 8区で検出した。変則的な方形状を呈し、1辺4m以上、深さ10cm程度の浅い土坑である。内部より須恵器杯身（7）（8）、土師器高杯（21）などが出土している。出土遺物より、5世紀末～6世紀前半の時期の遺構と考えられる。

S X 2

長辺3.5m以上を測る不定形な梢「」形状を呈する土坑で、深さ10～15cmと浅く遺構の規模、



第12図 A地区古墳時代遺構実測図

性格とも不明である。内部より須恵器杯蓋（4）、土師器片が少量出土している。

S X 3

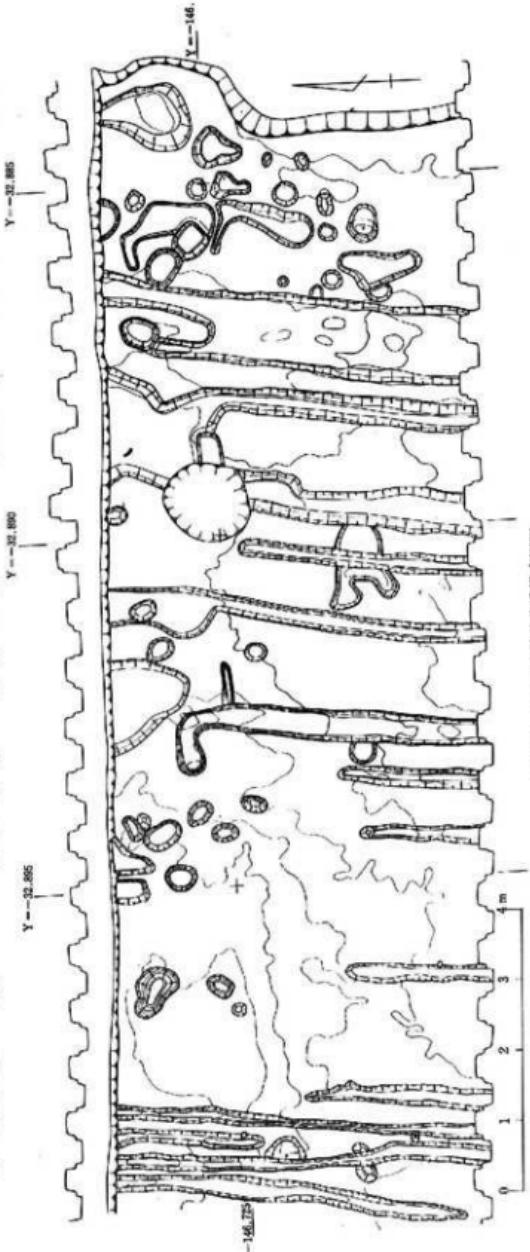
A 10区を中心にして深さ約5cm程度にわずかに凹む。輪郭は明瞭でない。内部より、須恵器杯（3）高杯（16）、土師器甕（15）（17）、瓶（12）などが出土している。出土遺物から5世紀末～6世紀前半に属すると思われる。

その他S K10、SK21なども不規則な形状を呈し、遺構の性格、規模などは不明である。第30次調査のD地区では、幅30～40cm、深さ15cm程度の規模をもつ深い溝を14条以上検出した。これらの溝は、古墳時代の遺構を切ってつくられていて、古墳時代以降のものであり、中世～近世に属するものと考えられる。

5. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、方形周溝墓9基、土塙墓5基、井戸状遺構1基、大溝5条及びその他の溝4条などを検出した。以下A地区より順に遺構毎に説明をおこなう。

S D22



第13図
D地区古墳時代遺構実測図

A 3～A 10区で検出した。A 3区の中央で丸く終りし、A 9区で直角に南へ折れまがり調査地外へ続いている。A 5～A 9区までは、溝の南側を検出したのみで全体の形状は不明であるが大略幅2.5m、深さ1.6～2.0mの規模を測る。溝は、第9層黒色粘土を切り込んで掘削し、掘った土を溝の両側に盛土をおこなっている。溝内の堆積土は、第14図（A 10区）の観察結果から、3層に区分できる。

第1層 黄灰色（2.5Y4/1）細砂～中粒砂、層厚1.0m。

第2層 オリーブ黒色（5Y2/2）

シルト質粘土混細砂～中粒砂、植物遺体を多量に含む。層厚40cm。

第3層 灰色（5Y4/1）粘土に黑色（5Y2/1）粘土をブロックで混じる。層厚30cm。

また第15図（A 8区）の断面観察では6層に区分できる。

第1層 黒色（2.5Y2/1）中粒混粗砂、層厚30cm。

第2層 黒色（2.5Y2/1）小礫混シルト質粘土、層厚10cm。

第3層 黒色（7.5YR1.7/1）小礫混中粒砂含むシルト質粘土、層厚8～10cm。

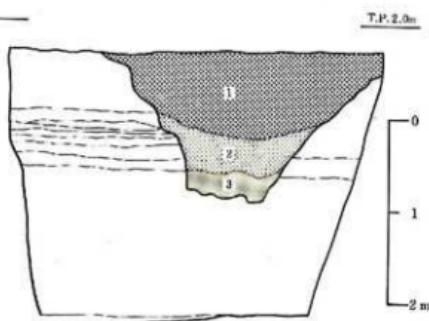
第4層 黒色（2.5Y2/1）中粒砂混シルト質粘土、層厚45cm。

第5層 黒褐色（5YR2/1）小礫混細砂～シルト、植物遺体を含む。層厚80cm。

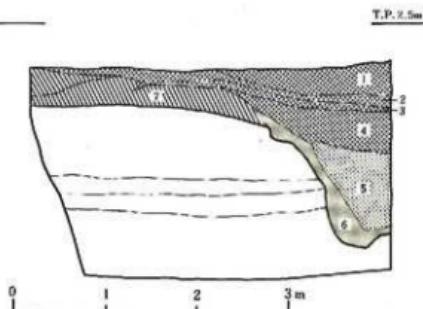
第6層 黒色（10YR1.7/1）粘土、地山の土をブロック状に含む。層厚10～30cm。

第7層 盛土

溝内の堆積は、大きくは上下に分けられる。上層は第14図でもわかるように厚さ1.0m以上の砂層で溝の両側を覆って全域に堆積している。このことから、最終的な溝の埋没は洪水等で一気に埋まったことがわかる。下層は、植物遺体を含む層で、第15図では80cm以上の堆積が認められる。また、溝を掘削した土を両肩に盛土しているが、この盛土が溝内に流れ込んでいる様子がうかがえる。溝底は、A 8区付近がもっとも深く、東へ徐々に高くなり、東端ではT.P.



第14図 SD22 A 10区断面図



第15図 SD22 A 8区断面図

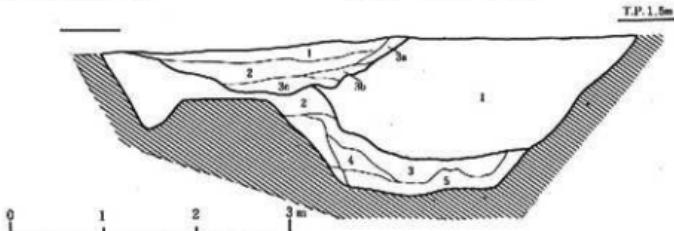
1.32mを測り、西端とでは1.0m以上の高低差が認められる。A10区の南端ではT.P.0.32mを測り、11cm高くなるだけであるが、A8区での溝中央部がトレンチ外へ広がることを考えれば、高低差はさらに広がると思われる。以上のことから、SD22は東及び南からの水を集め、北ないし西北に流す必要があり、北側にのびている可能性が高いと思われる。溝内からは弥生土器壺(54)(57)(69)、甕(61)(71)、鉢(58)(63)(64)などの他、木製鍬未製品(29)5)が出土している。出土遺物から溝の時期は畿内第II~III様式に属すると思われる。

SD21

B5~B6区で検出した。2条の時期の違う溝が切り合っている。新し



第16図 SD21平面実測図

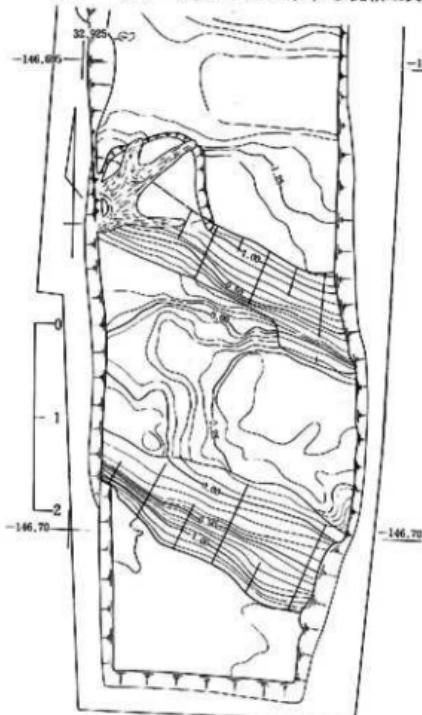


第17図 SD21西壁断面実測図

い溝の規模は、幅3m、深さ0.5mで古い溝の南肩を切って掘削されている。

新しい溝の堆積層は、3層に区分できる。

1層 オリーブ黒色(5Y3/1)砂混粘土質シルト。



第18図 SD 20平面実測図

2層 オリーブ黒色(5Y2/2)粘

-146.65 土質シルト。

3a層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)細
礫混シルト質粘土。

3b層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)粘
土質シルト。

3c層 オリーブ黒色(5Y3/1)礫
混シルト。

古い時期の溝の規模は、現存で幅3.5
m、深さ1.45mを測る。

1層 オリーブ黒色(7.5Y3/2)中砂
～シルト。

2層 黒色(2.5Y2/1)粘土。

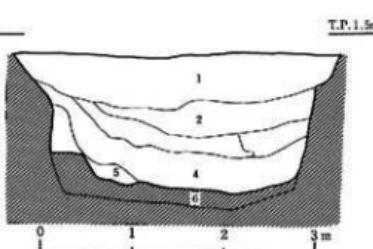
3層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘土、
植物遺体を含む。

4層 黒色(2.5Y2/1)粘土。

5層 黒色(2.5Y2/1)粘土、地山の
ブロック土を含む。

上面から1.4mまで砂層が堆積してお
り、洪水等で一気に埋まったことがうか
がえる。内部から出土遺物はほとんど検
出できないが、(59)の甕が出土してお
り、ほぼII様式に属すると思われる。

S D 20



第19図 SD 20西壁断面実測図

幅3.3m、深さ1.35mの規模で断面逆
台形を呈する溝である。溝底面は、東へ
傾斜する。溝の北肩には、掘削時の土を
盛り上げている。また溝の北側では柳の
根を検出している。第12次調査でも大溝
の肩で同様の木の根を検出している。大
溝の肩には、柳を植えて崩壊を防いでい
たものと思われる。溝中央部より矢柄付

石礫を検出した。矢は、溝のほぼ中央部付近で溝底から約1mほど浮いた状態で、先端を東に向け、ほぼ水平の状態で出土した。

溝内の堆積土は、5層に分けられる。

1層 暗緑灰色(10G Y3/1)細砂～中粒砂。

2層 オリーブ(5Y3/1)シルト～極細砂、植物遺体を含む。この層下部より矢柄付石礫が出土した。

3層 オリーブ黒色(7.5Y2/2)粘土質シルト、植物遺体および自然木を多量に含む。

4層 緑黒色(7.5G Y2/1)粘土質シルト、地山の土をブロックで含む。

5層 黒色(2.5G Y2/1)粘土。

6層 オリーブ黒色(5Y2/2)粘土。
地山。

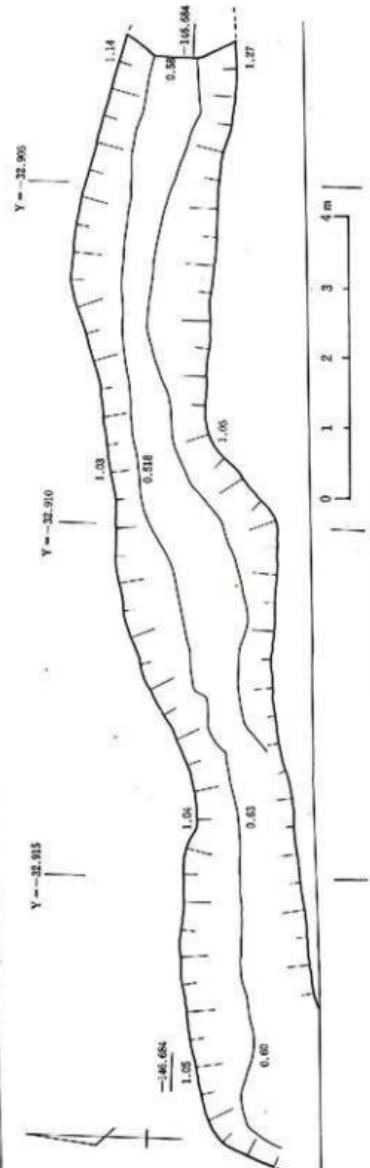
S D21と同様、粗砂が溝内の上半を覆っており、ほぼ同時期に埋没したものと思われる。溝内から土器は出土せず、時期を確定できないが、ほぼS D21と同時期と考えられる。

S D26

A12～B4区で3～5号周溝墓の下層で検出した。幅1.2m、深さ0.4～0.5mを測る。溝内は、暗オリーブ灰色粘土と黒色粘土のブロック土混りで、遺物は全く含まれていない。

S D3

幅2.1m、深さ0.9～0.95mで南東から北西に向かって延びている。溝の北肩で、8号方形周溝墓に接している。調査がこの地点でちょうど2回に分けられたので、先後関係は明らかでないが、周溝墓の盛土が溝上層に流れ込んだ状態が観察されるところ



第20図 S D26平面実測図

から、同一時期もしくは、溝がある程度埋まつた段階で周溝墓が造られたものと考える。

溝内の堆積上は、6層に区分される。

1層 暗オリーブ灰色

(5 Y G3/1) 粘土質粗砂、

大礫～中礫含む。

2層 暗オリーブ灰色

(5 Y G3/1) 粘土質シル

ト、極少礫少量含む。

3層 暗オリーブ灰色

(2.5G Y3/1) 粘土質シル

ト、極少礫、植物遺体少量

含む。

4層 黒色 (7.5Y2/1)

粘土質シルト、植物遺体を

含む。

5層 暗オリーブ灰色 (2.5G Y4/1) 細砂、中～少礫含む。

6層 黒色 (2.5G Y2/1) 粘土質シルト、小礫少量、植物遺体を含む。

内部より弥生土器壺 (105) (113) (120) 鉢 (119) (121) などが出土しており、第II～III様式に属すると思われる。

S D 2

D地区の西端コーナー付近で検出した。北端は、溝底が高くなつており丸く終息すると考えられ、溝は南へ延びていくものと思われる。西肩も近世の水路で切断されているため明確でないが、南端での大略の規模は、幅5.0m、深さ1.3mを測る。溝内の堆積層は、1層灰白色 (5 Y8/1) 細礫～細砂、2層灰オリーブ (5 Y4/2) 粘土、3層オリーブ黒色 (5 Y3/1) 中礫混シルト質粘土となり、1層内より弥生土器壺 (113) (116) をはじめ (107) ～ (111) の土器が出土している。畿内第III様式に属すると思われる。

S D 5

D地区の東側で検出した。幅3.8m、深さ1.9mを測り、南東から北西へ向かって延びている。今回の調査では延長7mを確認した。

溝内の堆積層は、11層に分けられる。

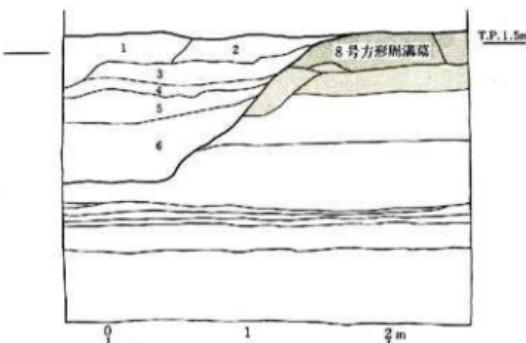
1層 黒褐色 (10YR2/2) 粗砂、中～大礫含む。

2層 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト、少量の極小礫含む。

3層 オリーブ黒色 (5 Y3/1) シルト、少量の小礫を含む。

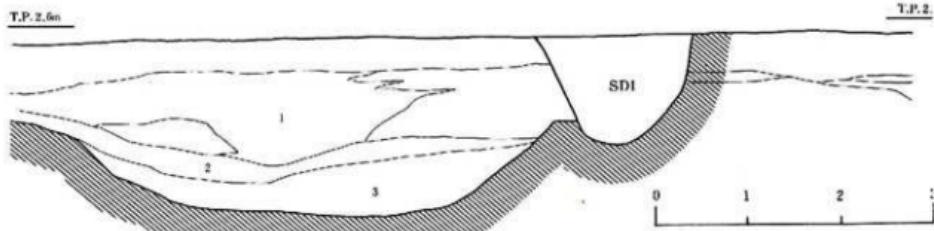
4層 黒色 (5 Y2/1) 粘土質シルト。

5層 オリーブ黒色 (5 Y3/1) 粘土質シルト、少量の植物遺体を含む。

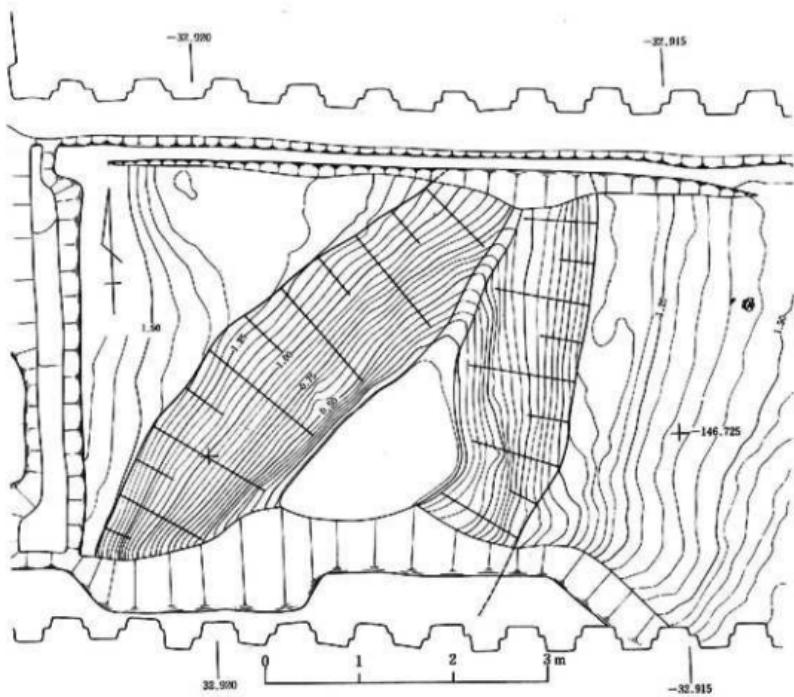


第21図 S D 3 断面図

- 6層 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト。
 7層 黒褐色(2.5Y3/1)細砂、小～中疊含む。
 8層 黒褐色(2.5Y3/2)細砂、小疊含む。
 9層 黒色(10YR2/1)粘土質シルト、植物遺体を含む。

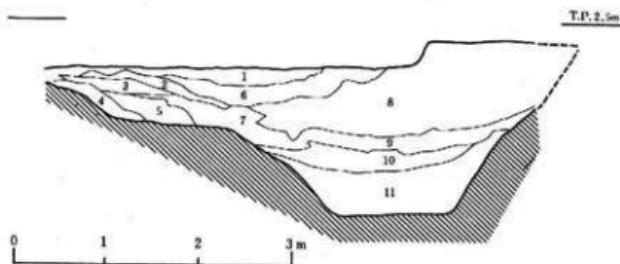


第22図 SD 2 南壁断面図

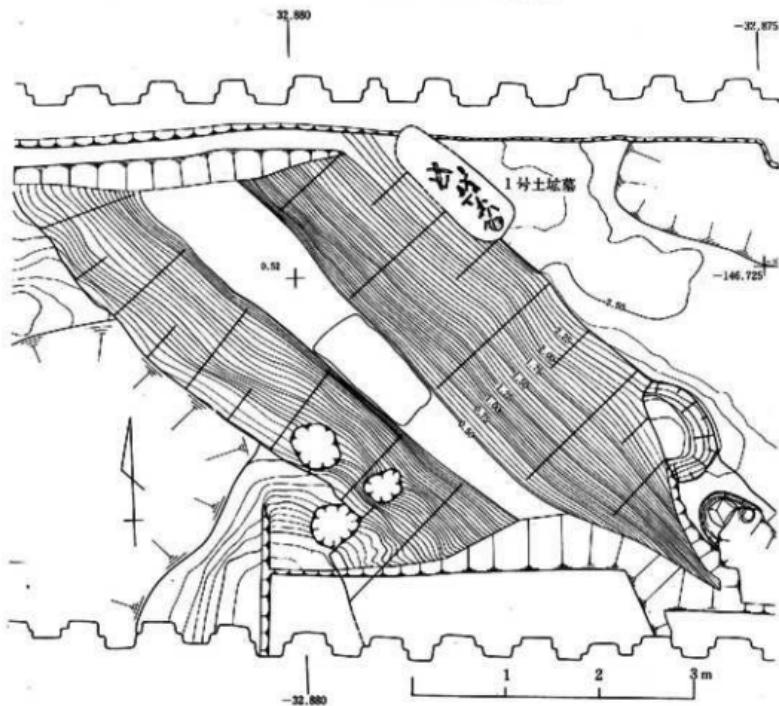


第23図 SD 2 平面尖端図

10層 黒褐色 (10 Y R2/2) シルト質細砂、少量の中～大礫、植物遺体を含む。
 11層 黒色 (10 Y R1.7/1) 粘土質シルト、小～中礫、少量の植物遺体を含む。
 7・8層の粗砂により、溝の大部分が埋まっていることがわかる。また、溝が完全に埋没したのち、東肩付
 近に土壤墓がつ
 くられている。
 内部より、高杯
 (131) 壺 (132、
 134、135、139、
 142) 壺 (133、
 136) が出土し
 ており、第II～
 III様式に属する



第24図 SD 5 南壁断面図



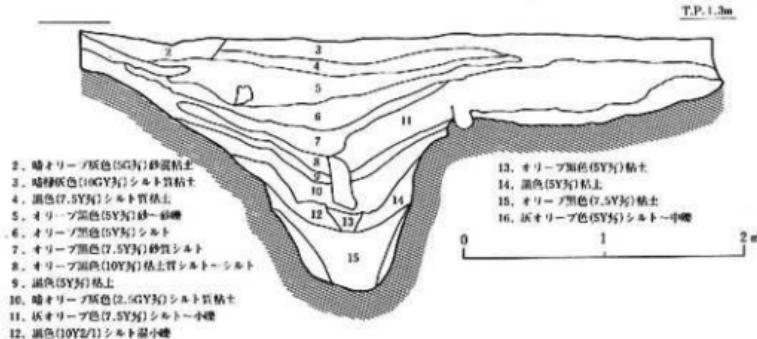
第25図 SD 5 平面実測図

と思われる。

S E 1

7号・8号方形周溝墓に接して掘られ、SD 3の北肩に一部かかっている。検出当初は、溝状遺構と考えていたが、掘りすすむと井戸状の遺構を呈するようになった。検出した地点は、集落跡ではなく、墓域と考えられるので井戸と断定することはできず、土坑など他の用途を考えた方がよいかもしれない。

溝内の堆積層は、15層に区分できるが、砂層を挟んで大きく3層に区分することができる。上層は、第2～4層までで、シルト質粘土層が遺構全体を覆っている。中層は、5～7層及び11層で主に砂層ないし細砂層で、遺構の最終末に一気に埋没した状態がうかがわれる。下層が、遺構が機能していた時期に堆積したと考えられる層で、10層からは壺(159)が出土した他、木製の鋤(296)が井戸底に正立した状態で出土した。この井戸状遺構は、短期間に埋まったことがうかがわれ、出土遺物から畿内第II様式に属すると思われる。



第26図 S E 1 西壁断面図

第1号方形周溝墓

A10～11区にかけて検出した。北側半分を検出し、南側にさらに広がっていると思われる。現状での規模は、東西5m、南北2m、高さ0.44mを測る。主体部は、検出できなかった。

第2号方形周溝墓

A11～A12区にかけて検出した。北側の約1/3を検出し、大半は南側に広がると思われる。現状での規模は東西6.4m、南北1.5m、高さ0.67mを測る。主体部は検出できなかった。

第3号方形周溝墓

A12～B1区にかけて検出した。北側半分を検出し、南側にさらに広がっていると思われる。現状での規模は東西7.6m、南北3.0m、高さ0.53mを測る。主体部は検出できなかった。

第4号方形周溝墓

B2区で検出した。南側1/3を検出し、さらに北側に広がっていると思われる。現状での規

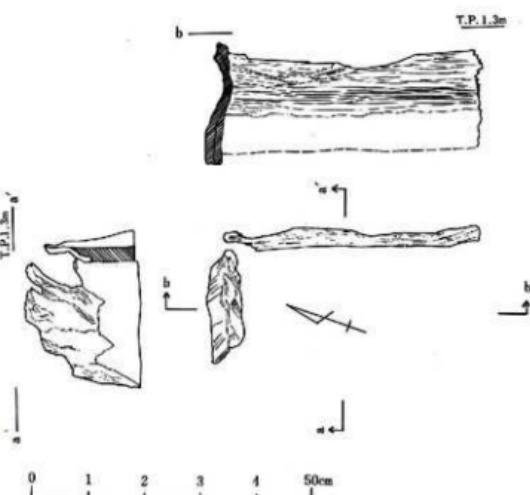
模は、東西約3m、南北1.5m、高さ0.2mを測る。現状では方形周溝墓と断定できないが、盛土南端で板材を組み合せた木棺状の施設を検出した。板材は、長辺45cm、短辺18cm遺存しており、逆コの字形に組み合せて検出した。出土地点の湧水が激しく、墓壇掘形、人骨等は検出できなかったため、木棺と断定することはできない。

第5号方形周溝墓

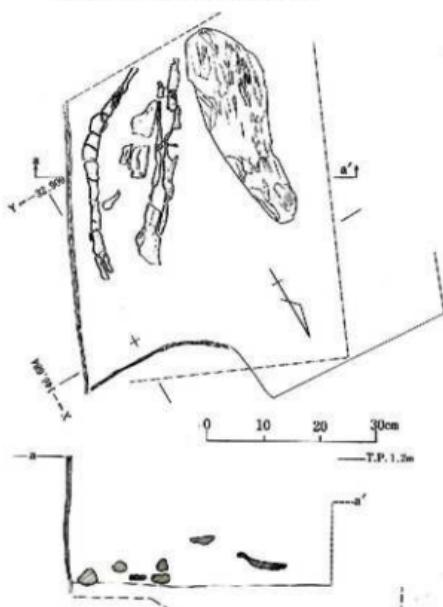
B2区で検出した。北側の約1/4を検出し、全体は北側に広がっていると思われる。現状での規模は、東西3m、南北1.3m、高さ0.5mを測る。南東端に木棺と人骨の一部を検出した。木棺は、土留用の鋼矢板によって切断されており、約1/5程度を確認している。木棺の小口、底板は、欠板によって原形をとどめず、歪に折れ曲がっている。わずかに側板が長辺50cm、高さ22cm遺存していた。内部より、大腿骨と思われる人骨及び蓋板の残片が出上している。頭位は、S-35°-Wと推定できる。人骨の性別は不明である。

第6号方形周溝墓

第12次調査で検出した第5号方形周溝墓で、調査終了後埋め戻されてたものを、今回の調査で再掘削をおこなった。¹⁹⁸⁸ 調査報告書によると、形状はほぼ正方形を呈し、北東側で1辺4.3mを



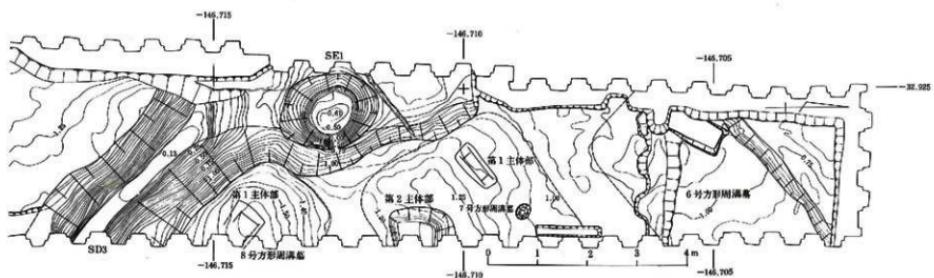
第27図 第4号方形周溝墓板材実測図



第28図 第5号方形周溝墓第1主体部実測図



第29図 第1～5号方形周溝基実測図



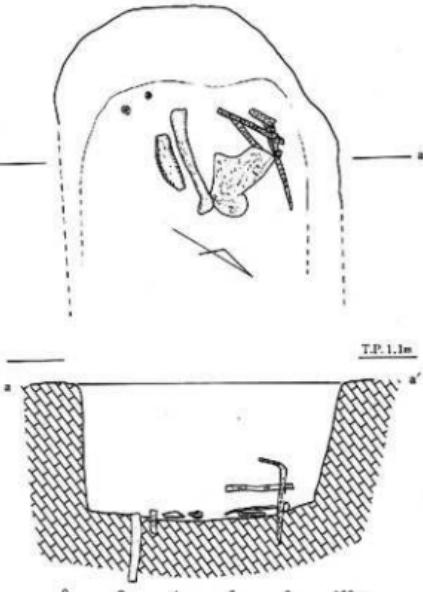
第30図 SD3、SE1、第6～8号方形周溝基実測図

測る。高さは約58cmを測り、北西側周溝は幅95cm、深さ30cmのV字溝であった。主体部は2ヶ所で検出し、第1主体部は長さ150cm、幅60cm、深さ38cmの墓壙に木棺が残存し、仰臥屈肢の成人骨を検出している。第2主体部は、長さ80cm、幅44cm、深さ30cmの墓壙に木棺の残片と小児骨を検出している。

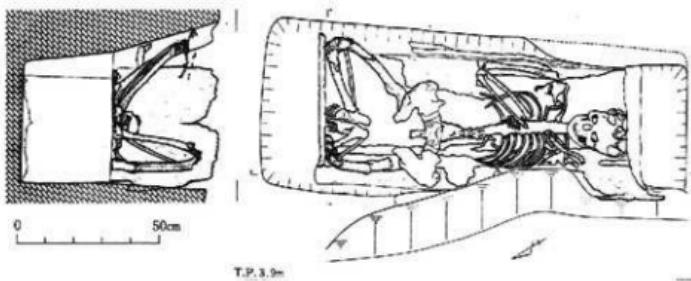
第7号方形周溝墓

C1～C2区にかけて検出した。現状で短辺3.5m以上、長辺3m以上、高さ0.3mを測り、さらに西側に延びると思われる。西側でSE1と接しており、先後関係は確認できず、ほぼ同時期と想定される。主体部は2基検出した。

第1主体部は、西端で検出した。長辺95cm、短辺42cmの長方形の墓壙内に組み合せ式の木棺を検出した。木棺は



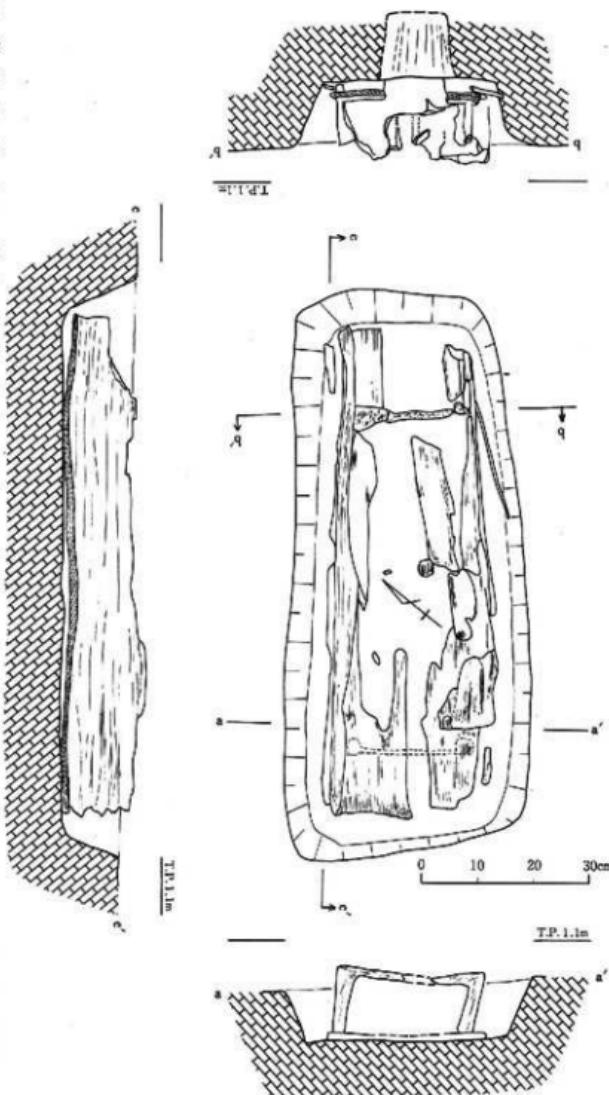
第31図 第7号方形周溝墓第2主体部実測図



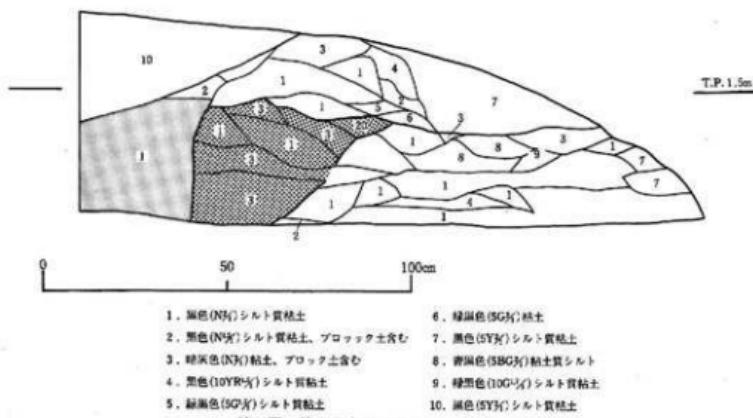
第32図 第6号方形周溝墓（鬼虎川第12次報告書5号方形周溝墓第1主体部より掲載）

長辺87cm、短辺23cmの底板の両側に小口板の大きさだけ、挟りを入れ、小口板を墓壙底面より約10~15cm差し込んで組み合せている。その後、「」形の蓋（内部はくり抜いている）を被せている。内部より小骨片が1点出土したが、その他の遺物は認められなかった。小児用木棺と考えられ、木棺は他の部材の転用材と考えられる。

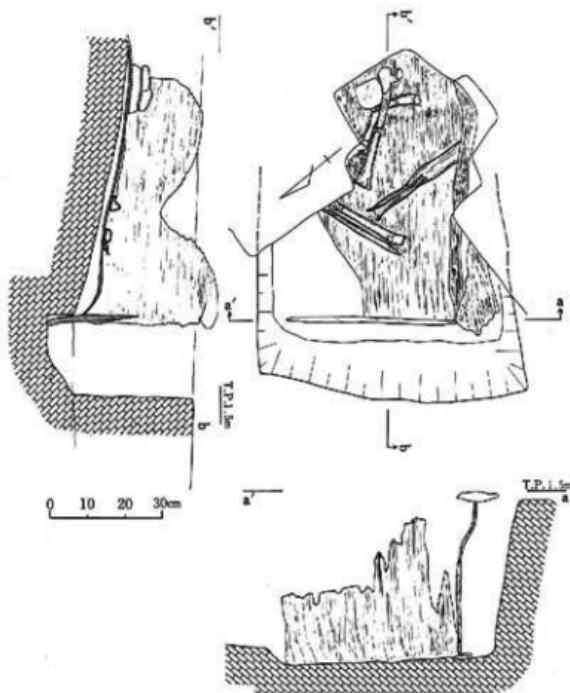
第2主体部も、土留用矢板で切断されており、1/3程度を確認した。当初矢板打ち込みによる攪乱と考えていたが、掘りすむ中で、人骨を検出し、主体部であることを確認した。現状で長辺50cm以上、短辺50cm、深さ22cmの墓壙を検出した。主体部は、木棺と考えられるが痕跡は確認できなかった。底部より大腿骨の一部と考えられる人骨を検出した。人骨の性



第33図 第7号方形周溝墓第1主体部実測図



第34図 第8号方形周溝墓マウンド断面図



第35図 第8号方形周溝墓第1主体部実測図

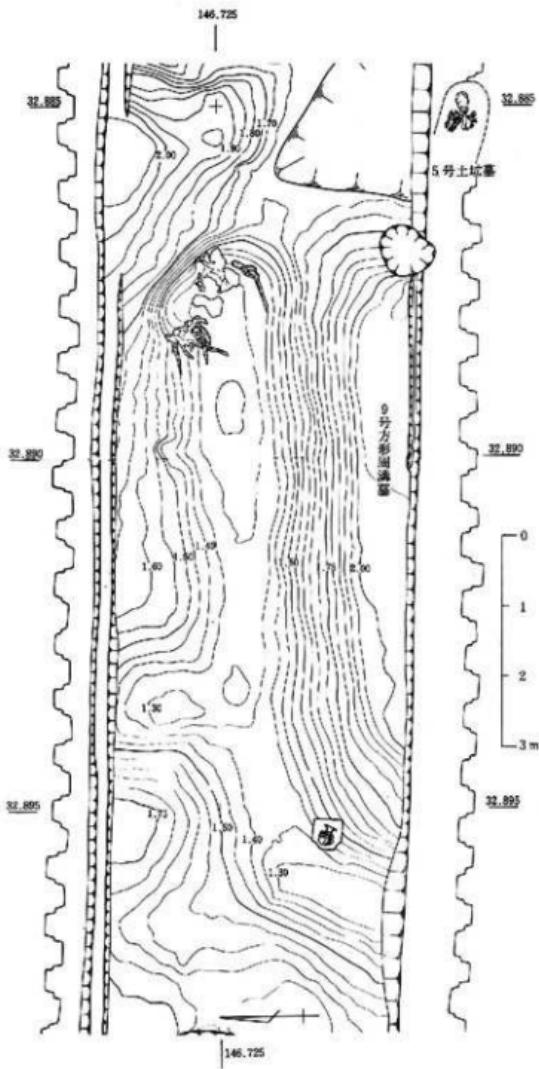
別は不明である。

第8号方形周溝墓

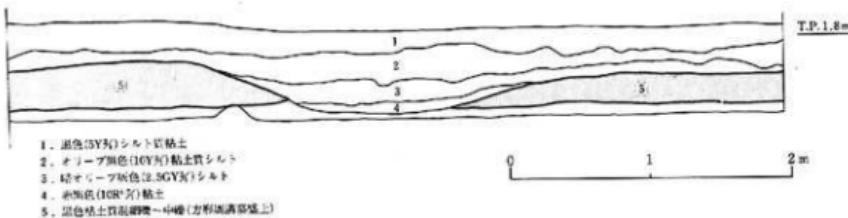
C 2 区で検出した。中心部は、東の調査地外へ広がり、わずかに西コーナーを確認したにとどまる。西で S E 1、S D 3 と接している。検出した現状での規模は、長辺2.5m以上、短辺2.0m以上、高さ0.5mを測り、盛土がほぼ原形を保って検出できた。

本周溝墓の調査は、道路の付替工事の関係で、マウンド中央で調査区が分かれたため南端でマウンドの良好な断面を作成することができた。

第34図をみると周溝墓の盛土は大きく2回に分けられる。まず、ベース面の上に厚さ25cmまでブロック土（1ブロックが20~30cm大の単位）で盛土をおこなったのち墓壙を掘り、木棺を納め、さらに約40cmの盛土をおこなっている。このことから、墓壙のラインは盛土直上で検出することはできず、一段下がった最初の盛土ラインまで掘り下げねばならないことになる。これまでの調査で、盛土直上で墓壙ラインが検出できなかつたことはこの理由によ



第36図 第9号方形周溝墓実測図



第37図 第9号方形周溝墓西溝断面図

るものと思われる。

主体部は、トレンチ東端で1基検出した。土留用の鋼矢板によって切断されているが、約1/3程度を検出した。現状の規模は、短辺70cm、長辺80cm以上の墓壙内に組合式木棺を納めている。矢板によりかなり破壊されているが、底板、小口板及び側板の一部を検出した。小口板は、底板より一段深く掘り込んで組合せており、瓜生堂遺跡の木棺II形式にあたると思われる。人骨は、下腿骨の一部が遺存していたが、性別、年令などは不明である。

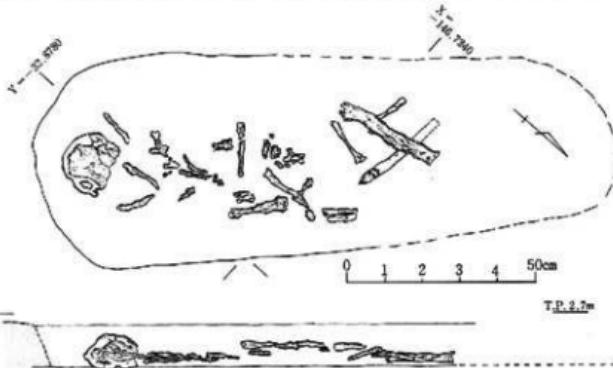
第9号方形周溝墓

D区中央より東で検出した。周溝墓の北端で検出したのみで、全体は南へ広がると思われる。現状で東西6.6m、南北1.5m以上、高さ0.3~0.4mの規模を測る。主体部は検出していない。西周溝が観察できる南壁断面で土層を観察したのが第37図である。

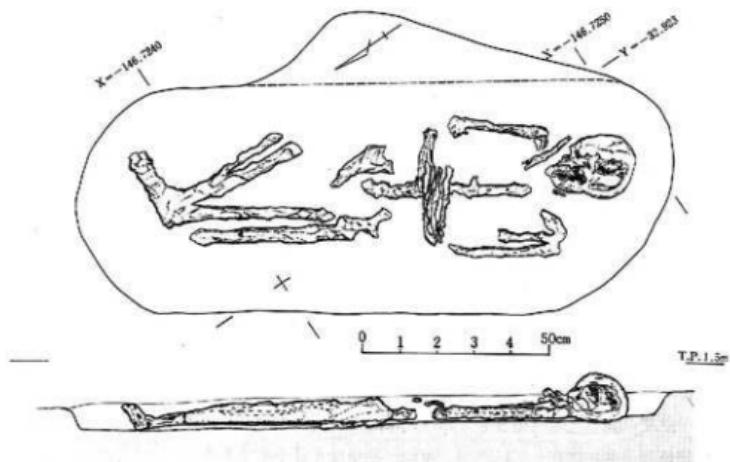
1層 黒色(5 Y 2/1)シルト質粘土、小~中疊合む。周溝墓全体を覆っている。

2層 オリーブ黒色(10Y 3/1)粘土質シルトと黒褐色(10Y R 3/4)細砂~中疊層を交互に含む。周溝内と周溝墓の一部を覆っている。

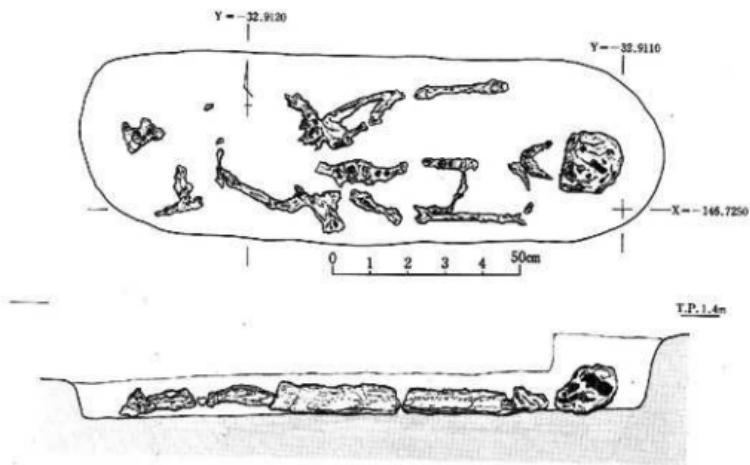
3層 暗オリーブ灰色(25G Y 3/1)シルト、少量の植物遺体と小~中疊を含む。周溝内の



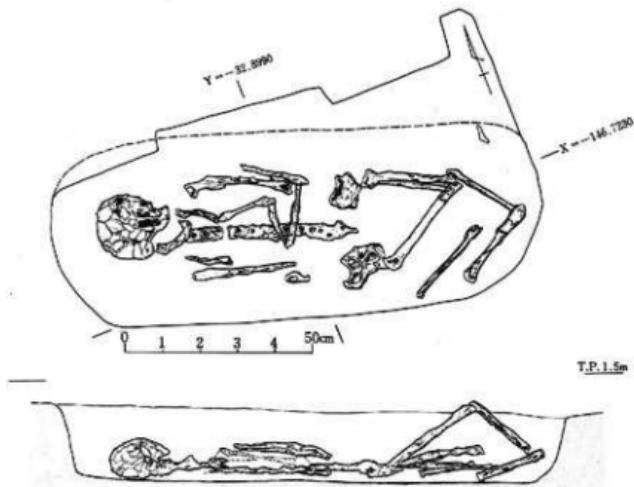
第38図 1号土壤墓人骨実測図



第39圖 2號土墻墓人骨實測圖



第40圖 3號土墻墓人骨實測圖



第41図 4号土塙墓人骨実測図

堆積層。

4層 赤黒色 (10R1.7/1) 粘土、小～大礫を多量に含む。周溝内堆積土。

5層 黒色 (10Y R2/1) 粘土混砂礫～中礫、周溝墓の盛土。

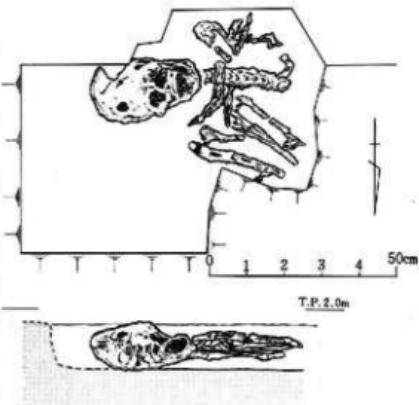
6層 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂層、周溝墓のベースとなる。

5層方形周溝墓の盛土は、他の周溝墓のように地山の土をブロック状に含む粘土層ではなく、細礫混りの粘土であり、明らかに違いがある。方形周溝墓と断定はできず、今後の周辺の調査を待たなければならない。

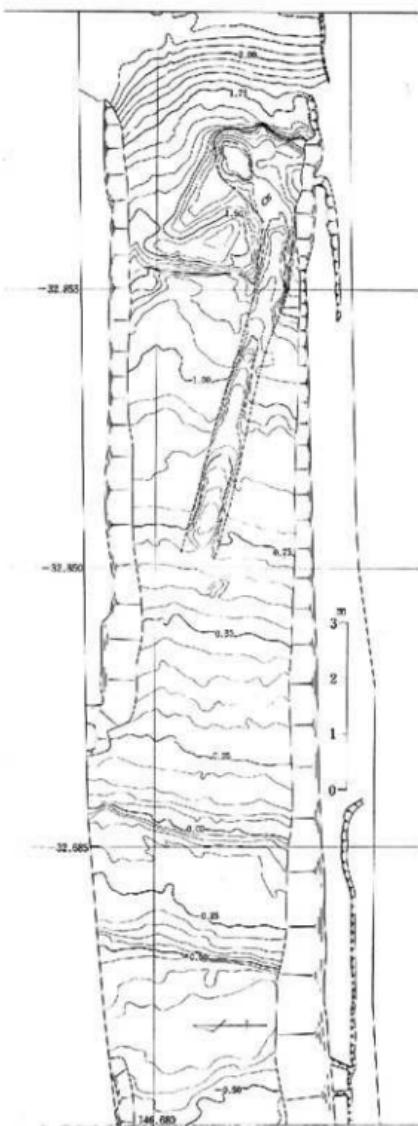
周溝の西北コーナー付近で、溝が埋没し

た段階に遺棄した壺 (90) が出土している他、北周溝の北側でも供獻土器と考えられる土器群が一括出土した。土器群は、西から広口壺 (79) (85)、短頸壺 (77) (84)、高杯 (88) と一直線に並んで置かれていた。(巻頭図版四) 9号周溝墓に伴うものか、周辺で検出している土塙墓に伴うものか断定できない。

1号土塙墓



第42図 5号土塙墓人骨実測図



第43図 縄文時代海岸線実測図

D区のSD5の東肩を切ってつくられている。墓壙の輪郭は明確でないが、大略長辺150cm、短辺55cmの規模を測る。人骨の遺存状態は悪く、頭骨と一部の骨を検出した。成年の男性と思われる。頭位はS-45°-Eの方向を向いている。木棺の痕跡は、検出できなかった。

2号土壙墓

SD2の西肩に接してつくられている。長辺157cm、短辺60cmの墓壙内に仰臥屈肢の形態で埋葬された人骨を検出した。人骨は、ほぼ全景を知ることができたが、遺存状態は悪い。20歳前後の男性と思われる。頭位は、S-30°-Wの方向を向く。木棺の痕跡は、検出できなかった。

3号土壙墓

SD2の東肩に接してつくられている。長辺160cm、短辺50cmの墓壙内に仰臥の形態で埋葬した人骨を検出した。人骨の遺存度は非常に悪い。成年の女性と思われる。頭位は、N-91°-Eの方向を向く。木棺の痕跡は検出できない。

4号土壙墓

第9号方形周溝墓の北西で検出した。土壙墓の東側を土留用の鋼矢板で破壊しているため、墓壙全体の輪郭は不明。大略長辺140cm、短辺50cmの規模を測る。土壙内に、仰臥屈肢の形態の人骨を検出した。人骨の遺存度は、今回の調査で検出した人骨の中で最も良く、ほぼ全体を検出した。成年の男性と考えられる。頭位はN-70°-Wの方向を向いている。木棺の痕跡は検出できなかった。

5号土壙墓

第9号方形周溝墓の北東付近で検出し

た。調査地の南端であるため、土留用鋼矢板でかなり破壊されており、人骨の頭部及び胸部を検出したのみで、墓壙の輪郭などは検出できなかった。

40歳以下の男性と思われる。頭位は、N-90°-Eの方向を向いている。

6号人骨

4号土塙墓の西で人骨を一部を検出した。土壙の輪郭も検出できなかったので、詳細は不明であるが、人骨は成人男性のものと考えられる。

6. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、古墳時代の須恵器・土師器・製塩土器及び弥生時代の土器・木器・石器が出土量の大半を占めている。その他に中世期の上器・磁器・錢貨、縄文時代の土器・自然遺物が少量出土している。特に、弥生時代の矢柄付石鎌は類例の少ない資料である。

古墳時代の出土遺物（第44・45・57図、図版四三～四五）

古墳時代の土器は、主にA地区で出土している。

須恵器 S×1から(7)(8)、S×3から(3)の須恵器杯が出土している。杯身(7、8)は、口径も大きく、立ち上がりも口径に比較して短くなる段階のものである。(31)はS×3内出土で全形を知ることができる資料である。口径10.1cm、高さ5.1cmを測る。口縁部は、内傾後立ち上がり、端部は内傾し段をなし、底部は丸く深い特徴をもつ。包含層出土の土器は(22)(27)の杯のように若干古い様相をもつ土器も知られる。遺構内出土土器は、5世紀末から6世紀前半に属すると考えられる。

土師器 SD14内から壺(14)、瓶(13)が出土している。壺(14)は口径15.3cm、器高30cm以上を測り、球形の体部から「く」の字形に屈曲外反する口縁部がつき、底部は丸底と思われる。体部内面にヘラケズリが認められ、船橋O-M形式に類似する。^式S×1から高杯(21)が出土し、包含層から高杯(37)(38)が出土している。高杯(21)は、腰部に段をもち、(37)は丸い皿状を呈す。

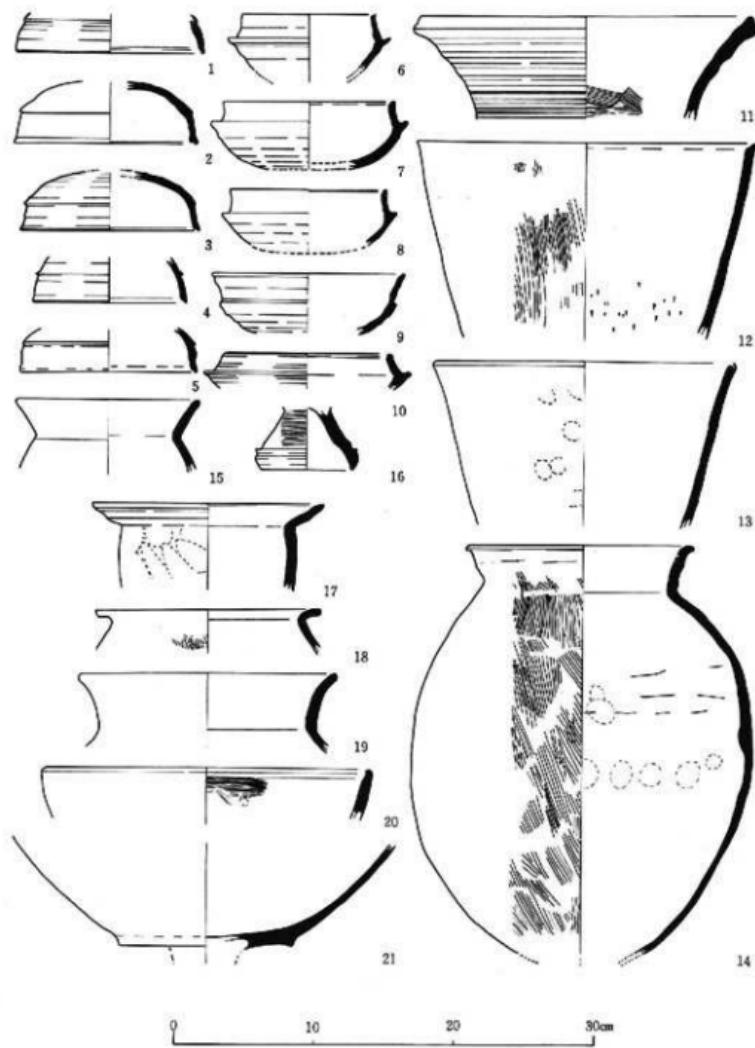
製塩土器 SP7から製塩土器(156)が出土している。ほぼ円筒形にのびる体部に口縁部は内弯気味に直口する。底部は欠損しているが丸底と思われる。その他に(266)～(276)の製塩土器が出土している。口縁部が内傾するタイプと直口するタイプに分かれるが、いずれも小型のものである。

以上の出土遺物から、遺構内出土土器は、5世紀末から6世紀前半に属すると考えられ、今回の調査で検出した古墳時代の遺構もほぼ同時期に考えることができる。

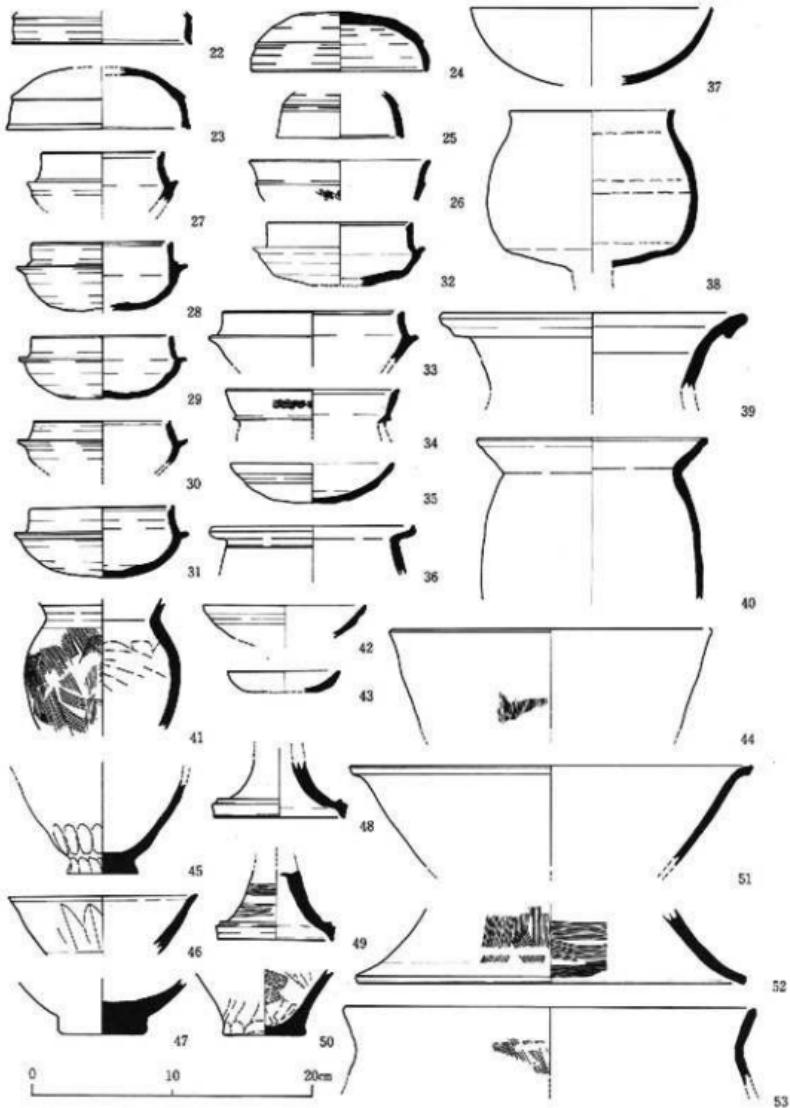
弥生時代の出土遺物（第48～56図、図版四六～六二）

弥生時代の遺物は、土器・石器・木器など多種類のものが出土しているが、特に遺構内出土遺物について詳述しておきたい。

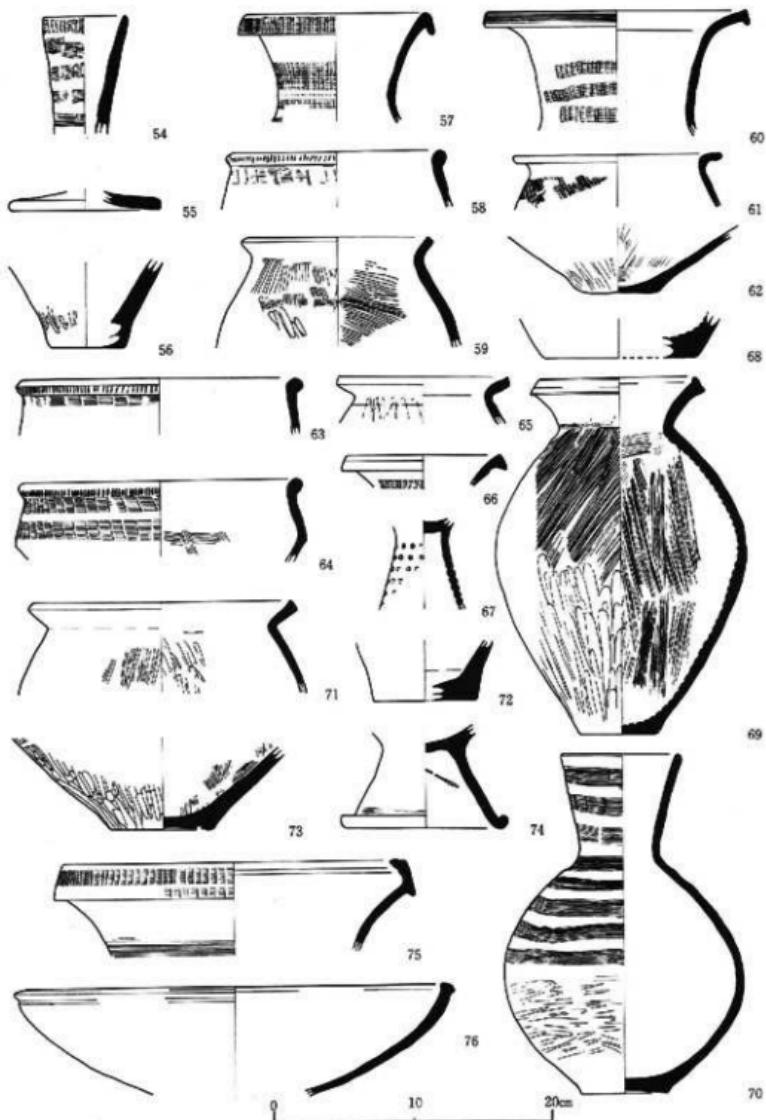
SD22 SD22内から(54、57～58、61～64、69、71、73)の土器が出土している。細頸壺(54)は、直線的に斜め上方にひろがる口縁部に、端部が直口して終る形態をもつ。畿内第II



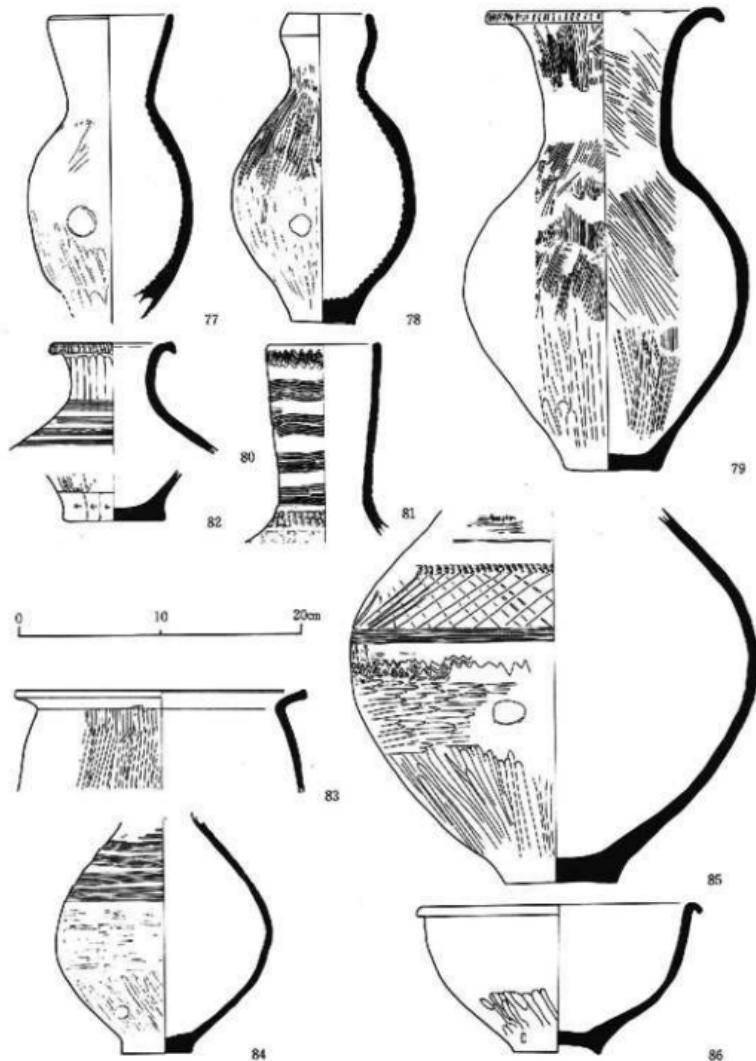
第44図 古墳時代遺構内出土土器



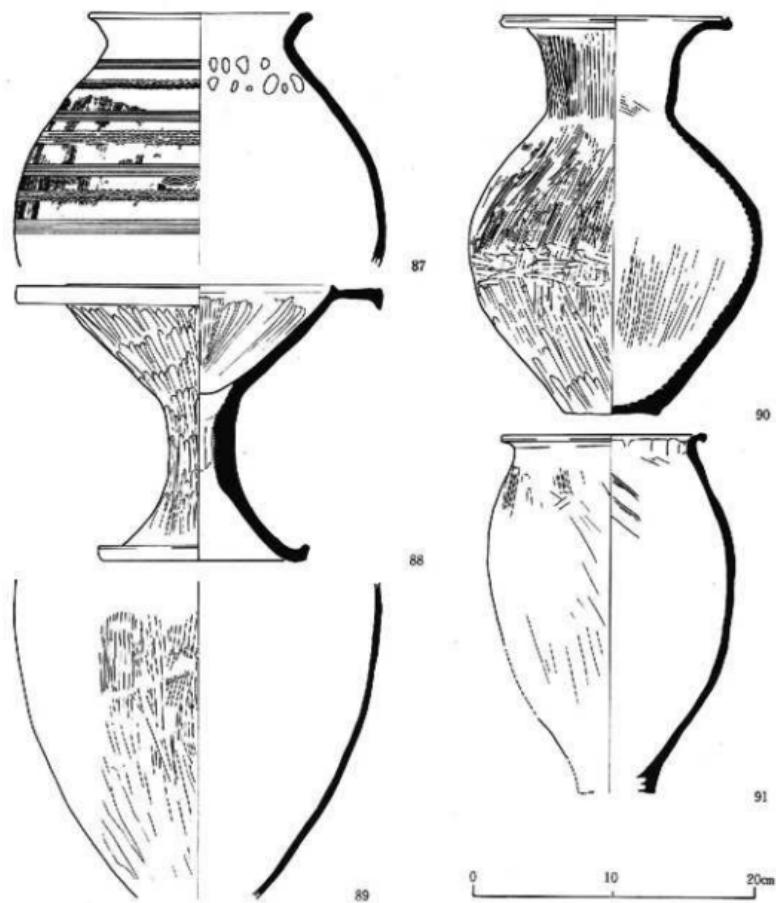
第45図 古墳時代遺構内出土土器



第46図 商生時代遺構内出土土器



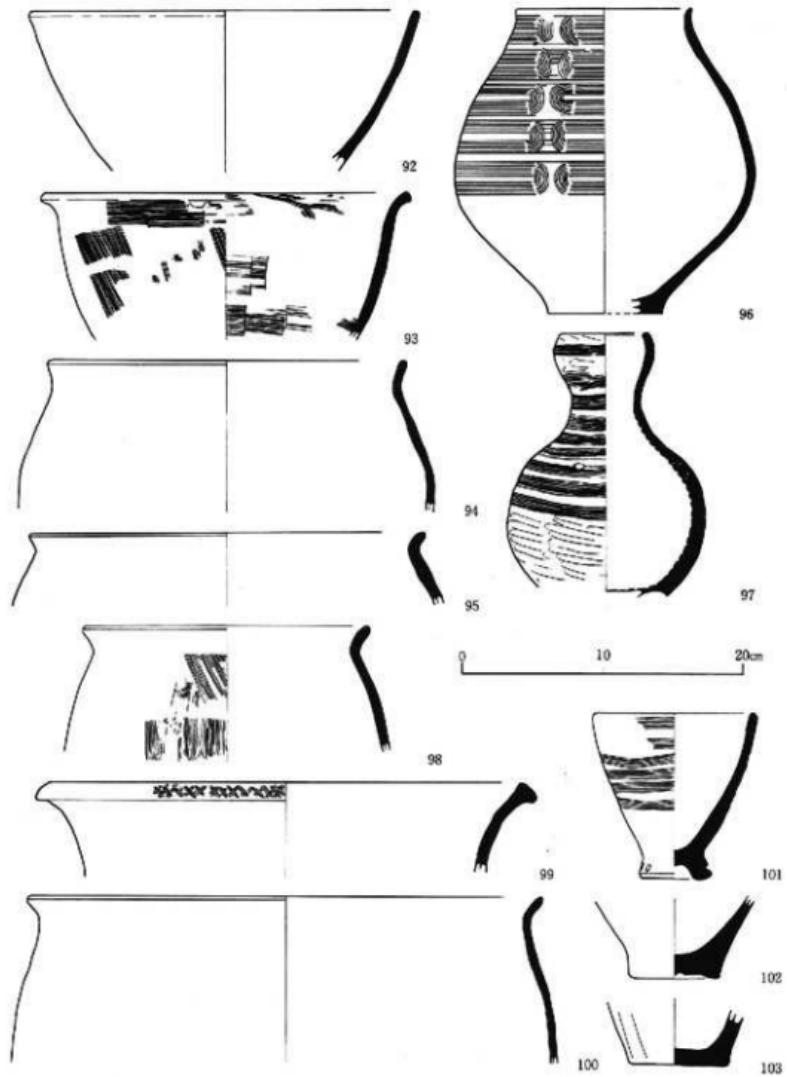
第47図 商代時代遺構内出土土器



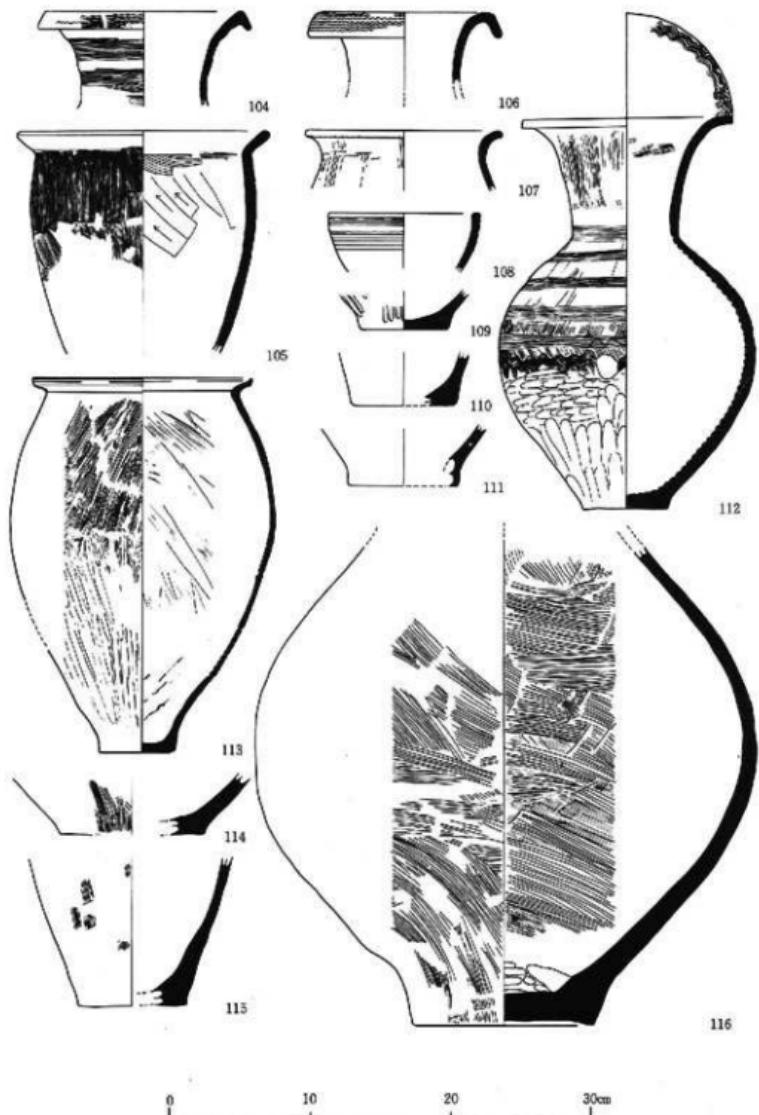
第48図 弥生時代遺構内出土土器

様式に属すると思われる。広口壺(57)は、漏斗状の口頸部に口縁端部を拡張し、簾状文を施文する。畿内第Ⅲ様式に属する。壺(69)は、他地域産で受口状の口縁をつくるが未発達である。以上の出土遺物から、SD22内出土土器は、畿内第Ⅱ～Ⅲ様式の特徴をもっている。

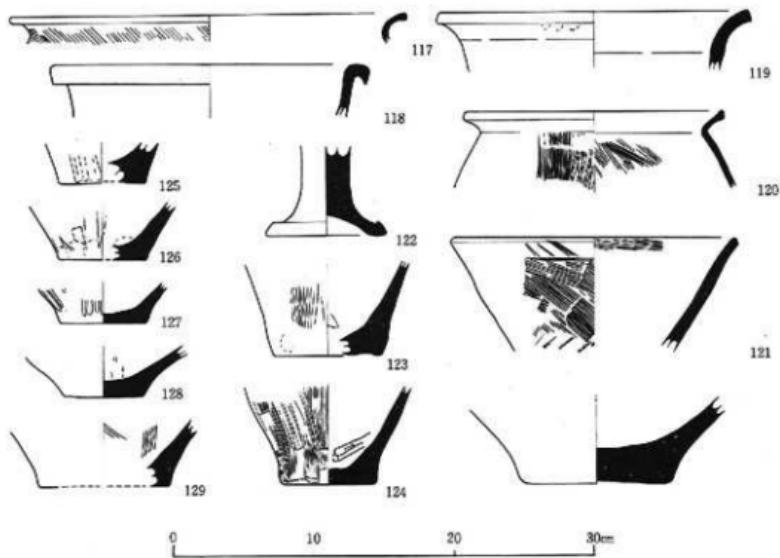
SD3 (104～106, 113～115, 119～121, 125～126) の土器が出土している。(104, 106)は広口壺で、漏斗状の口頸部から下方へ拡張する口縁部がつく。(106)は、口縁端部の拡張を大きくし、波状文を施文している。壺(105)は、胴があまり張らず、口径が復径を上回っ



第49圖 猿生時代遺構內出土土器



第50図 芽生時代遺構内出土土器



第51図 异生時代遺構内出土土器

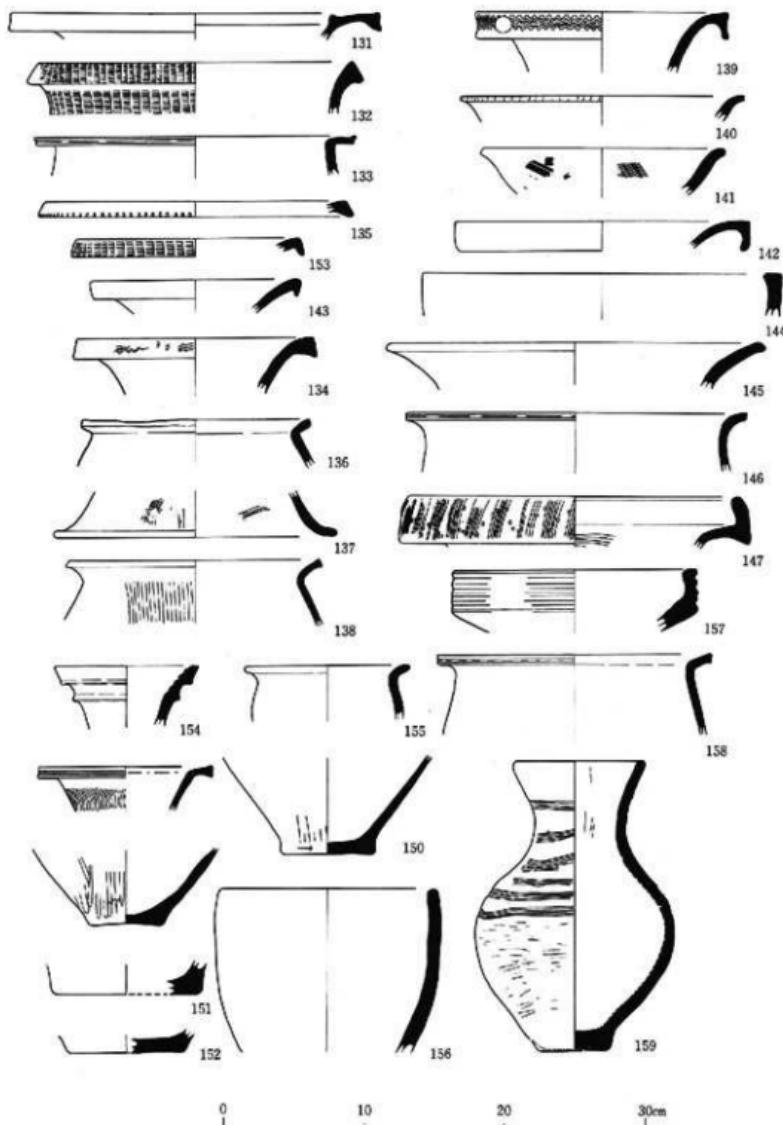
ている。(113)は、胴が少し丸みをもち、口縁端部を受口状につくっている。以上からSD3内出土土器は、畿内III様式の特徴をもっている。

SD2 (107~112, 116~118) の土器が出土した。広口壺(112)は、球形の体部に漏斗状にひらく口頸部がつき、口縁端部をわずかに拡張している。体部の文様も、上半部に直線文、下段に波状文を施している。壺(116)は、口縁部を欠損しているが、球形の体部に安定した平底の底部がつく。以上の土器は、畿内II様式の特徴をもつと考えられる。

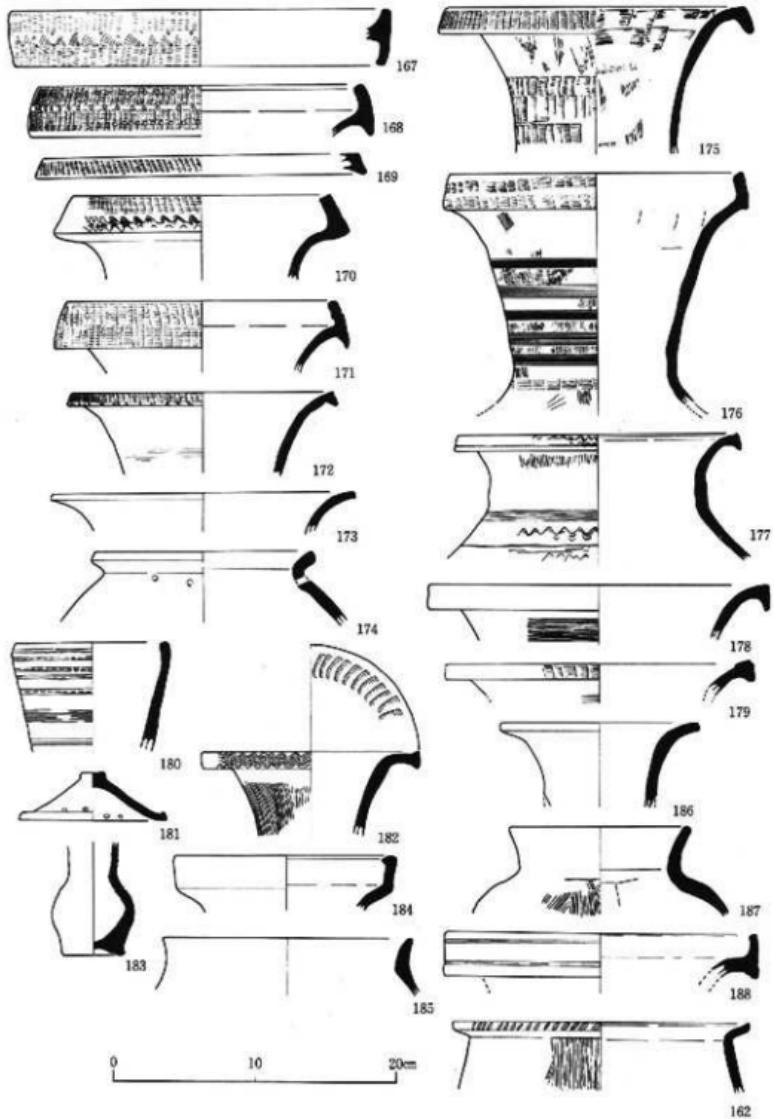
SD5 (131~133, 136, 139~143) の土器が出土している。高杯(131)は、口縁部が水平にのびて、口縁部外面がわずかに下方に曲折する形態で、このタイプの高杯では古い特徴をもっている。III様式のはじめに考えられる。

SEI 細頸壺(159)が出土している。他地域からの搬入品と思われるが、球形の体部に外上方にのびる短い頸部がつき、口縁端部は直口して終わっている。II様式に属すると思われる。

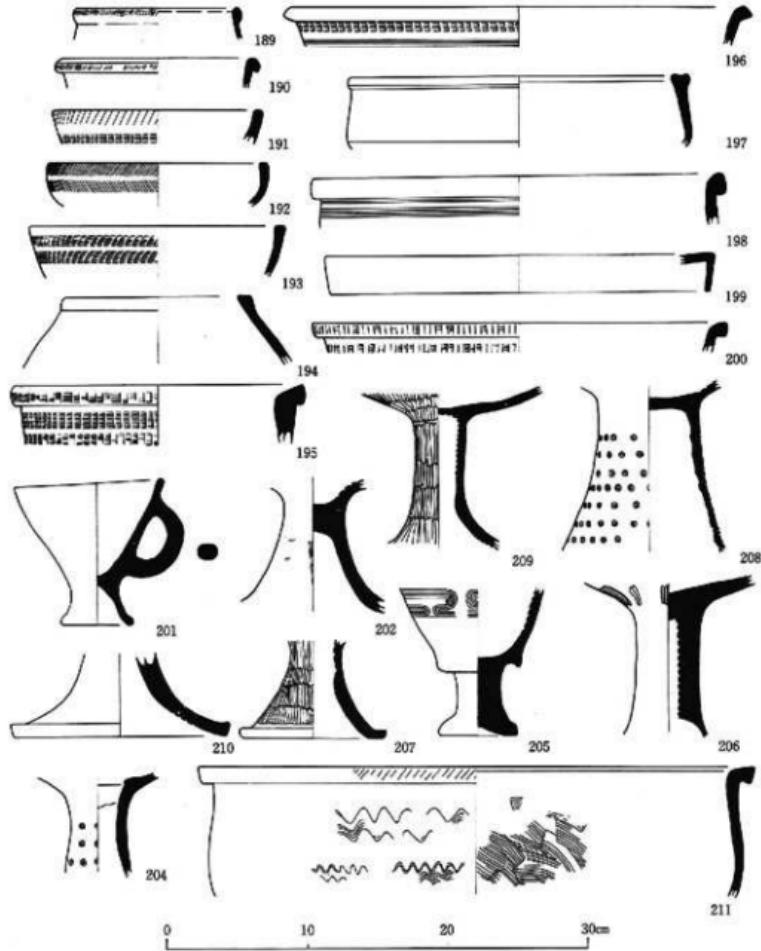
9号周溝墓 西北コーナーの周溝内から壺(90)が出土している。広口壺(90)は、他地域からの搬入品で丈高的杯部に漏斗状の口頸部がつく。口縁端部を上方にわずかに拡張して受口状につくる。供献土器と考えられる。9号周溝墓の北周溝付近で、周溝が埋没した段階で一括遭棄されたと思われる土器群(77, 79~85, 88, 89)を検出した。壺(79, 80, 84)は、生駒西麓産の土器で広口壺(79)は、球形の体部に比較的長い頸部がつき、口縁端部をわずかに外方へ拡張する。壺(80)は、頸部が強くしまる形態の土器でII様式の特徴をもっている。(77,



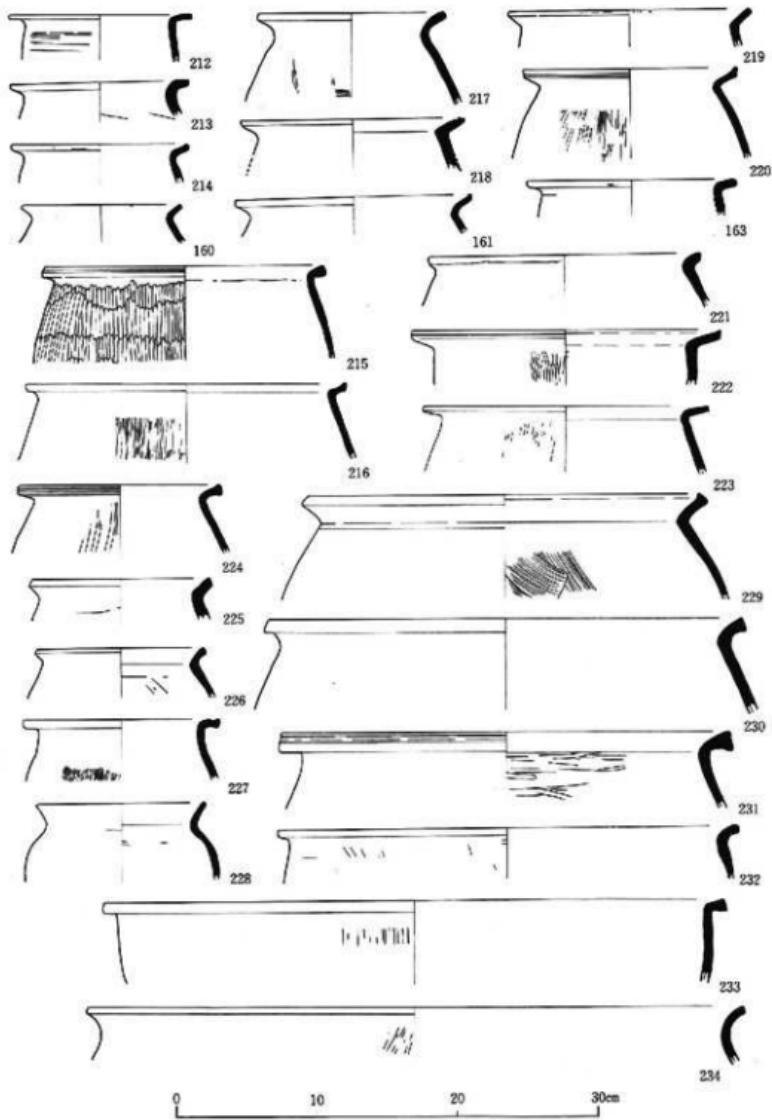
第52図 萬生時代遺構内出土土器



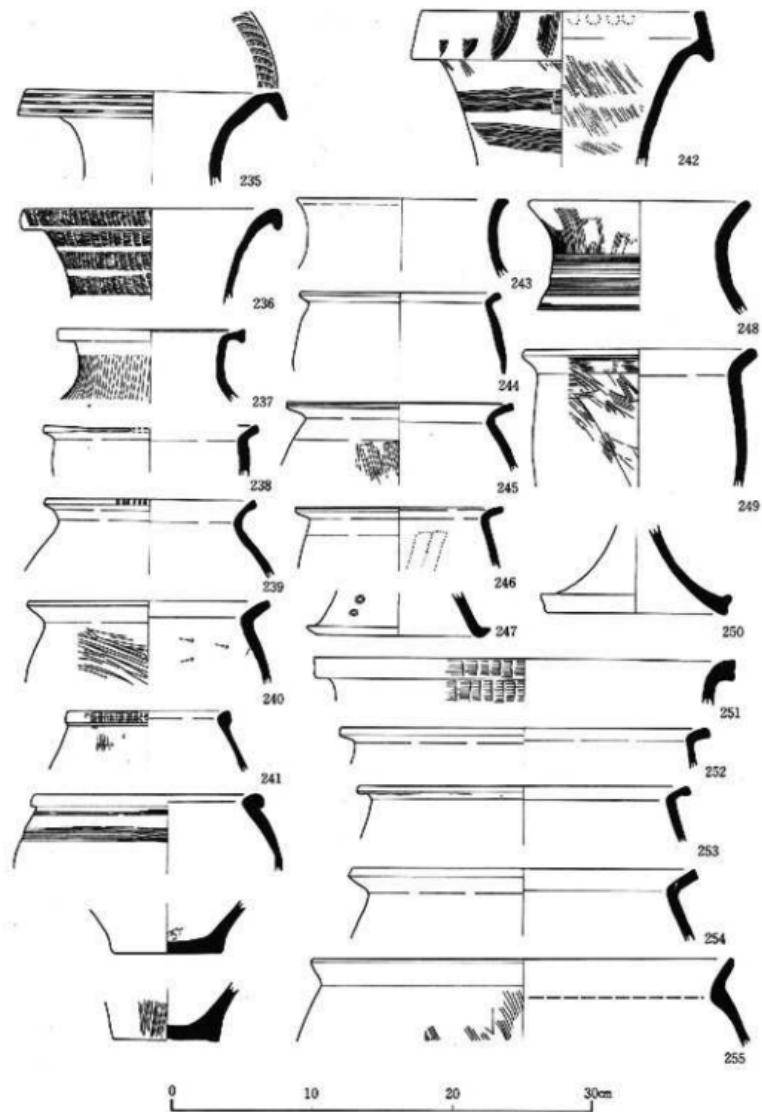
第53図 新石器時代包含層内出土土器



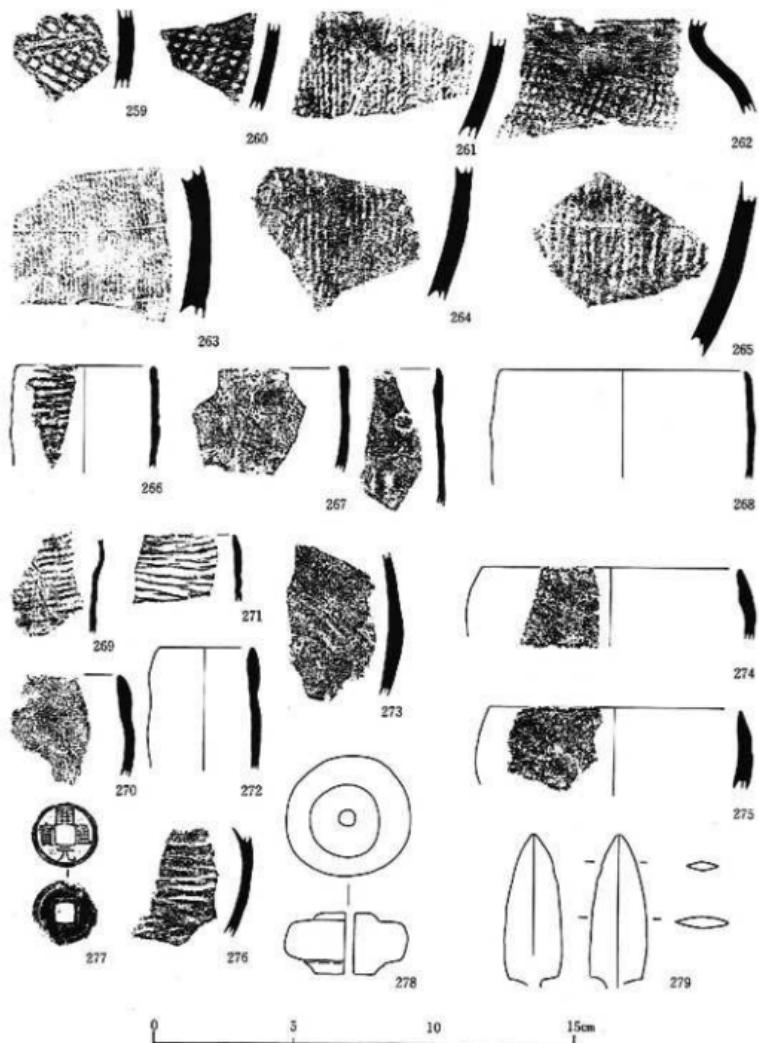
第54図 弥生時代包含層内出土土器



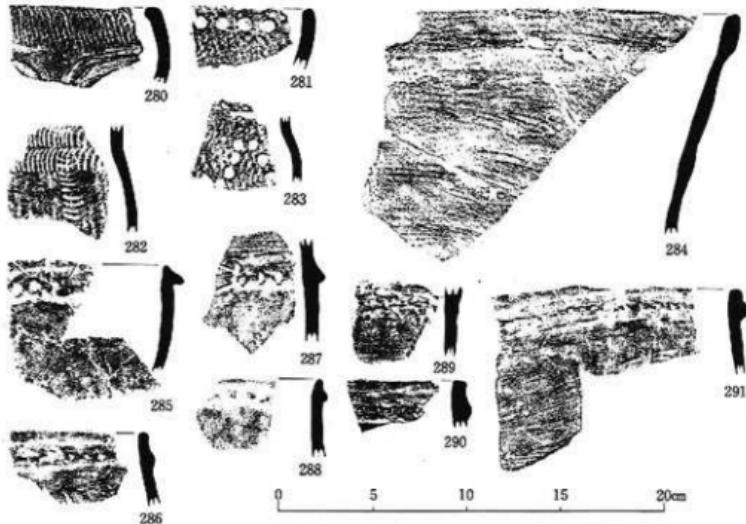
第55圖 幼生時代包含層內出土土器



第56圖 弥生時代包含層内出土土器



第57回 古墳時代包含層内出土遺物実測図



第58図 縄文土器拓影

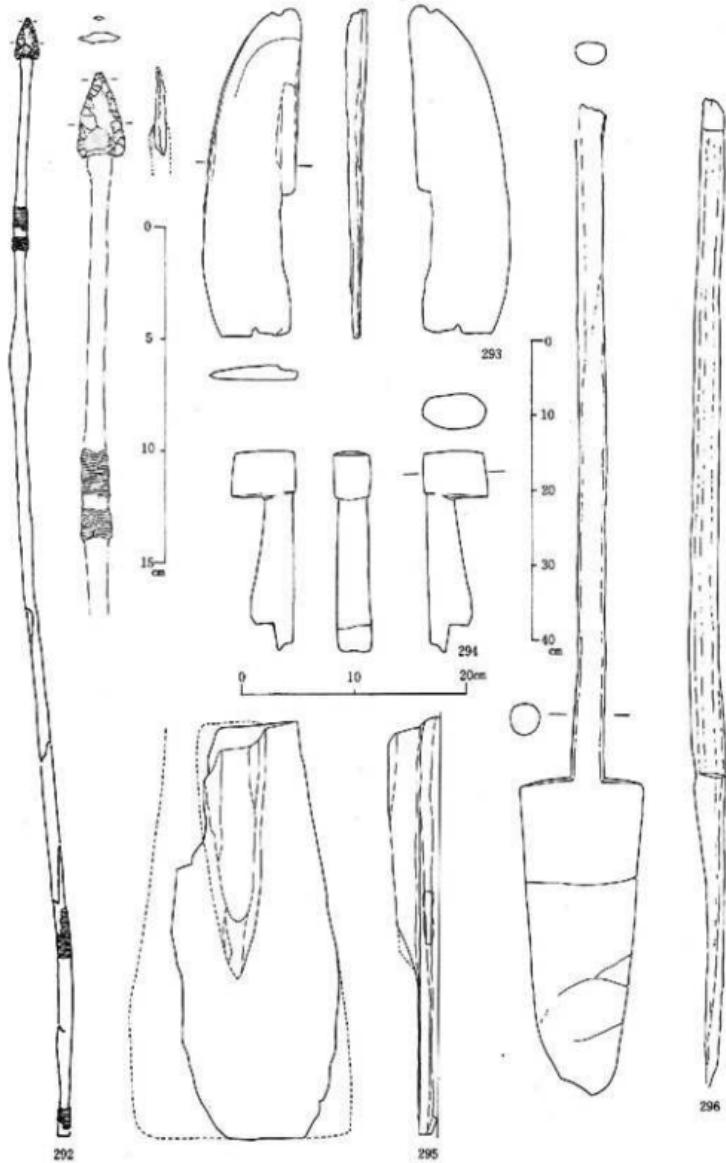
81、85、87～89）は、他地域から搬入された土器で、短頸壺（77）は、胴長の体部に外上方にひらく口縁部がつき、端部は丸く終わっている。体部中位に大きな円孔が認められる。高杯（88）は、口縁部が水平にのび、口縁外端面がわずかに下方に拡張する。脚部は、中空でY字形を呈する。この一括出土した土器群は、壺が大部分を占め、高杯、甕がわずかに1点ずつ含まれていた。壺の中で（77、84、85）には、胴部下半に穿孔が認められ、また、搬入土器の比率が高いことなどから、供獻用に使用された土器と考えられる。

木製品（第59図、図版六五）

今回の調査で出土した木製品の量はあまり多くなく、明確なものは第59図に図化したものがある。

矢柄付石鏃（292）は、SD22内より出土した。詳細は、既に資料紹介をおこなっているのでそちらに譲るが、簡単に概観しておきたい。^{参考}矢柄は、石鏃の先端から全長99.0cm、幅1.1cmを測る。矢柄木本に計3カ所の櫛巻きが認められ、後端の2カ所は矢羽根を固定していたものと考えられる。石鏃は、凹基無茎式の形態で、長さ3.85cm、幅2.15cm、厚さ0.45cmを測る大型の鏃である。矢柄と石鏃の装着は、明確ではないが、石鏃の中央より基端に近い部分に木質部が遺存しているところから、矢柄の先端に石鏃の基部を挟み込んで装着したと考えられる。また、発見時には石鏃基部に白い物質が認められ、接着剤の使用も考えた。

石鏃の尖端から、17cmぐらいのところでも櫛巻きが認められ、これが、昭和56年度調査で出土した矢柄付石鏃と同一形態をとるところから、鬼虎川遺跡ではこのタイプの矢が一般的に使



第59図 木製品実測図

用されていることが明らかになった。この部分を中柄として、矢柄と石鏃を装着した先端を組み合せて使用した可能性が考えられる。

板材（293）は、B 1 区の包含層内より出土している。全長28.5cm、幅7.8cm、厚さ1.3cmを測る。板材の片側を鋭角に尖らせ、先端を丸く仕上げている。全体を丁寧に磨いている。エノキ材を使用している。

加工木（294）は、S D20内より出土している。全長18cm、幅5.5cmを測る。円棒の片面に抉りを入れて、瘤状の握りをつくり出している。全体を丁寧に磨いて仕上げしている。モミ材を使用している。

鍔（295）は、A 3 区 S D22内より出土している。全長36.8cm、幅現存で13.8cm、厚さ4.6cmを測る。身の両側が欠損しているため、全形は不明であるが、身が長方形を呈する広鎌と考えられる。柄つばは、舟形隆起を呈するが、孔は穿たれていない。カシ材を使用している。

鉤（296）はS E 1 内より出土した。全長123.5cm、身の長さ39.8cm、幅15.2cm、厚さ3.8cmを測り、木製のスコップ状の形態である。

握り部分が欠損しており、端部の形状は不明。カシ材を用いている。

縄文土器（第58図、図版六四、六六～六七）

縄文土器は、十数点が出土している。時期は、中期初頭、後期中葉、晩期後半の各時期の土器が出土しており、出土地点も各々異なっている。

深鉢（280～283）はA 4、A 5 区から出土している。弥生時代の遺構面の下部層低位段丘が大きく平野部に傾斜する地点、所謂縄文時代の海岸線付近で出土した。（282）は頸部のくびれ部付近の破片で瓜形文を横位と縦位に施文している。船元Ⅰ式に類似する。（280）はキャリパー状の口縁で口縁直下に突帯を貼付けている。（281）（283）は、縄文地に刺突文を施文している。船元Ⅱ式に比定できる。

深鉢（284）は、縁帶文土器で、口縁端部を肥厚し、体部外面に貝殻状痕が認められる。A 8 区第 8 層下部から出土している。

深鉢（285～291）は、突帯文土器である。（291）は、口縁端より少し下がって突帯を貼付、端部も面をもっている。（285）のように突帯が下に向くものもある。船橋式から長原式までを含んでいるものと思われる。A 7～A 8 区で方形周溝墓のベース面になる第 8 層黒色粘土層より出土している。

IV. 鬼虎川遺跡第30次調査出土人骨について

大阪市立大学医学部解剖学第2講座 多賀谷 昭

弥生時代中期の5基の土塙墓から各1体の人骨が出土し、また、土塙外からもヒトの大腿骨1本が出土している。いずれの人骨も、残っている部位は多いが、保存状態は良くない。各人骨について、残存部位の同定、性・年齢の判定、埋葬姿勢の推定を行った結果を以下に示す。

1号人骨（1号土塙墓）

南東を頭位として埋葬されており、おそらくほぼ全身にわたる部位の断片が残るが、保存状態が悪いために同定できた部位は少ない。

頭骨では、後頭鱗とこれに接する右の頭頂骨および側頭骨とともに後半部が残存するが、縫合の部分を欠いている。胸骨では、胸椎のものと思われる椎弓と左第1肋骨が残存する。上肢では、右上腕骨体のほぼ全部、右尺骨体上半部、左尺骨体中央部が残存する。下肢では、左の大腿骨のみが同定できる。

いずれの骨片も風化と土圧による変形が著しいために復原することができず、詳細な特徴を知ることができないが、大腿骨の粗線の発達は中程度で後頭骨の外後頭隆起は比較的よく発達しているので、成人で、男性の可能性が大きい。

出土状態は、残存する骨から判断する限り、下肢の膝から下を除けば、ほぼ埋葬時の位置を保っていると考えられる。埋葬姿勢は、顔面を上方やや右に向けて仰臥し、上肢の両肘を直角よりやや強く屈曲した状態で、下肢は、土塙の大きさからみて、膝を伸展に近い状態にしていたと推定される。

2号人骨（2号土塙墓）

南西を頭位として埋葬されており、ほぼ全身にわたる骨が残存するが、風化が著しい。頭骨では、左の顎面上半から側頭骨、頭頂骨を除く部分と歯が残るが、風化のために骨の大部分は取り上げて検査することができなかった。歯は、上顎では右の第2小白歯は左右の中切歯、第1・2大臼歯の計7本、下顎では左の第1小白歯と左右の第2小白歯、第1・2大臼歯の計7本、総計14本が残存する。胸骨では椎骨の椎弓のみが全体にわたり残存するが、取り上げて検査することはできなかった。上肢では肩甲骨と鎖骨のともに外側部分、左右の上腕骨、桡骨、尺骨が残っているが、上腕骨と右尺骨以外は風化が著しい。右尺骨は骨体の上3分の2が残存する。下肢骨では、左右の寛骨の腸骨翼基部付近、骨端を欠く左大腿骨が残存し、この他に、おそらく右の大腿骨、脛骨、腓骨と思われる骨が存在する。左大腿骨は寛骨と関節する位置にある。右大腿骨と思われる骨は、そのすぐ右に平行し、右の下腿の骨と推定されるものと関節する位置にはない。

歯の咬耗は上・下顎とも第1大臼歯ではゾウゲ質の露出が点状に認められるが、第2大臼歯ではエナメル質内に留まっており、20歳前後と思われる。大腿骨と上腕骨は比較的大きく、だ

ちらかというとやや男性の可能性が大きい。

骨は全体としては原位置を保っており、埋葬姿勢は、顔面を上や足方に向け、上肢は肘をほぼ直角に曲げて両前腕を胸の前で平行させ、下肢は、土壇の大きさおよび右の下肢骨と思われる骨の位置関係からすると、おそらく立て膝の状態にあったものと推定される。なお、上顎と下顎の間、つまり口腔に当たる位置に直径約6cm、厚さ約2cmの石が置かれていた。

3号人骨（3号土壇墓）

東を頭位として埋葬されており、膝より下を除く全身にわたる骨が残っている。

頭骨では鼻から上顎までの部分を除き、下顎骨を含むほぼ全体が残る。歯は、下顎の右第1・第2・第3大臼歯と左第1小臼歯のいずれも歯根のみが下顎骨に釘植して残存する。胸骨では胸椎から仙骨上部までの椎弓のみが残存する。上肢では左右の上腕骨体が比較的よく保存されており、桡骨と尺骨も痕跡的ながら左右とも残っている。下肢では、左大腿骨の上半と右大腿骨の上4分の1が残存するが、下腿以下の骨の残存は確認できない。

年齢は、第3大臼歯が萌出済みであるので成人の可能性が大きい。性別については、後頸骨の外後頭隆起の発達が比較的弱く、また、上腕骨がきゃしゃであるので、女性と推定される。

骨はいずれも原位置にある。埋葬姿勢は、顔面を上方に向かって、上肢は肘をほとんど伸ばして体側に置いた状態で、下肢については不明である。

4号人骨（4号土壇墓）

今回出土した人骨のうちでは最もよく保存されている。西を頭位として埋葬されており、全身にわたる骨が残存する。

頭骨は左の下顎枝を除くほぼ全部が小片となって残っているが、接合して復原することはできなかった。胸骨では、椎骨の椎弓が頸椎から仙骨までほぼ連続して残っている。上肢骨では、左右の肩甲骨の一部、上腕骨、鎖骨、桡骨、尺骨が残存するが、このうち右桡骨と左の桡骨と尺骨は風化が進んでいる。下肢骨では、左右の大腿骨、脛骨、腓骨が残っている。上・下肢とも長骨はいずれも骨端を欠いている。

年齢については、大きさと骨の表面の状態からみて成人であることは確実であるが、それより詳しくは分からぬ。上腕骨と脛骨はさほど大きい方ではないが、下顎骨と大腿骨は比較的大きいので、男性と推定される。

下腿を除き、骨はすべてほぼ原位置にある。下肢骨は左では腓骨が脛骨と離れて大腿骨と並行し、右も膝関節で大腿骨と脛骨が接していないが、これは膝をかなり強く曲げ、立て膝の状態で埋葬されたとすれば説明できる。埋葬姿勢は、顔面を上方やや左に向かって、上肢は右肘を直角に、左肘を完全に近く屈曲して右手を左肘、左手を左肩付近に置いた状態である。

5号人骨（5号土壇墓）

上半身のみが出土している。頭骨はほぼ全部が残るが変形が著しい。胸骨では頸椎のすべてと上部胸椎が残る。上肢では、左右の肩甲骨の破片と右上腕骨の一部と思われる破片が存在するが、風化が著しく、同定には至らなかった。上顎骨には、左右の中切歯から第2小臼歯まで

の5対と右の第1大臼歯、左の第2大臼歯の計12本が釘植し、下顎骨には左右の第2小白歯から第1大臼歯までの3対と右の第1小白歯の計7本が釘植している。

頭骨全体が接着剤で固められているために歯の咬耗の程度を詳しく検査することはできなかつたが、咬耗は大臼歯の咬頭がなくなるまでには達していないので、年齢は40歳以下と推定される。下顎骨は強大で、歯も大きいので男性と判定した。

これらの骨は原位置を保っており、顔面を上に向け、東を頭位として仰臥の状態で埋葬されている。

6号人骨

右大腿骨の骨体上部のみが出土している。骨は強大で、成人男性のものと推定される。

計測値および觀察所見

今回の発掘調査で出土した人骨のうち、計測できたのは男性と思われる4号人骨の右大腿骨のみで、中央矢状径・横径とも26mm、上部横径31mm、同矢状径23mmであった。この個体を含めて、大腿骨が柱状性を示すものではなく、また、脛骨にも扁平性は認められなかった。これらの部位に関する限り、その特徴は縄文人とは明かに異なっており、弥生時代およびそれ以降の日本人の特徴と共通している。

V. 鬼虎川遺跡29・30次調査出土材同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、29次（No.1～5）・30次（No.6～10）調査で得られた自然木各5点である（表1）。試料の時代は不明である。

2. 方法

刺刀の刃を用いて、資料の木口・柵目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版（図版1～3）も作成した。

3. 結果

確実な同定のできないものもあったが、試料は以下の7種類（Taxa）に同定された。各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質はつぎのようなものである。

・ヤナギ属の一種 (*Salix* sp.) ヤナギ科 No. 7, 8, 9

散孔材で、道管は年輪全体にはほぼ一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は横断面では梢円形～やや角張った梢円形、単独および2～3個が複合する。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、單列、1～15細胞高。柔組織は隨伴散在状およびターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約40種が知られ、種間雑種も多く、分類の困難な植物群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。水辺に生育するネコヤナギ (*S. alix gracilistyla*) やシダレヤナギ (*S. babylonica*) のほか、バッコヤナギ (*S. bakko*)、ノヤナギ (*S. subopposita*) などのように乾燥した立地に生育するものや、シライヤナギ (*S. shiraii*)、コマイワヤナギ (*S. rupifraga*) のように岩場に生育するものもある。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく、保存性は低い。

・ニレ属の一種 (*Ulmus* sp.) ニレ科 No. 2, 5

環孔材で孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～梢円形、単独、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～6細胞幅、1～40細胞高。柔組織はターミナル状および周囲状。年輪界は明瞭。

ニレ属にはアキニレ (*Ulmus parvifolia*)、ハルニレ (*U. japonica*)、オヒョウ (*U. lacinia-ta*) の3種がある。アキニレは本州（長野・静岡県以西）・四国・九州に、ハルニレ・オヒョウは北海道・本州・四国・九州に生育するが、ハルニレは北海道・本州北部に多く、オヒョウは北海道に多いが他の地域では少ない。ハルニレの材は中程度～やや重硬で、割裂性は小さく、

加工はやや困難、保存性は低い。

・エノキ属の一種 (*Celtis* sp.) ニレ科 №.6

環孔材の孔圈部は1～5列、孔圈外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では梢円形、単独および2～3個が複合する。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1～15細胞幅、1～50細胞高で、精細胞 (sheath cell) が認められる。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

エノキ属にはエゾエノキ (*Celtis jezoensis*)、エノキ (*C. sinensis* var. *japonica*)、コバノショウセンエノキ (*C. leveillei*)、クワノハエノキ (*C. boninensis*) の4種がある。エゾエノキは北海道・本州・四国・九州に、エノキは本州・四国・九州に普通にみられる。コバノショウセンエノキは本州(近畿地方以西)・四国・九州・琉球に、クワノハエノキは山口県・九州西部・琉球・小笠原に稀に分布する。エノキは東北地方にはやや少ないが、平地から丘陵地に普通にみられ、また神社や街道沿いに植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度はやや小さい。耐朽性も低く、材質的には劣る。果実は食べられる。

・ヤマグワ (*Morus bombycina*) クワ科 №.1

環孔材で孔圈部は1～5列、晚材部に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では梢円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、1～8細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴のみで、これらを区別することはできない。材はやや重硬で強韌、加工はやや困難で、保存性は高い。果実は食用となる。

・ヤブニッケイ類似種 (cf. *Cinnamomum japonica*) クスノキ科 №.3

散孔材で横断面では梢円形、単独または2～4個が放射方向に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界はやや明瞭。

クスノキ科は大型の道管をもつクスノキ (*Cinnamomum camphora*) を除いて、識別の困難な分類群である。このため他種の可能性もあり類似種とした。

ヤブニッケイは本州(宮城・石川県以南)・四国・九州・琉球に分布する常緑高木である。材はやや軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽性は高い。果実からは油が搾られた。

・ヤブノキ類似種 (cf. *persea thunbergii*) クスノキ科 №.4

散孔材で横断面では梢円形、単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～3細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。年輪界は明瞭。上記

の理由により類似種とした。

タブノキは本州・四国・九州・琉球の、主として沿海地に生育する常緑高木である。タブノキ属にはタブノキのほかに、本州（近畿地方以西）・四国・九州・琉球に分布するホソバタブ (*Persea japonica*) があり、ともに暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。材はやや軽軟～やや重硬で、加工は容易である。樹皮は染料となる。

・トネリコ属の一一種 (*Fraxinus sp.*) モクセイ科 №10

環孔材で孔周部は1～2列、孔周外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～梢円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列、放射組織との間では網目状～篩状となる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高前後。柔組織は周囲状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

トネリコ属には、シオジ (*Fraxinus platypoda*)、トネリコ (*F. japonica*)、アオダモ (*F. langinosa*)など約8種が自生する。このうちヤマトアオダモ (*F. longicuspis*)・マルバアオダモ (*F. sieboldiana*)・アオダモは北海道・本州・四国・九州に、ヤチダモ (*F. mandsurica* var. *japonica*)は北海道・本州（中部地方以北）に、トネリコは本州（中部地方以北）に、シオジは本州（関東地方以西）・四国・九州に分布する。いずれも落葉高木である。材の性質は種によって異なるが、一般には中庸～やや重硬で、韌性があり、加工は容易である。

以上の同定結果を一覧表で示す。

第1表 鬼虎川遺跡29・30次調査出土材の樹種

試料番号	出土遺構・層位	種名
1	A 4 仮称13層	ヤマグワ
2	B 9 S D20 第2層	ニレ属の一種
3	A 8～A 9	ヤブニッケイ類似種
4	A 8～A 9	タブノキ類似種
5	B 9 S D20 断面	ニレ属の一種
6	S D 3 内	エノキ属の一種
7	S D 5 第1層	ヤナギ属の一種
8	S D 5 第1層	ヤナギ属の一種
9	S D 5 第2層	ヤナギ属の一種
10	S D 2 第2層	トネリコ属の一種

VI. まとめ

今回の調査の結果、古墳時代から中世期の遺構面、弥生時代の遺構面及び縄文時代の遺構面の3時期の遺構面を検出した。しかしながら、調査範囲が幅5m前後の細長いトレンチであるため、遺構の全容を考えることは困難である。そこで、従来の調査成果を踏まえて、主に方形周溝墓・土壙墓に限ってまとめておきたい。

1) 弥生時代の遺構の年代について

今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、大溝5条、その他の溝3条、方形周溝墓9基、土壙墓5基である。これらの遺構の配置は、付図1を参照していただきたい。大溝の時期は、ほぼ畿内第II～III様式の時期に属している。方形周溝墓の時期は、明らかな共伴遺物がほとんどないので明確ではないが、断面観察の結果から大溝の時期とほとんど変わらないと思われる。

土壙墓の時期は、供伴遺物が全く不明であるが、1号土壙墓はSD5の埋没後につくられていること、第12次調査で検出した土壙墓もII様式の大溝が埋まつた段階でつくられていることなどが明らかになっているので、少なくともIII様式後半以後に属すると思われる。

墓域の形成について

(1) 方形周溝墓の特徴

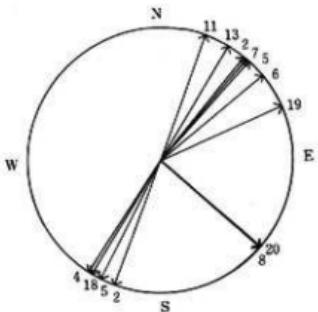
鬼虎川遺跡の方形周溝墓は、主体部が確認されておらず不明確なものを含めて、現在までに29基確認されている。そこで同じ弥生時代の瓜生堂遺跡や他の遺跡と比較して、相異なる点を以下に記述して見ると、

1. 規模が5m前後的小規模なものが多い。
2. 主体部は1基が多く、3基以上のものはない。
3. 組合式木棺の形式は、小口板を底板以下に掘り込む瓜生堂遺跡II形式のものが多い。
4. 木棺材は、コウヤマキだけでなく、ヒノキやケヤキと組み合わせたものが多い。
5. 墳丘上に甕棺・壺棺がない。

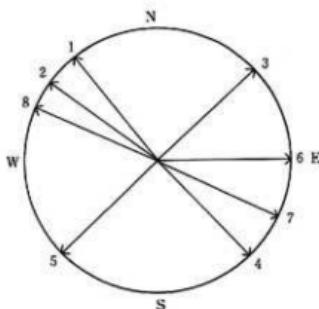
以上のような特徴がある。比較した瓜生堂遺跡や他の方形周溝墓がIII様式を中心とする時にあたり、鬼虎川遺跡の方形周溝墓がII様式からIII様式前半に属することと考えれば、鬼虎川遺跡の特徴は時期差と考えられる。つまり古い時期の方形周溝墓は、規模が小さく1墳に1主体部を原則とし、まれに2主体部の場合は従属するかのように後述するように頭位を反対方向に向いている。以後の方形周溝墓が多数の主体部をもち、甕棺・壺棺も数多く認められ家族墓的性格をもつた大きな違いがある。

(2) 墓域の変遷

今回の調査で検出した方形周溝墓・土壙墓と以前の調査で検出したものを整合させたものが付図2である。付図2を見るとまず、今回の調査地点が方形周溝墓・土壙墓を含めた墓域の中心であることがわかる。墓域は、北・南にはまだ広がると思われるが、西側では第12次調査の



第2表 方形周溝墓上体部頭位



第3表 土塚墓人骨頭位

溝9以西で方形周溝墓は検出されていない。東側は、第12次調査の溝16以東では方形周溝墓はつくられていない。その分、方形周溝墓の周辺には点々と土塙墓がつくられていることがわかる。

方形周溝墓の築造順序は、発掘調査の所見では明確でない。ここでは人骨の頭位から築造順序を考えてみたい。

29基の方形周溝墓で主体部が検出され、頭位が明確なものは13基ある。そこで頭位を図上に表したのが第2表である。これで見ると頭位は、圧倒的に北東方向をとるものが多く7体確認している。これは、方形周溝墓の長軸に沿ったもので、明らかに中心主体をあらわしている。逆に南西方向に頭位をとるものは従属的なものと考えることができ4体確認している。第12次調査で検出した2号墓は、中心主体の頭位が北東を向き、他の主体部が南東を向いている典型的な例である。例外的な2基(8・20)は、いずれも溝に囲まれた立地をとるもので、立地条件からどうしても、周溝墓の長軸方向を北西—南東方向にとるために、頭位も例外的になったものと思われる。

次に土塙墓の頭位を記述すると、第3表からわかるように8基の土塙墓の頭位は、各方向に向いており、規則性は全く考えられない。

頭位の検討から、方形周溝墓の築造にあたっては、長軸の方向は北東—南西方向にとることが決められていたことがわかる。第12次調査で検出した2号墓・5号墓は、畿内第II様式に属すると報告されており、古い時期につくられたと考えればここから、集団内のきびしい規制を受けながら、北東方向へ順次築造されていたと推測される。築造に際しては、周辺に溝を掘削しながら、墓域を拡大していったと考えられる。その後、溝が埋没し、周溝墓がつくられなくなると、周辺に土塙墓がさかんにつくられるようになったと考えられる。

(3) 繩文時代の海岸線について（第43図）

これまでの調査において、繩文時代前期の崖状の傾斜面が検出され、繩文海進時の海岸線であると考えられてきた。

今回の調査でもA3～A8区で、地山が崖状の急傾斜面をなすのを確認した。第43図を見るとA3区～A8区の間で2m以上の比高差が認められる。また、地山（海進時の海底）付近では繩文時代前期～中期の土器（第58図、図版六四）とともに、シカ・イノシシ・クジラ（図版六七）などの動物遺体、トチ…………などの植物遺体が出土している。

以前の調査結果を総合すると、繩文時代前期～中期にかけて、鬼虎川遺跡の東端では、少なくとも40～50m間は比高2～3m以上の海蝕崖になっていたと判断される。

注

- ① 上野利明・才原金弘「鬼虎川遺跡第12次発掘調査報告」（財）東大阪市文化財協会・東大阪市教育委員会 1987年
- ② 西口陽一・宮崎泰史・蜂屋晴美・瀬川真美子「神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要」II 大阪府教育委員会 1986年
- ③ 東大阪市遺跡保護調査会編「東大阪遺跡ガイド」1978年
- ④ （財）東大阪市文化財協会「水走遺跡」現地説明会パンフレットより19
- ⑤ 下村晴文・才原金弘「鬼虎川遺跡調査概要I」東大阪市遺跡保護調査会 1980年
- ⑥ 注①と同じ
- ⑦ 原口昭三・田辺昭二・田中琢・佐原真「船橋I・II」平安学園考古学クラブ 1972年
- ⑧ 下村晴文「大阪府鬼虎川遺跡出土の矢柄付石鏃について」『歴史と伝承』日野昭博士還暦記念論集 1988年
- ⑨ 萩本隆裕「鬼虎川の木質遺物－第7次発掘調査報告書第4冊」（財）東大阪市文化財協会 1987年
- ⑩ 注①と同じ
- ⑪ 今村道雄・安部幸一・曾我茶子他『瓜生堂遺跡III』1981年 瓜生堂遺跡調査会
- ⑫ 宮崎泰史・福永信雄氏より遺構図面の提供を受けて作成した。

観察表

凡例

基種	番号	法量 (cm)	備考
高木	1	<input type="radio"/> 13.2 → 口径 <input type="radio"/> 2.8 → 扇形葉 <input type="radio"/> 5.6 → 脊部 <input type="radio"/> 口縫部の葉芽割合	<input type="radio"/> 良好 → 細度 <input type="radio"/> 密 → 粗度 <input type="radio"/> 灰色 N 6/0 → 色調 <input type="radio"/> 生物色調度 → 土地 <input type="radio"/> A 7 S X 3 → 生土地点

(番号・図面は共通の番号)

色調は『新標準土色誌』農林省農林水産省会議事務局監修 対田洋人日本色彩研究所 色調監修による。

基種	番号	法量 (cm)	形態の特徴	技術の特徴	備考
高木	1	<input type="radio"/> 13.2 <input type="radio"/> 2.8 <input type="radio"/> 口縫部 1/7強	<input type="radio"/> 口縫部は外反し、端部はつまみあげられ、やや内折する。 <input type="radio"/> 口縫部と葉部との接は縦をなす。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 外 2.5 Y 8/1灰白。 <input type="radio"/> A 8 第3層。
	3	<input type="radio"/> 12.8 <input type="radio"/> 4.1 <input type="radio"/> 口縫部 1/10強	<input type="radio"/> 口縫部は下方へわざかにひろがる。 <input type="radio"/> 端部下面は、急角度に内傾斜面になる。 <input type="radio"/> 端部と口縫部の境に波状をもつ。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。 <input type="radio"/> 口縫部外面ヘラケズリ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 底色 N 6/0。 <input type="radio"/> A 10 S X 3。
	4	<input type="radio"/> 10.6 <input type="radio"/> 5.3 <input type="radio"/> 口縫部 1/8強	<input type="radio"/> 端に同じ。	<input type="radio"/> 3と同じ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 外底色 N 6/0。 <input type="radio"/> A 9 S X 2。
	5	<input type="radio"/> 12.6 <input type="radio"/> 2.1 <input type="radio"/>	<input type="radio"/> 口縫部は下方へわざかにひろがる。 <input type="radio"/> 端部下面は、内傾斜面になる。 <input type="radio"/> 端部と口縫部の境に波状があり、裏の下に少しむく。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 底色白 N 7/0。 <input type="radio"/> S K - 8。
	6	<input type="radio"/> 9.4 <input type="radio"/> 4.1 <input type="radio"/>	<input type="radio"/> 口縫部の立ち上がりは、比較的高く、やや内折する。 <input type="radio"/> 端部は丸くなる。	<input type="radio"/> 口縫部内側面横ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 底色白 N 7/0。 <input type="radio"/> A 7 第3層。
	7	<input type="radio"/> 12.2 <input type="radio"/> 4.8	<input type="radio"/> 口縫部の立ち上がりは内傾し、端部上面に内傾斜面をもつ。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。 <input type="radio"/> 端部外面ヘラケズリ、内面ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 異石粒を少混合し。 <input type="radio"/> 10 B Q 6/1。 <input type="radio"/> A 7 第3層下層。
	8	<input type="radio"/> 11.2 <input type="radio"/> 4.0 <input type="radio"/> <input type="radio"/> 口縫部 1/6強	<input type="radio"/> 口縫部の立ち上がりは内傾し、端部はわざかに外反する。端部上面の内傾斜面はゆるく、沈緑状になる。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。 <input type="radio"/> 端部外面ヘラケズリ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 異石粒を少混合し。 <input type="radio"/> 深色 N 6/0。 <input type="radio"/> A 7 S X 1。
	9	<input type="radio"/> 13.6 <input type="radio"/> 24.25	<input type="radio"/> 口縫部は外反し、端部はつまみあげられ、丸く終わる。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 底色 N 5/0。 <input type="radio"/> A 8 S D 14。
	10	<input type="radio"/> 11.6	<input type="radio"/> 口縫部の立ち上がりは低く、内傾する。	<input type="radio"/> 口縫部内外面横ナダ。	<input type="radio"/> 良好。 <input type="radio"/> 密。 <input type="radio"/> 外反白 7/0。 <input type="radio"/> A 4 3 組。
土筋	12	<input type="radio"/> 28.0 <input type="radio"/> 24.0 <input type="radio"/> <input type="radio"/> 口縫部 1/7強	<input type="radio"/> 細め上方に直線的にひらく。 <input type="radio"/> 口縫部は内側に傾斜し、沈緑を施す。 <input type="radio"/> 口縫部は強く横ナダを施すためにわざかに外反する。	<input type="radio"/> 部外面は、縱方向のハケメ（6条/6） 、内面はナダ。	<input type="radio"/> ややせい。 <input type="radio"/> 1~2 mm 大の角閃石多量、共石、雲母を含む。 <input type="radio"/> 反白色 5 Y 7/2~深黄色 2 Y 6/2。 <input type="radio"/> 生物色較度。 <input type="radio"/> A 10 S X 3。

部 署	基 本 形 式 番 号	法 量(α)	形 態 の 特 徴	法 法 の 特 徴	備 考
上 部 類	裏 13	○21.2 ○31.6 ○ ○口縁 1/7残	○前上方に底盤的にひらく体部に口縁 部はわざかに外反する。 ○口縫部は、わずかに面をもつ。	○体部内外面ナデ。 ○口縫部横ナデ。	○良好。 ○こまかなる長石・石英・ カリ・さり繊維を含む 帶地。 ○灰褐色 7.5YR 8/2 ○地塊斑状。 ○A 8 S D14。
	裏 14	○15.3 ○25.35 ○ ○底部以外完全	○長脚の体部に底盤して外反する口縫部 がつく。口縫部は外側にわずかに肥 厚する。 ○軸2.5の軽土巣部が8倍以上底盤でき る。	○口縫部外側面横ナデ。 ○体部外側面横方角のハケメ(5条/α)、 内面ナデ。頭頂付近はゆるいケズリ。	○良好。 ○1~2 mの角閃石多 量、長石・石英・ カリ繊維少量化 し。 ○外にぶく褐色 7.5Y R 5/3。 ○生駒岩質。 ○A 8 S D14。
	裏 15	○12.8 ○5.0 ○ ○口縁 1/9残	○球形の体部から「く」の字形に凹曲外 反する口縫部がつく。 ○口縫部はわずかに内凹し、端部は丸く 終わる。	○口縫部内外面横ナデ。 ○体部外面ナデ、内面ヘラケメリ。	○良好。 ○1 m背後の角閃石多 量、長石・石英・ カリ繊維少量化 し。 ○暗灰色10Y R 4/1。 ○生駒岩質。 ○A 10 S X-3。
表 裏 部	裏 16	○ ○ 4.2 ○ 6.5 ○複数 1/4残	○底・脚台、基部から脚部へ外反しから がる。脚部は段状になり、端部は丸く 終わる。 ○未方形透達が四方に開くと思われる。	○脚部外側、カキ目、内面横ナデ。 ○脚部内部外側面横ナデ。	○良好。 ○直。 ○青灰 5 B 5/1。 ○A 10 S X-3。
	裏 17	○16.5 ○ 6.2 ○ ○	○大きく外方へひらく口縫部。 ○口縫部内面に後をもつ。	○口縫部内面横ナデ。 ○体部外面ナデ、横頭雁成る。内面ナ デ。	○やや甘い。 ○長石・角閃石を含 む。 ○外にぶく褐色 7.5YR 7/3。 ○A 10 S X-3。
	裏 18	○16.0 ○ 2.8 ○ ○口縁1/10残	○球形の体部に「く」の字形に強く凹曲 外反する口縫部。	○口縫部内外面横ナデ。 ○体部外面ハケメ(5条/α)、内面ナ デ。	○良好。 ○こまかなる長石・石 英・雲母を含む密な 帶地。 ○灰白色10Y R 8/2。 ○地塊斑状。 ○A 9 S D-1a。
中 部 類	裏 19	○18.0 ○ 5.2 ○ ○口縁 1/7残	○少るやかに外反する口縫部に端部は丸 く終わる。	○口縫部内外面横ナデ。	○良好。 ○こまかなる角閃石・長 石・雲母を含む。 ○外にぶく褐色 7.5YR 5/4。 ○生駒岩質。 ○A 6 灰土。
	脚 20	○20.8 ○35.65 ○ ○	○内凹する口縫部に端部内面に疣様を施 す。	○体部外面ナデ、内面ハケメ。	○良好。 ○長石・雲母を含む。 ○灰褐色 7.5Y 7/2。 ○A 8 S B 3。
	脚 21	○ ○ 7.35 ○井戸部のみ	○比較的深い脚部。底盤は平削で、底盤 外側に粘土質なぎざぎざがあり、その部 分で段になっている。 ○口縫、脚部欠損。	○脚部前面ヘラミガキ、内面ナデ。 ○井戸部に脚の密合部を施す。	○良好。 ○こまかなる長石・雲母 を含む密な帶地。 ○7.5Y R 8/4。 ○地塊斑状。 ○A 7~A 8 S X-1。
底 部 類	井 22	○ ○ ○口縁 1/7残	○口縫部は、ほぼ垂直に下り、端部は内傾 で斜く外側し、端部は内傾し凹面とな る。 ○彼は浅い。 ○天井部欠損。	○口縫部内外面横ナデ。	○良好。 ○直。 ○ ○ A 7 3 層。
	井 23		○口縫部はほぼ垂直に下り、端部は内傾 する段をなし。 ○彼は浅い。 ○天井部は高く、やや丸い。	○口縫部内外面横ナデ。	○良好。 ○直。 ○ ○ A 7 3 層。
	井 24	○12.8 ○ 4.2 ○ ○天井部 4/5残	○口縫部は、内面弧形に下り、端部は大 きく。 ○彼はやや浅い。 ○天井部は、やや高く丸い。	○口縫部内外面横ナデ。 ○天井部表面へラ耐り。	○良好。 ○直。 ○ ○ A 7 3 層。

器 種	器 形	番 号	法量(α)	形態の特徴	技法の特徴	備考
酒 器	杯 蓋	25	○9.2 ○○ ○○ ○口縁1/11既	○口縁部は内凹気味に下る。 ○腹は比較的有り、やや深い。 ○底部欠損。	○口縁部内外面接ナダ。	○良好。 ○密。 ○○ ○A123層。
	高 杯	26	○13.0 ○○ ○○ ○口縁1/12既	○ゆるやかに外反する口縁部に端部は丸く終わる。 ○腹は一条の凸線なす。	○口縁部内外面接ナダ。 ○凸線の下に1条4本の復状文がめぐらしている。	○良好。 ○密。 ○○ ○A83層。
	杯 身	27	○8.8 ○○ ○○ ○口縁1/12既	○口縁部は内側後立ち上がり、端部は内側する段をなす。 ○底部は水平にのび、端部は丸い。 ○底部欠損。	○口縁部内外面接ナダ。 ○底部外面に自然施。	○良好。 ○密。 ○○ ○A73層。
	杯 身	28	○10.4 ○4.8 ○○ ○口縁1/3既	○口縁部は内側後立ち上がり、端部は内側する段をなす。 ○底部は水平にのび、端部は丸い。 ○底部は丸く深い。	○口縁部内外面接ナダ。 ○底部外面に自然施。	○良好。 ○密。 ○○ ○A73層。
	杯 身	29	○10.0 ○4.45 ○○ ○口縁1/5既	○底に同じ。	○口縁部内外面接ナダ。 ○底部外面回転ヘラケズリ。	○良好。 ○密。 ○底色N4/0 ○A123層。
	杯 身	30	○9.6 ○3.2 ○○ ○口縁1/7既	○底に同じ。	○口縁部内外面接ナダ。	○良好。 ○密。 ○底色N6/0 ○A93層。
	杯 身	31	○10.1 ○5.1 ○○	○口縁部は、内側後立ち上がり、端部は内側する段をなす。 ○底部は水平にのび、端部は丸い。 ○底部は丸く深い。	○口縁部内外面接ナダ。 ○底部外面回転ヘラケズリ。 内面ナダ。	○良好。 ○密。 ○明青灰5B7L ○○
	杯 身	32	○10.4 ○○4.5 ○○	○底に同じ。	○底に同じ。	○良好。 ○密。 ○青灰5PB6/1 ○A73層下脚。
	杯 身	33	○12.8 ○3.8 ○○ ○口縁1/6既	○口縁部は内側後直立し、端部は廣く内側し、平底をなす。 ○受部は上方方にのび、端部は丸い。	○口縁部内外面接ナダ。	○甘い。 生焼け状態。 ○密。 ○口袖灰白8/1。 底部黒色。 ○A123層。
	高 杯	34	○12.2 ○2.7 ○○	○口縁部は内凹気味に外上方にのびる。 ○腹は一条の凸線をなす。	○口縁部外面復状文。	○良好。 ○密。 ○底色7/0 ○A103層。
土 器	壺	35	○14.4 ○3.6	○口縁部は屈曲し、水平に外反し、端部は上方にまみ上げ受口状になる。	○不規。	○良石を若干含む。 ○中甘口。 ○糊2.5YR7/6 ○A83層下脚。
	杯	37	○17.2 ○5.5 ○○ ○口縁3/5既	○内側する部分に端部は丸く終わる。 ○杯底部に平坦。	○内外面ともヘラミガキ。	○良好。 ○密。 ○糊黄褐7.5YR6/3 ○A73層。
	高 杯	38	○11.6 ○11.5	○脚部欠損。 ○脚部下がはり出し、口縁部は廣く外反する。	○内外面とも丁寧なナダ。	○良好。 ○密。 ○にじい褐色7.5YR6/4 ○他地城壁。 ○A103層。
質 器	壺	39	○21.4 ○5.5 ○○ ○口縁1/11既	○大きく外反する口縁部に、端部を下方に低張する。 ○口縁内面に2段のゆるい筋がつく。	○口縁部内外面とも横ナダ。	○甘い。 生焼け状態。 ○密。 ○外袖灰10Y7/1 ○B-1脚3層。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
土	甕	40	○16.2 ○11.6 ○ ○口縁1/12段	○長脚の脚部に「く」の字形に鋸く屈曲し、内窓欠缺に外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面横ナダ。 ○体部外面ハケメ、内面下から上へのへラケズリ。	○やや甘い。 ○角閃石多量、長石、萤石少量化。 ○にぶい褐色(7.5YR 6/3)。 ○生駒西麓産。 ○SK16。
縦	甕	41	○8.8 ○8.9 ○ ○	○瓶形の体部。	○体部外面ハケメ、内面ケズリ。	○良好。 ○長石(小量)角閃石、萤石を含む。 ○後黄2.5YR 7/3。 ○A7第3層。
器	甕	44	○22.7 ○7.2 ○ ○	○直線的に歩め上方にのびる口縁部に端面は面をなして終わる。	○体部外面ハケメ、内面ナダ。	○良好。 ○良。 ○生駒西麓産。 ○A103層。
赤生土器	鉢	45	○ ○6.4 ○5.2 ○	○口縁部欠損。 ○突出した底部にすり算状の体部。	○不明。	○やや甘い。 ○1m前後の長石・萤石を含む。 ○後5YR 6/6。 ○A7第3層下層。
青磁	瓶	46	○13.4 ○4.3	底部欠損。		○良好。 ○長石をわずかに含む。 ○オリーブ灰10Y 7/2。 ○B3第3層。
白磁	瓶	47	○11.8 ○3.7	口縁部欠損。		○良好。 ○長石をわずかに含む。 ○オリーブ灰10Y 5/2。 ○A12第3層。
復志	高环	48	○9.2 ○4.1 ○ ○表面1/4段	○高い脚台、基部から脚端へ外折しひろがる。脚端は径状になり端部は丸く終わる。 ○長方形通孔が四方に向くと思われる。	○脚端外面カキ目、内面横ナダ。 ○脚端部内外面横ナダ。	○良好。 ○良。 ○灰白N7/-灰6/。 ○A123層。
	高环	49	○8.0 ○4.85 ○ ○表面1/4段	○頸に同じ。	○頸に同じ。	○良好。 ○良。 ○外明青灰5PB 7/1 - 5P 7/1。 ○A11第3層。
赤生土器	底	50	○9.8 ○4.4	○外面ハケメののちナダ。	○内底面ハケメ。	○やや甘い。 ○長石・角閃石を含む。 ○後黄2.5Y 7/3。 ○A7第3層下層。
土	鉢	51	○26.6 ○7.15 ○ ○口縁1/10段	○張りの弱い体部に外反する口縁部がつくる。 ○底部はわずかに拡張し、面をもつ。	○口縁部内外面横ナダ。 ○体部内面ハケメののちナダ、外面ナダ。	○良好。 ○長石、石英砂多量に含む。 ○外候黄2.5Y 8/3。 ○極端底板。 ○A11第3層。
縦	器	53	○29.2 ○4.9 ○口縁1/12段	○廣く、やさやかに外反する口縁部に端部は丸く終わる。	○口縁部内外面横ナダ。 ○体部外面ハケメ(7条/1cm)、内面ナダ。	○良好。 ○1mの大長石・角閃石多量。 ○にぶい性外2.5YR 6/3。 ○生駒西麓産。 ○A3層。
赤生土器	細底甕	55	○5.6 ○8.3 ○口縁部完存	○口縁部はあみ上方にひらがり、口縁端部は平底に終わる。 ○窓部内面にしぶり底を残す。	○口縁端部に2.5m間隔の窓状文、瓶底に階接直線文(30条)を右回りに5段ずつ。 ○文様間ヘラミギキ、内面横ナダ。	○良好。 ○こまかに角閃石多量、こまかに長石粒含む。 ○灰青褐色10Y R 4/2。 ○生駒西麓産。 ○A3SD22。

基 礪	基 礪 形 態	番 号	法 量 (a)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
苏 生 土	表 面	55	○1.3 ○10.6 ○口縫部 1/3段	○表面になると思われるが、天井部欠 損。	○外側へラミガキ、内面ナダ。	○良好。 ○角閃石多量、長石・ 雲母少量含む。 ○灰オーラー色 5 Y 6/2。 ○半軟質開鑿。 ○A 8 S D22盛土。
	底 盤	56	○6.1 ○5.3 ○口縫部 1/4段	○平底の底底部。	○脚部下半、腹方向のヘラミガキ、内面 ナダ。	○良好。 ○角閃石・雲母多量、 長石少。量。 ○褐灰色 10 Y R 4/1。 ○半軟質開鑿。 ○A 7 S D22盛土。
	底 部 口 縫	57	○12.8 ○7.5 ○○口縫部完全	○高尖状の口縫部に、口縫端部を下側に 折張する。	○口縫端部右回りの裏柱文を施し、そ の後2mm前後の側穴文を施す。側穴 は口縫端部をつらぬいている。 ○裏柱に2条の筋状を配す。全体に凹 がある。 ○内面横ナダ、外側へラミガキ。	○良好。 ○角閃石・雲母多量、 長石・ ○灰黃褐色 10 Y R 6/2。 ○半軟質開鑿。 ○A 7 S D22盛土。
基 礪 板	表 面	58	○14.8 ○4.06 ○○口縫 1/4段	○腰に腰をもち、体部は内傾気味に立ち あがる。口縫部は段状口縫となり、端 部を下方へ丸く折れてくる。	○口縫端部に横による剥離、体部に幅 1.3mmの裏柱文2帯以上有す。 ○外側風化らしい、内面横ナダ。	○ややせい。 ○こまかなか長石粒・雲 母多量、くさり縞少 量含む。 ○にぶい・褐色 7.5 Y R 7/3。 ○半軟質開鑿。 ○A 3 S D22。
	底 部	59	○13.0 ○7.7 ○○口縫 1/10段	○丸柱をもつ体部に短く外反する口縫部 をつける。 ○口縫端部は直をもって終わる。	○口縫部内外温熱ナダ。 ○体部裏面半高ハケメのち横ナダ、下半 腹方向のヘラミガキ。 ○体部内面ハケメ(5条/α)。	○良好。 ○1~2mmの大長石、 石英粒多量、くさり 縞・雲母を含む。 ○にぶい・黄褐色 10 Y R 7/2。 ○半地成土。 ○B 5 S D21。
底 部 口 縫	表 面	60	○18.4 ○8.6 ○○口縫 1/4段	○腰尖方に開く口縫部に大きく外反する 口縫部がつく。 ○口縫端部を下方に折張する。	○口縫端部に裏柱文、底部に幅1.0mmの 6条の裏柱文を3帶有す。 ○口縫部内外横換ナダ、端部の外側板ナ ダ。	○良好。 ○1~2mmの大長石、 石英粒多量、くさり 縞・雲母を含む。 ○灰オーラー色 7.5 Y R 5/2。 ○半軟質開鑿。 ○B 9 T 壤。
底 部	底 部	61	○14.3 ○3.7 ○○口縫 1/5段	○縫隙部があまりしまらず、なだらかに水 平方向に外反する口縫部に端部は丸く 終わる。	○口縫部内外面、ココナダ。 ○口縫部外側ハケメ(9条/α)、内面へ ラミガキ。 ○内面外側に横付背。	○良好。 ○こまかなか長石・角閃 石・長石含む。 ○灰・黄褐色 10 Y R 6/2。 ○半軟質開鑿。 ○B 3 S D22第3層。
基 礪 板	底 部	62	○○ ○基高 4.5 (残存) ○5.5 ○口縫部完全	○平底の底底部。	○体部下半、腹方向のヘラミガキ。内底 面へラミガキ。	○良好。 ○こまかなか長石・雲 母・くさり縞を少量 含む粘土板土。 ○にぶい・褐色 10 Y R 7/2。 ○半地成土。 ○A 3 S D22。
	底 部	63	○19.4 ○4.0 ○○口縫 1/2段	○さっすぐに立ちあがる体部に、口縫部 は段状口縫となり端部を下方へ折形状 に折れはじける。 ○縫隙に腰をもつと思われるが欠損。	○口縫端部に横による剥離、体部に裏柱 文を施す。 ○外側風化らしい、内面横ナダ。	○ややせい。 ○こまかなか長石・雲 母・くさり縞を少量 含む粘土板土。 ○にぶい・褐色 5 Y R 7/3。 ○半地成土。 ○A 3 S D22。

基 盤 形	番 号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	性 格 の 特 徴	備 考
新 生 土	64	○19.2 ○5.3 ○ ○口縁 1/4周	○椎部に瘤をもち、体部は内傾気味に立ちあがる。口縫部は段次口縁となり、嘴部を下方へ台形状に折れあげる。 ○体部下半に黒帯を有する。	○口縫部に瘤による前突、体部に幅1.2cmの要状文を2帯複文する。 ○体部下半ヘラミガキ、内面横ナダ、腹部内面ハメを残す。	○良好。 ○こまかなる茎葉・長い石粒・くさり縫合を少含む。 ○褐色 2.5Y R 7/8. ○地塊底。 ○A 3 S D22.
	65	○12.0 ○3.3 ○口縁 1/7周	○くの字形に屈曲反する口縫部に、嘴部はわずかに上方へつまみ上げ気味に終わる。 ○口縫端部は面をつくる。	○口縫部外表面横ナダ。 ○体部外表面ナダ、内面ナダ。	○良好。 ○ここから角閃石・雲母多量、長石少量含む。 ○黄褐色 2.5Y 5/3. ○生側面観察。 ○B 8 7周。
	66	○10.8 ○2.3	○内凹気味に弧がる頭部に外反する口縫部がつく。 ○口縫端部を下方に放散する。	○口縫部外表面風化度高い。 ○口縫端部に要状文を残す。	○やや肥厚。 ○各石・角閃石多量、雲母・くさり縫合を含む。 ○にぶい黄褐色10Y R 6/1. ○生側面観察。 ○B 9 7周。
新 土	67	○ ○ 6.3 ○ ○薄縫部 1/2周	○中空の頭部。	○頭部外表面に1cm間隔で分岐文を全面に施文。 ○内外面風化度高い。	○やや肥厚。 ○1~2mm大の長石粒多量、こまかなる角閃石多量。 ○外灰白色 10Y R 7/1. ○生側面観察。 ○3号用器皿、砂層内。
	68	○11.4 ○25.4 ○3.6 ○光沢	○太高的体部にくの字形に屈曲外反する口縫部がつく。口縫端部は受口狀に嵌め上方に張り出し、端部に凹凸状に凹む。 ○頭部は安定した平底がつく。	○体部上半は、嵌め方向のハケメ (6条/mm)、下半は嵌め方向のヘラミガキ。 ○口縫部外表面横方向のナダ。 ○体部中位から下半に底の付着がある。	○良好。 ○石英・くさり縫合を含む。 ○灰白色 2.5Y 8/1. ○他地塊底。 ○A 3 S D22.
新 系 統	70	○8.1 ○26.45 ○6.2 ○光沢	○口縫部は嵌め上方に張り出し、口縫端部が内凹気味に「く」の字形に屈曲外反する。 ○口縫端部は面をもって終わる。 ○体部はほぼ球形で、平底の安定した底部がつく。	○頭部に標準横枝文(11条)を3带、体部に5带を施文する。 ○体部外表面横方向のヘラミガキ、底部外表面もヘラミガキ。 ○要部内面ナダ。	○良好。 ○石英・石英岩多量、灰白色 7.5Y R 6/2. ○地塊底。 ○B 4.5号用器皿、砂層土。
新 系 統	71	○18.2 ○6.6 ○ ○口縁 1/4周	○少し丸をもつ体部に、口縫部が内凹気味に「く」の字形に屈曲外反する。 ○口縫端部は面をもって終わる。	○口縫部外表面とも横ナダ。 ○体部外表面、頭部にはハケメののち後ナダ。 ○体部内面、ハケメ (5条/mm)、内面は、漆工の先端でナダツケている。	○良好。 ○こまかなる長石粒・雲母を少含む。 ○にぶい黄褐色10Y R 7/3. ○地塊底。 ○A 11 S D22.
新 系 統	73	○標高 6.6 (成等) ○頭部光沢	○平底の大重量底。	○体部外表面中空枝方向のヘラミガキ、下半張り方向のヘラミガキ。 ○体部内面、ハケメ (7条/mm)。 ○底部外表面ナダ。	○良好。 ○長石・石英・雲母を含む。 ○外灰黄色10Y R 6/2. ○地塊底。 ○A 8 S D22の肩。
新 系 統	74	○10.8 ○6.7 ○脚部光沢	○太く、低い脚部に、雲母はだらかに広がる。 ○縫端部は上方に張り出し、面をつくる。	○脚部外表面、ハケメののち、ヘラミガキ。 ○内面ナダ、しづり縫合をこす。	○良好。 ○こまかなる角閃石・雲母多量、1mm前後の長石粒を少含む。 ○にぶい褐色 5 Y R 6/3. ○生側面観察。 ○B 1.3号用器皿、砂層内。

基 盤	基 形	番 号	汎量(α)	形態の特徴	技 法の特 徴	備 考
赤 土 器	董	75	○94.2 ○6.5 ○ ○口縁 1/4強	○腹部から外反して、端部を上下に拡張し、先端状に下くる。 ○口縁端部の下方のみを放逐に打ち欠いている。	○口縁端部に横状文を施文し、その上に刻文を施す。 ○腹部に横状文が認められる。 ○内面ナゲ、外側へラミガキ。	○良好。 ○口縁後後の角閃石・青白多量、先端・くさり帶合む。 ○にぶい黄褐色 10Y R 8/4。 ○生鉄西羅底。 ○B 9層。
	高 杯	76	○99.6 ○7.8 ○口縁光形	○先端純形の杯部に縫隙は欠損。 ○口唇端部は、内側に肥厚。	○口縁端部に一条の引継文を施文。 ○口縁部内外面をヘラミガキ。	○良好。 ○口縁後後の角閃石多量、こまかな白石・雲母を少量含む。 ○口縁色 5 Y R 8/1～灰白色 8/3。 ○地鐵底。 ○生鉄西羅底。
	短 瓶 董	77	○8.3 ○21.6 ○收割以外完存	○先端欠損。 ○美圓の体部に割れ上方に直線的に開く口縁部がつく。口縁端部は丸く終わる。 ○縫隙は小さな平底。	○口縁部内外面横ナデ、 ○口縁部、体部内外直線ナデ、 ○体部端部に粘土結の結合線、全体に粗筋なつくり。 ○体部中位に径 2.1cm の円孔。	○良好。 ○長石を多く含む（小石を多く含む）。 ○口縁色 5 Y T 7/2。 ○地鐵底。 ○区土器群一括。
	短 瓶 董	78	○6.65 ○21.15 ○4.6 ○完形	○長圓の体部に鋸口縁部がつき、口縁部は内寄寄りの、端部は内傾する。 ○縫隙は小さな平底。	○口縁部、体部上半は粗いハケメ（4条/ α ）。 ○体部下部へラミガキ。 ○体部中位に径 1.6cm の円孔。	○良好。 ○長石を多く含む。 ○口縁色 7.5 Y R 8/2。 ○地鐵底。 ○区土器群一括。
	董	79	○8.05 ○22.6 ○6.6 ○光形	○球形に近い体部に溝状にひらく口縁部がつく。 ○口縁端部を下方に拡張する。 ○底部は安定した平底。	○口縁部、体部外面ハケメ（7条/ α ）。 ○体部上位下半、ヘラミガキ、内面粗いハケメ（4条/ α ）。 ○体部外面下半に底付窓。	○良好。 ○口縁色 7.5 Y R 8/2。 ○地鐵底。 ○区土器群一括。
	董	80	○8.5 ○7.7 ○口縁 1/2強	○粗く、わずかにひらく口縁部に、口縁端部を拡張する。	○口縁端部に崩による外点文。 ○体部上半に横状直線文（6条）3帯は上施。 ○口縁部背面へラミガキ、内面ナデ。 ○縫隙にしばり底。	○良好。 ○長石・黒石・角閃石を含む。 ○口縁色 5 Y 7/3。 ○生鉄西羅底。 ○D 区土器群一括。
	短 瓶 董	81	○7.8 ○14.0 ○口縁完存	○円筒状の口縁部に端部は丸く終わる。	○口縁部に直状文（5条）1帯と直線文（8条）4帯と施す。 ○体部に横状文を施す。 ○口縁部内面ナデ、縫隙にしばり底。	○良好。 ○多数の極小の長石わずかに極小の白石・角閃石を含む。 ○口縁色 10 Y R 8/3。 ○地鐵底。 ○D 区土器群一括。
	董	83	○99.6 ○7.2 ○口縁 1/4強	○「く」の字形に藍墨外反する口縁部に端部は底をつくる。	○腹部内面にゆるやかな縦をもつ。 ○口縁部内外面ハケメ（4条/ α ）。	○良好。 ○底の長い長石・角閃石・石英を含む。 ○にぶい橙色 7.5 Y R 7/4。 ○生鉄西羅底。 ○D 区土器群一括。
	短 瓶 董	84	○ ○16.3 ○4.9 ○体部完存	○彌五状の体部に、小さな突出した平底の縫隙がつく。 ○口縁欠損。	○体部上半に直線文（6条）5帯を施す。 ○体部下半へラミガキ。	○良好。 ○細母、長石を多く含む。 ○にぶい黄褐色 10 Y R 8/3。 ○生鉄西羅底。 ○D 区土器群一括。
	董	85	○ ○26.7 ○3.6 ○口縁完存	○球形の体部に安定した平底の底底。	○体部上半に斜格子文、直線文（5条）2帯。 ○体部下半へラミガキ。 ○体部中位に径 2.5cm の円孔。	○やや良い。 ○長石を多く含む。 ○灰白色 2.5 Y R 8/2。 ○地鐵底。 ○D 区土器群一括。

部 類	基 本 形 状 号	法 量 (α)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
基 本 形 状 類	基 66	○19.5 ○10.5 ○3.1 ○完形	○丸形をおびたやや異常な体部に、口唇部を下に折りまげるようにつくる。 ○底部は、底面で安定している。	○口唇部内部ハケメをこす。 ○体部外面へラミガキ。 ○体部下半に少量着付着。	○良好。 ○0.1~2.5mmの白色砂粒を多く含む。 ○灰白色 7.5Y 8/1。 ○他地成度。 ○SD12個1層。
	基 67	○15.6 ○17.9 ○口縁、体部上半 1/2段	○球形に近い体部に、底く外反する口唇部をもつ。○脚部は、強いヨコナデによりわずかに丸く肥厚する。	○体部上半に直線文(6条)4帯と波状文(6条)3帯を交叉に施文。 ○体部外面ハケメ(6条/α)のち次々横筋文、内面着付さえ。 ○口唇部内外面着ナデ。	○やや甘い。 ○1~3mmの黄色、2~3mmの大字英文字を多く含む。 ○灰白色 7.5Y 8/2。 ○他地成度。 ○D区土器群一部。
	高 88	○13.1 ○9.9 ○7.3 ○完形	○口縁部が太平にのびる。口縁外端面をわずかに下方へ曲折する。 ○脚部は中空の両形で、ゆるやかに弧がる脚部がつく。底部は圓となる。	○口唇部外面着ナデ。 ○体部外面へラミガキ。 ○脚部外端へラミガキ。	○やや甘い。 ○ ○ ○他地成度。 ○D区土器群一部。
生 長 類	更 89	○22.6 ○体部 1/2段	○口縁、底面欠損。	○体部外面上半ハケメ(4条/α)下半 下から上へかるくヘラケズリ。 ○内面ナデ。	○やや甘い。 ○こまかなる長石・石英・くさりの結合む。 ○灰黄色 7.5Y R 8/3。 ○他地成度。 ○D区土器群一部。
	土 重 90	○16.0 ○28.5 ○7.8 ○完形	○丸高の体部に圓錐状の口唇部がつく。 ○口縁部を上方に少し膨張する。	○口唇部外面着ナデ。 ○口縁部、体部外型粗いハケメ(3条/ α)。 ○体部下半へラミガキ。 ○体部中位に沿状に着付着。	○良好。 ○西。 ○灰白色 2.5Y 8/1~ 8/2.7/1。 ○他地成度。 ○9号土器群、北西周 期。
器 類	更 91	○14.45 ○23.45 ○5.2 ○完形	○脚部のあまりはりださない倒錐形の体 部に、脚部はゆるやかに外反する口唇部 がつく。脚部はわずかに面をもつ。 ○底面は、小さな平底。	○口唇部外面着ナデ。 ○体部外表面ハケメ、内面着付。 ○外面に着付着。	○やや甘い。 ○内閃石多量、こまか な長石・石英の結合む。 ○灰黄色 2.5Y 4/1。 ○生脚西器。
	鉢 92	○27.4 ○12.4 ○ ○口縁 1/5段	○内閃石によるくひらがる体部に、口 唇部はまるく終わる。	○器表面の磨擦痕らしい。 ○体部内外面着ナデ。	○良好。 ○角閃石と長石を多く 含む。 ○にぶい色にぶい赤 3.5Y R 6/3~5/3。 ○生脚西器。
	鉢 93	○26.6 ○9.8 ○ ○口縁 1/6段	○すり鉢形の体部にゆるやかに外反する 口唇部がつく。脚部はわずかに面をもつ。	○口唇部側方のハケメ(34条/α)。 ○体部外型較方角のハケメ(3条/ α)、内面ハケメおよび板ナデ。	○良好。 ○角閃石多量、こまか な長石。薄母を含む。 ○灰褐色 10Y R 3/1。 ○生脚西器。
便 利 類	便 94	○28.9 ○10.75	○わずかに丸みをもつ体部に、底く外皮 する口唇部がつく。	○口唇部内外面着ナデ。 ○体部内外面着ナデ。	○良好。 ○こまかい表面を含む。 ○灰黄色 2.5Y 7/2。 ○生脚西器。
	便 95	○27.6 ○5.1 ○ ○口縁 1/5段	○倒錐形の体部に面がしまらずながら に外反する口唇部がつく。 ○口唇部は丸く終わる。	○口唇部内外面着ナデ。 ○体部外表面へラミガキ、内面ナデ。	○良好。 ○こまかい表面と角閃 石を含む。 ○灰黄色 2.5Y 6/2。 ○生脚西器。
便 利 類	便 96	○ ○21.2 ○7.6 ○体部 1/2段	○削下部がりだす体部に、平底の安定 した底部がつく。	○体部外面上半に微文水字を施文。 ○体部内面ナデ。	○良好。 ○ ○にぶい褐色 5Y R 7/3~7/4。 ○生脚西器。

種 類	番 号	法 量 (a)	形 態 の 特 徴	性 格 の 特 徴	備 考
赤 牛	97	○ ○○ ○口縁、体部充存	○球形の体部に、幅く短い口縁部がつき、口縁部は内面気味に丸く終わる。	○口縁部に直線文 (7条) 1帯、端部に4帯施文。 ○体部下半へラミガキ。 ○体部上半に 0.8mm の円孔。 ○底脚欠損。	○良好。 ○長石・石英粒を含む。 ○○ ○地底底。 ○2号土壤基周辺。
	98	○19.8 ○ 8.9 ○ ○口縁1/15無	○少し丸味をもつ体部に幅く外反する口縁部がつく。 ○口縫部は、丸く終わる。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部外面にまかんハケメ (10条/a) 内面ナダ。 ○体部外面に窪行者。	○良好。 ○内閃石と黄母を多く含む。 ○淡黄色 2.5Y 7/2。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
	99	○21.0 ○ 3.2	○大きめ外方向にひらく口縁部、端部を上下嵌合し、面をつくる。	○口縁端部に斜行子文を施文。 ○口縫部内外面ナダ。 ○体部表面底度をうけている。	○良好。 ○1~2号大的内閃石多量、長石・雲母を含む。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
土 台 付 荷	100	○36.4 ○11.7	○球形の体部に面がしまらず、ながらかに外反する口縫部がつく。 ○口縫部は丸く終わる。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部内外面ナダ。 ○体部外面窪行者。	○良好。 ○内閃石を多く含む。 ○黑色10YR 1.7/1。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
	101	○11.0 ○11.8 ○ 4.8 ○体部1/2無 ○脚台充存	○直線的に長い上方にひらく体部に口縫部は平坦に底をつく。 ○長い凹度の脚台がつく。	○体部に直線文 (5条) 6帯施文。 ○背壳器に径 0.3cm の円孔を前面に穿つ。	○良好。 ○こまかい内閃石を多く含む。 ○にぶい黃褐色10YR 7/2~7/3。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
番 属	102	○ ○ 5.5 ○ 6.4 ○底脚充存	○わずかに凹度。	○背壳器底度をもつ。	○やや甘い。 ○角閃石と雲母を多く含む。 ○灰白色~純灰色10YR 7/1~6/1。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
底 部	103	○ ○ 4.5 ○ 6.9 ○底脚充存	○安定した平底。	○底脚内部指压痕。	○良好。 ○角閃石を多く含む、雲母を少し含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 5/4。 ○生飼育観察。 ○2号土壤基周辺。
底 部	104	○14.0 ○ 6.7 ○ ○口縁1/2無	○直線状にひらく口縫部に口縫部は外反し、端部を下方へ嵌合する。	○縫部に直線文 (11条) 3帯施文。 ○口縫部に波状文 1 带施文。 ○口縫部を長い横ナダで調整したため、段状になる。	○良好。 ○角閃石と雲母を多く含む。 ○にぶい赤褐色 5 YR 5/4。 ○生飼育観察。 ○SD 3.3 程。
底 部	105	○17.4 ○16.0 ○ ○体部1/2無	○球形の体部に、口縫部が幅く外反する。 ○口縫部が体部底を上回る。	○口縫部内外面横ナデ。 ○体部外面上半にまかんハケメ (11条/a)。 ○縫部内面底度ハケメ (5条/a)。 ○体部外半窪行者、内面ナダ。	○良好。 ○雲母・長石・石英含む。 ○黒色10YR 2/1。 ○生飼育観察。 ○SD 3.7 程。
底 部	106	○12.0 ○14.95 ○ ○口縁1/2無	○30Hに同じ。	○口縫部底度文・研磨文。 ○縫部外面、ハケメのうちラミガキ、内面しづら底度。	○良好。 ○地。 ○にぶい黃褐色10YR 7/3。 ○生飼育観察。 ○SD 3.3 程。
底 部	107	○15.6 ○ 4.1 ○ ○	○ゆるやかに外反する口縫部、端部は丸く終わる。	○口縫部内外面ハケメ。	○良好。 ○0.1~2.0mm の白色砂粒を少し含む。 ○にぶい黄褐色10YR 6/3。

品種	番号	注量(α)	形態の特徴	接法の特徴	備考
鉢	108	○10.6 ○4.2 ○○	○鉢底の体部に、口縁底部は平坦に面をなして終わる。	○体部外側に5条の凹線を入れる。	○良好。 ○0.1~0.5mmの白色砂粒を少し含む。 ○灰白色10YR 8/1。
	112	○28.15 ○25.4 ○8.55 ○完熟	○球形の体部に高さがひらく口縁部がつく。口縁部は内反し、端部をわずかに弧状にして、面をつくる。 ○小さな平底の底部。	○体部外面上手に西洋文(10条)5密波状文1等を施す。 ○口縁部外側ハケメ、内面ナグ。 ○体部中位に各1.5cmの穴孔。 ○体部中位から下間に爆発筋。	○良好。 ○内凹部と尖石を多く含む。 ○灰白~浅黄緑7.5Y R 8/1~8/3。 ○生脚四瓣底。 ○SD 2第1層。
	113	○15.45 ○25.75 ○5.1 ○完熟	○体部に丸みをもち、「く」の字形に外反する口縁部がつく。口縁底部は上方につまみあげ、受口状につくる。 ○平底のわずかに突出した底部。	○口縁部内外面横ナゲ。 ○体部外面上手ハケメ(10条/α)、下半ハラクズリのち、ヘラミガム。 ○内面横ナゲ。	○良好。 ○密。 ○灰黄褐色10Y R 6/2。 ○生脚四瓣底。 ○SD 3第1層。
生根	114	○○ ○4.0 ○10.3 ○栽培 1/3段	○審底部。 ○平底の安定した底部。	○体部外側ハケメ(7条/α)、内面ナゲ。	○良好。 ○密。 ○灰黄褐色10Y R 6/2。 ○○ ○SD 3第3層。
	115	○○ ○10.6 ○7.65 ○栽培 1/3段	○茎の平底の底部。	○体部外側ハケメ、内面ナゲ。	○良好。 ○密と白色砂粒を多く含む。 ○にぶい黄緑色5Y R 7/2。 ○生脚四瓣底。 ○SD 3第3層。
	116	○○ ○32.5 ○33.5 ○栽培 1/3段	○球形の体部に、突出した平底の底部がつく。	○体部外側ハケメ(5条/α)のちナゲ、内面横ナゲ。 ○底部内面指押さえ。	○良好。 ○こまかに尖石と少量の青苔・長石含む。 ○にぶい緑色5Y R 6/3。 ○生脚四瓣底。 ○SD 2束葉。
茎	117	○○ ○18.0 ○1.9 ○○	○内反する口縁部、端部は丸く終わる。	○体部外側ハケメ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色砂粒を少し含む。 ○淡緑色5Y R 8/3。 ○○ ○SD 2第1層。
	118	○○ ○31.5 ○3.8 ○○	○口縁底部を下方に拡張し、面をつく。	○口縁部内外面ヨコナゲ。	○良好。 ○0.1~0.5mmの黒色砂粒を少し含む。 ○灰白色10Y R 7/1。 ○○ ○SD 2内1層。
茎	119	○○ ○4.0	○ゆるやかに外反する口縁部、端部は面をなして終わる。	○口縁部内外面横ナゲ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石。石英をわずかに含む。 ○にぶい赤褐色5Y R 6/4。 ○○ ○茎6層以上。
	120	○○ ○3.4 ○○ ○口縁 1/3段	○丸みをもつ体部から、「く」の字形に底盤外反する口縁部がつく。口縁底部をわずかに上方へつまみあげ、受口状につくる。	○口縁部内外面横ナゲ。 ○外部外側ハケメ(6条/α)、内面ナゲ。	○良好。 ○密。 ○灰黄色~暗灰黄色2.5Y 7/2~8/2。 ○栽培底盤。 ○SD 3第3層。
鉢	121	○○ ○6.2 ○○ ○口縁 1/3段	○直線的に斜め上方にひらく体部に、口縁部は直角にして終わる。 ○栽培欠株。	○体部外側ハケメ(8条/α)、内面ナゲ。	○良好。 ○密。 ○灰黄褐色10Y R 6/2。 ○生脚四瓣底。 ○SD 3第3層。

器 種	部 分	番 号	汎 量 (a)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
生 土 器	底 部	125	○ ○○ 3.8 ○○ 6.4 ○	○平底の安定した底部。 ○腹部。	○底部外縁ハケメ。	○良好。 ○細かい長石・角閃石 を極少量含む。 ○にぶい黄褐色 10YR 6/3。 ○ ○SD 3下層。
	底 部	127	○ ○○ 2.5 ○○ 6.0 ○	○平底の安定した底部。	-	○良好。 ○0.1~3.0mmの白色 砂粒を多く含む。 ○灰青褐色 7.5YR 7/2。 ○ ○SD 2内1層。
	底 部	128	○ ○○ 2.5 ○○ 4.9 ○底深充存	○平底部。 ○底の安定した底部。	○底部外縁ハラミガキ、内面板ナグ。	○良好。 ○0.1~0.5mmの白色 砂粒を少し含む。 ○灰青褐色 5YR 6/3。 ○生飼西端部。 ○SD 2内1層。
	底 部	129	○ ○○ 4.0 ○○ 9.0 ○	○腹底部。	○底部内面ハケメ。	○良好。 ○良石を多く含む。 ○灰褐色 7.5YR 6/2 - 5/2。 ○ ○SD 3 3層。
	底 部	130	○ ○○ 5.4 ○○ 10.3 ○	○腹底部。	-	○良好。 ○良石を多く含む。 ○灰褐色 2.5Y 6/2。 ○ ○SD 3内3層。
	高 杯	131	○○ 6.0 ○○ 1.8 ○○ ○	○水平にのびる口縁部。	○口縁部内外面板ナグ。	○良好。 ○2~3mmの良石を含 む。 ○灰褐色 2.5Y 7/3。 ○SD 5 1層。
	高 杯	132	○○ 22.4 ○○ 3.6 ○○ 口縁1/16周	○外反する口縁部に、端部を下方へ弧説 して頭をつくる。	○口縁端部に横状文1帯、頭部に横状文 1帯以上幾文。 ○縁部影を故意打ちちいた痕跡があ る。	○良好。 ○0.1~1.0mmの黑色 砂粒を多く含む。 ○1.0~1.0mmの白色 砂粒を少し含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 7/3。 ○生飼西端部。 ○SD 5 1層。
	高 杯	133	○ ○○ 2.7 ○○ 口縁1/16周	○「く」の字形に外反する口縁部に端部 を受口状に上方へつまみあげる。	○口縁部内外面板ナグ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの黒色 砂粒と白色砂粒を多 く含む。 ○褐色 5YR 7/6。 ○生飼西端部。 ○SD 5 1層。
	高 杯	135	○○ 3 ○○ 1.1 ○○ ○	-	-	○良好。 ○0.1~3.0mmのあら い黑色砂粒を多く含 む。 ○にぶい褐色 7.5YR 7/4。 ○ ○5層。
	高 杯	136	○○ 16.2 ○○ 6.5 ○○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部。	-	○良好。 ○細小の長石・角閃 石・石英を含む。 ○にぶい黄褐色 10YR 6/3。 ○ ○SD 5第1層。

基 盤 形	番 号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	考 察
寄 生 土 石	高 床 137	○20.0 ○3.4	○杯状欠陥。		○良好。 ○0.5~2.0mmの白色 砂粒を少し含む。 ○にぶい褐色 6 YR 7/3。 ○ ○第9号用溝基北溝。
	138	○17.8 ○4.5 ○ ○口縁 1/7残	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は面をして終わる。	○口縁部内外面被ナゲ。 ○体部外縁ハケメ(4条/□)、内面ナ ゲ。	○良好。 ○こまかに角閃石と1 mm程度の長石を含む。 ○褐色 5 YR 6/6。 ○地塊底。 ○SD 7。
	139	○17.8 ○4.3 ○ ○	○漏斗状にひらく口縁部に端部は下方に 膨張して面をなす。	○口縁部に波状文および円形彫文を附 り付ける。	○良好。 ○0.1~1.0mmの黑色 砂粒を少し含む。 ○灰褐色 7.5 YR 5/2。 ○ ○SD 5 1層。
	140	○20.0 ○1.8 ○○○○	○ゆるやかに外反する口縁部に、端部は 直面もって終わる。		○良好。 ○0.1~2.0mmの白色 砂粒を多く含む。 ○灰褐色 7.5 YR 8/3。 ○ ○SD 5 1層。
	141	○17.0 ○2.3 ○ ○口縁1/12残	○すり鉢状の体部にゆるやかに外反する 口縁部がつく。口縁端部は丸く終わ る。	○体部外縁ハケメのもの、ナゲ。	○良好。 ○0.1~1.0mmの白色 砂粒を少し含む。 ○にぶい褐色 7.5 YR 7/3。 ○地塊底。 ○SD 5 2層。
	142	○20.6 ○2.1 ○ ○口縁1/12残	○漏斗状にひらく口縁部に外反する口縁 部がつく。 ○口縁端部を下方へ膨張し面をつくる。	○表面磨滅痕らしい。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色 砂粒を多く含む。 ○褐色 2.5 YR 7/8。 ○ ○SD 5 1層。
	143	○14.5 ○2.4 ○ ○口縁 1/9残	○内面直線にのびる口縁部に端部を下方 に膨張する。	○口縁部内外面ナゲ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色 砂粒を少し含む。 ○にぶい褐色 7.5 YR 6/3。 ○生糞腐鉛底。 ○SD 5 1層。
	145	○26.4 ○3.3 ○ ○口縁1/12残	○大きめ外反する口縁部に端部は丸く終 わる。	○表面風化像らしい。	○良好。 ○0.1~0.5mmの白色 砂粒を多く含む。 ○灰褐色 2.5 YR 6/6。 ○地塊底。 ○第9号方形用溝基北 溝。
	146	○24.1 ○4.1 ○ ○口縁1/11残	○ゆるやかに外反する口縁部に端部は面 をして終わる。	○口縁端面に1条の凹彫文を施す。	○良好。 ○0.1~2.0mmの赤茶 色の砂粒を多く含む。 ○灰褐色 10 YR 7/1。 ○地塊底。 ○第9号方形用溝基北 溝。
寄 生 土 石	147	○23.6 ○3.65 ○ ○口縁 1/3残	○先口状に口縁端部を上方にたもあが る。	○口縁端部に櫛状の斜彫文及び、縁の先 端での刻文を施す。	○良好。 ○大きい長石・角閃 石・極小の石英。 ○生糞西面底。 ○SD 7 上層。

番 号	番 号	法 数 (a)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
東	東 148	○12.2 ○○3.2 ○口縁 1/2枚	○軽く斜め上方にのびる瘤部に外反する ○瘤部がつく。 ○口縫部は、わずかに上下に拡張し、 面をつくる。	○口縫部内面側ナゲ。 ○瘤部外面ハケメ (5条/a) のち、 ナゲ、内面ナゲ。	○良好。 ○1~2種度の長石を多く含む。 ○灰白色 2.5Y 8/2。 ○他地斑斑。 ○SD 7上層。
	東 149	○ ○○5.4 ○○5.1 ○底脚充存	○底脚部。	○底脚外側に木炭文を残す。 ○体部下半ハケメ。	○良好。 ○こまかに角閃石含む。 ○灰白色 10Y R 8/1。 ○他地斑斑。 ○D区上部一括。
	東 153	○15.8 ○21.35 ○○	○口縫部を下方に武装して、面をつく る。	○口縫部に瘤状文を残す。	○良好。 ○0.1~1.0mmの白色 砂粒を多く含む。 ○褐色 10Y R 4/1。 ○○ ○SD 7上層。
	東 154	○瘤部 1/6枚	○円筒形の瘤部に2条の突起を駆け付 ける。	○瘤部表面感が激しい。	○良好。 ○他地斑斑。 ○SD 7上層。
	東 155	○11.6 ○3.9 ○○ ○口縁 1/5枚	○少しやかに外反する口縫部に、瘤部は 丸くある。 ○小型の瘤。	○体部外側ナゲ、内面ナゲ。 ○体部外面に瘤状。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色 砂粒を多く含む。 ○黒褐色 10Y R 3/1。 ○他地斑斑。 ○SD 6 1層。
	東 156	○ ○口縁 1/3枚	○ほぼ円筒形ののびる瘤部に、口縁は内 面弧形に直口する。 ○底脚欠損。	○内外面ナゲ。	○やや45°。 ○2~3mmの石英粒 多量。 ○○ ○他地斑斑。 ○SD 7。
	高 杯 157	○17.0 ○○4.5 ○○ ○口縁 1/5枚	○瘤部欠損。 ○瘤部後をもち、口縫部はやや前めに立 ちあがる。	○口縫部に4条の凹線文を残す。 ○杯前面ナゲ。	○良好。 ○感。 ○に赤い赤褐色 5 Y R 5/2。 ○生物附着。 ○SD 7第3層。
	東 158	○19.5 ○○5.7 ○○ ○口縁 1/6枚	○外反する口縫部に瘤部は面をもって終 わる。	○表面感が激しい。	○良好。 ○1~2種度の長石と石 英を含む。 ○灰白色 2.5Y R 6/2。 ○他地斑斑。 ○SD 6 1層。
	瘤 頭 東 159	○18.3 ○○0.7 ○○5.0 ○○	○球形の瘤部に、外上方にのびる短い頭 部に口縁は直口する。 ○底脚は突出した平底であるが、片方が 非常に膨らんでいる。	○瘤部に直線文 (3条) 3等、体部上半 に複数文4等、底脚文1等複文。 ○体部下半ハラミガキ。 ○瘤部に瘤状が残っている。	○良好。 ○角閃石を多く含む。 ○灰白色 2.5Y R 1/1~ 7/1。 ○他地斑斑。 ○SE 1。
	東 160	○21.2 ○4.8	○「く」の字形に外反する口縫部に、瘤 部は交叉状につまみあがれる。	○体部外面ハケメ。	○良好。 ○小さな長石・角閃石 を含む。 ○に赤い赤褐色 10Y R 7/4。 ○○ ○SD 2 1層。
	東 161	○26.5 ○○4.0 ○○ ○口縁 1/2枚	○口縫部を上下に拡張して、瘤部を大 きくつく。	○口縫部端面に瘤状文2帯、斜文を残 す。	○良好。 ○こまかに角閃石・長 石を含む。 ○に赤い赤褐色 7.5Y R 7/4。 ○生物附着。 ○4層。

部 種	器 形	番 号	油 量 (ml)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	考 察
各 生 土 器	甕	168	○23.0 ○3.7 ○ ○口縁 1/4強	○口縁端部を上下に拡張し、端面を広くつくる。	○口縁端部に直状文 2 帯、刻突文等 3 帯を施す。	○良好。 ○極小の長石・角閃石を含む。 ○底 黄色 2.5 YR 6/2。 ○生鶏酉類似。 ○4層。
	甕	169	○22.4 ○1.4 ○ ○	○口縁端部を下方に拡張し、端面に直状文を施す。		○良好。 ○角閃石・長石を含む。 ○に近い赤褐色 10 YR 7/3。 ○生鶏酉類似。 ○4層。
	甕	170	○18.4 ○6.0 ○ ○口縁 1/6強	○外反する口縁部に端部を上方に拡張して面をつくる。端面は外張る。	○口縁部端面に直状文 (7条) 直状文を施す。 ○内面横ナデ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英・雲母を含む。 ○に近い赤褐色 5 YR 4/4。 ○生鶏酉類似。 ○4層。
	甕	171	○19.1 ○5.1 ○ ○口縁 1/5強	○外反する口縁部に端部を上下に拡張して面をつくる。	○口縁端面に直状文 2 帯、刻突文 2 帯に直状文。	○良好。 ○0.1 ~ 5.0mm の白色砂粒を多く含む。 ○浅黄褐色 7.5 YR 6/2。 ○他地成層。 ○4層。
	甕	172	○18.7 ○5.95 ○ ○口縁 1/5強	○膨ら状に外反する口縁部に端部を下方に拡張して面をつくる。	○口縁端面に直状文、腹部に直状文を施す。	○良好。 ○小さい長石・極小の長石・角閃石をわずかに含む。
	甕	173	○21.5 ○3.0 ○ ○口縁 1/10強	○無く外反する口縁部、端部は丸く終わる。	○口縁部内外面横ナデ。	○良好。 ○角閃石・長石を含む。 ○灰白色 10 YR 8/2。 ○他地成層。 ○4層。
	鉢 皿 蓋	174	○16.4 ○4.95 ○ ○口縁 1/4強	○側面に近い底部に、外反する細い口縁部をもつ。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部外壁ヘラミダギ、内面ナデ。 ○瓶部に径 0.6mm の円孔と 2 つ所附つ。	○良好。 ○小さい角閃石・長石・極小の長石・雲母を含む。 ○底 黄色 2.5 YR 6/2。 ○生鶏酉類似。 ○4層。
	甕	175	○21.2 ○16.5 ○ ○口縁 1/5強	○外反する口縁部に端部を下方に拡張して面をつくる。	○口縁端面に直状文を施す。 ○瓶部に直状文 3 帯を施す。	○良好。 ○小粒の角閃石を多数、長石を少數含む。 ○に近い赤褐色 10 YR 5/3。 ○4層 (隕層)。
	甕	176	○20.7 ○16.2 ○ ○口縁 1/5強	○求め上方に外反する口縁部に、端部上方に拡張し突口状につくる。	○口縁端部に直状文、刻突文。 ○瓶部に直状文 (10条) 5 帯、体部上半に直状文 1 帯を施す。	○良好。 ○長石多く含み、角閃石・石英少數含む。 ○底 黄褐色 10 YR 5/3。 ○生鶏酉類似。 ○4層。
	甕	177	○19.8 ○8.9 ○ ○口縁 1/7強	○側立ちあがる瓶部に、大きく外反する口縁部がつく。 ○口縁端部を上下に拡張して面をつくる。	○口縁端部に放状文。 ○体部上半に直状文 (6条) 、直状文と交叉して施す。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英をわずかに含む。 ○に近い褐色 7.5 YR 6/4。 ○他地成層。 ○4層。

名 称	番 号	形 状 (a)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
外 壳 生 土 質	176	○23.8 ○3.95 ○ ○口縁1/12浅	○溝4条にひらく口縁部は、端部は下方に弧張して面をつくる。	○口縁部に直線文1帯強化。	○良好。 ○1~2mm程度の長石を多く含む。 ○灰 黄褐色10YR 4/2。 ○生物附着底。 ○4層。
	179	○21.6 ○ 2.2 ○ ○口縁1/12浅	○ 176と同じ。	○口縁端部に稜状文、内面に円形浮文を貼付ける。	○良好。 ○長石・角閃石を中心。 ○灰 黄褐色10YR 6/2。 ○生物附着底。 ○4層。
	180	○口縁 1/3浅	○口縁部は円筒形で内側に、端部は平坦に面をもって終わる。	○口縁部外面に4条の凹線文、1帯の直線文を施す。	○良好。 ○長石・角閃石を中心。 ○生物附着底。 ○4層(複層)。
	181	○ ○ 3.4 ○10.5 ○	○溝。 ○笠形で、口縁端部は面をもち、2孔1対の鋸歯をもつ。	○体部内外面へラミガキ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石をわずかに含む。 ○灰 黄褐色10YR 5/2。 ○生物附着底。 ○4層(複層)。
	182	○15.3 ○ 6.0 ○ ○口縁 1/6浅	○大きく溝4条に外反する口縁部に端部は面をもって終わる。	○口縁部内面に橋による凸凹文を施す。 ○断面外側ハケメ(5条/□)、内面ナゲ。	○良好。 ○歎字の小粒の長石・角閃石・石英を含む。 ○灰 黄褐色10YR 6/2。 ○他地附着。 ○4層。
	183	○ ○ 7.7 ○ 4.2 ○体部充存	○口縫欠損。 ○球形の体部に短い外反する口縫筋がつく。 ○端部は凹底。	○体部外面に鶴足底を残す。 ○飛躍なしニヤマ土器。	○良好。 ○角閃石多量、長石、電母石を含む。 ○にい黄褐色10YR 6/2。 ○生物附着底。 ○4層。
	184	○14.5 ○ 3.8 ○ ○口縁1/10浅	○口縫部が受口状にまっすぐ立ちあがり、端部はわずかに内側に肥厚する。	○口縫部内面へラミガキ。	○良好。 ○長石・石英を含む。 ○灰褐色5YR 6/2。 ○他地附着。 ○4層(複層)。
	185	○17.8 ○ 4.0 ○ ○口縁 1/8浅	○短くゆるやかに外反する口縫部、端部丸く終わる。	○口縫部外表面横ナギ、内面ハケメ。(4 束/□)。	○良好。 ○0.1~1.0mmの白色砂粒を少し含む。 ○灰 黄褐色10YR 5/2。 ○生物附着底。 ○4層(砂層)。
	186	○13.9 ○ 5.9 ○ ○口縁 1/5浅	○溝4条にひらく口縫部に、口縫端部は面をもって終わる。	○口縫部外表面ハケメ(5条/□)、内面ナゲ。	○良好。 ○1ロ以上的石英と長石を含む。 ○灰色2.5YR 7/8。 ○他地附着。 ○4層(複層)。
土 器 器	187	○12.6 ○ 6.1 ○	○球形の体部に、ゆるやかに外反する口縫筋がつく。端部は丸く終わる。	○口縫部外表面横ナギ。 ○体部外表面ハケメ、内面へラケズリ。	○良好。 ○こまかい長石を多く含む。 ○灰白色5YR 8/1。 ○4層。
外 壳 生 土 器	188	○口縫1/10浅	○大きく外反する口縫部に端部を上下に膨張して面をつくる。	○口縫部に凹線文を施す。	○良好。 ○生物附着底。 ○4層(複層)。

器種	器形	番号	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	備考
新石器	葉状器	188	○11.5 ○2.2 ○ ○口縁1/16残	○波状口縁部をなす。口縁端部は貼り付ける。	○口縁端部は柳状による削尖をおこなう。	○良好。 ○灰石・角閃石・蛋白石を含む。 ○生剥西面底。 ○4層。
	鉢	189	○13.5 ○2.1 ○ ○口縁1/12残	○波状口縁をなす。口縁端部は下方へ折れまとまる。	○口縁端部に柳による削尖。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色砂粒を多く含む。 ○灰質10YR 6/2。 ○地塊底。 ○5層(紗麗)。
		191				
	高杯	192	○15.5 ○3.1 ○ ○口縁1/15残	○内凹する口縁部。	○口縁外周に柳による楔形文を施す。	○良好。 ○0.1~3.0mmの白色砂粒と0.1~1.0mmの黒色砂粒を多く含む。 ○にぶい橙色7.5YR 7/3。 ○生剥西面底。 ○4層。
	鉢	193	○口縁1/30残	○内凹する口縁部、端部は平底になる。	○口縁部外周に楔状文を2倍施す。	○良好。 ○灰石・蛋白石・角閃石を含む。 ○ ○生剥西面底。 ○4層。
	圓錐型	194	○11.4 ○4.9 ○ ○口縁1/6残	○口縁部に貼り付けにより波状口縁となる。	○器表表面化粧しない。	○良好。 ○被膜。 ○褐灰色7.5YR 5/1。 ○生剥西面底。 ○4層(研磨)。
土器	鉢	195	○30.6 ○4.2 ○ ○口縁1/16残	○口縁端部を下方に折り上げて端面をつくる。	○口縁端部に裏状文、全体外面に裏状文2倍以上施す。	○良好。 ○にまかた角閃石。1mm前後の灰石を多く含む。 ○にぶい褐色10YR 6/3。 ○生剥西面底。 ○4層。 (砂ヘシント)。
	盆	196	○33.2 ○2.8 ○ ○口縁1/16残	○波状口縁をなす。	○全体外面に裏状文2層以上施す。	○良好。 ○0.1~2.0mmの灰石と0.1~0.5mmの角閃石を多く含む。 ○にぶい褐色7.5YR 5/3。 ○生剥西面底。 ○4層(研磨)。
	鉢	197	○11.7 ○5.1 ○ ○口縁1/10残	○縁に縫をもじ、体部はまっすぐにたるもの。 ○口縁部は段状口縁になり、端部は貼り付ける。	○縁部内外面ナガ。	○良好。 ○角閃石や灰石を多量に含む。 ○褐色10YR 4/1。 ○生剥西面底。 ○4層(研磨)。
	盆	198	○36.1 ○3.6 ○ ○口縁1/10残	○波状口縁部は、貼り付ける。	○全体外周ハケメ、内面ヘラミゼキ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの白色砂粒を多く含む。 ○赤色5Y 4/1。 ○地塊底。 ○4層。
	高杯	199	○26.8 ○2.7 ○	○縁部欠損。		○良好。 ○0.1~2.0mmの白色砂粒を少し含む。 ○にぶい褐色7.5Y R。 ○ ○5層。

番 種	品 名	法 量 (a)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
赤 茶	休	○29.4 ○2.1 ○口縫1/16枚 200	○斜口縫をなす。	○口縫端部と体部に葉状文を施す。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石を多く含む。 ○にぶい黄褐色10YR 7/3。 ○生軟質硬度。 ○4層。
	把 手 付	○ 9.2 ○10.3 ○ 4.8 ○光形 201	○斜め上方に直線的にのびる体部に、直線の口縫部で終わる体に、長い瘤ひらきの舞台と化手が付く。	○体部内外面ナガ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石を多く含む。 ○にぶい黄褐色10YR 6/3。 ○生軟質硬度。 ○5層。
	高 杯	○ 9.4 ○○○	○脚柱部のみ残存。		○良好。 ○0.1~5.0mmの粗い白色砂粒を少し含む。 ○にぶい黄褐色10YR 7/2。 ○ ○4層(複層)。
土 器	高 杯	○ 5.0 ○○○	○脚柱部のみ残存。		○良好。 ○0.1~2.0mmの長石と角閃石を少し含む。 ○灰白色10YR 8/1。 ○ ○4層(複層)。
	高 杯	○ 7.5 ○○○	○杯部、底部欠損。 ○円筒状の中空の脚柱部。	○脚柱部外面に竹管文、内面しづり模のこす。	○良好。 ○0.1~2.0mmの長石を少し含む。 ○黄褐色2.5Y 6/1。 ○生軟質硬度。 ○4層。
	高 杯	○ 10.4 ○ 5.4 ○	○口縫高張。 ○すり斜状の深い脚柱部に中空の舞台がつく。 ○脚の脚部は段状に後になる。	○脚柱部外面に底水文を施す。 ○脚柱部ヘラミガキ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石を多く含み0.1~2.0mmの長石を少し含む。 ○灰黄褐色10YR 6/2。 ○生軟質硬度。 ○薄青色。
高 杯	高 杯	○ 11.0 ○○	○杯部、底部欠損。 ○細い円筒形の脚柱部。	○脚柱部外面ヘラミガキ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの長石と角閃石を含む。 ○にぶい黄褐色10YR 6/3。 ○生軟質硬度。 ○4層。
	高 杯	○ 9.8 ○ 6.8 ○○	○杯部、底部欠損。 ○ゆるやかに広がる脚部に脚部は面をもつ。 ○中空の脚柱部がつく。	○脚柱部外面ヘラミガキ。 ○脚柱部しづり模のこす。	○良好。 ○0.1~2.0mmの長石を少し含む。 ○灰白色。 ○生軟質硬度。 ○4層。
	高 杯	○ 11.8 ○○	○杯部、底部欠損。 ○太い円筒形の中空の脚柱部。	○脚柱部外面に竹管文、内面ナガ。	○良好。 ○0.1~3.0mmの長石を少し含む。 ○にぶい黄褐色10YR 7/2。 ○生軟質硬度。 ○4層(複層)。
高 杯	高 杯	○ 10.55 ○○	○細い円筒形の中空の脚柱部。	○脚柱部外面ヘラミガキ。	○良好。 ○0.1~1.5mmの角閃石を多く含む。 ○にぶい黄褐色10YR 6/2。 ○生軟質硬度。 ○4層(複層)。

目 標	番 号	番 号	法量 (m)	形態の特徴	法法の特徴	備 考
外 生 物 群	高 杯	210	○ ○ 4.9 ○ 14.7 ○ 植物 1/8株	○大きく外へ広がる葉部に中空の脚部がある。 ○脚部欠損。	○脚部内外面被覆なし。	○良好。 ○ 0.1~2.0mm の粗い 長石を多く含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 6/4。 ○地塊成土。 ○4 層。
		211	○ 29.6 ○ 29.35 ○ ○ 口縁 1/10株	○葉に後をもち、体部はまっすぐ立ちあ がる。 ○口縁部は、段状口縫をなし、口縁端部 は下方へ折れ上がる。	○口縁部端面に構による斜窓文。 ○体部外面に波状又は帯状文、内面ハケ メ (5 条/m)。	○良好。 ○極小の長石・角閃石を 含む。 ○にぶい褐色 10YR 6/3。 ○生物汚染度。 ○4 層。
		212	○ 12.8 ○ 3.2 ○ ○	○水平に折り上がる口縁部に、端部は丸 く終わる。	○口縁部内外面被覆ナダ。	○良好。 ○ 1 m 厚度の黒雲母を 少量含む。 ○にぶい褐色 7.5Y R. ○ ○ 4 層 (標準)。
	葉	213	○ 12.7 ○ 4.6 ○ ○ 口縁 1/7株	○水平方向に外反する口縁部、端部は丸 く終わる。	○体部外面ハケメ、内面ナダ。	○良好。 ○ 0.1~3.0mm の角閃 石を多く含む。 ○灰褐色 5 YR 6/2。 ○生物汚染度。 ○4 層。
		214	○ 12.1 ○ 2.7 ○ ○ 口縁 1/10株	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は丸く終わる。	○口縁部内外面被覆ナダ。	○良好。 ○ 0.1~1.0mm の角閃 石を多く含む。 ○にぶい褐色 10YR 6/3。 ○生物汚染度。 ○4 層 (レキ層)。
	葉	215	○ 19.6 ○ 6.7 ○ ○ 口縁 1/10株	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部はわずかに折り上げて丸く段状にな る。	○口縁部内外面被覆ナダ。 ○体部外面ハラミガキ、内面ナダ。	○良好。 ○ 0.1~2.0mm の長 石・角閃石を多く含 む。 ○灰質褐色 10YR 6/2。 ○生物汚染度。 ○4 層 (レキ層)。
		216	○ 29.4 ○ 26.25 ○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は尖り状にいく。	○口縁部内外面被覆ナダ。	○良好。 ○ 1 m 厚度の黒雲母を 含む。 ○灰褐色 5 YR 5/2。 ○ ○ 4 層 (レキ層)。
		217	○ 13.0 ○ 6.3 ○ ○ 口縁 1/6株	○先端をもつ体部に、ゆるやかに外反す る口縁部をもつ。 ○口縫端部は丸く終わる。	○口縁部内外面被覆ナダ。 ○体部外面ハケメのものナダ、内面ナ ダ。	○良好。 ○無害。 ○にぶい褐色 7.5YR 7/3。 ○地塊成土。 ○4 層。
葉	218	○ 15.2 ○ 3.7 ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は尖って終わる。	○口縁部内外面被覆ナダ。	○良好。 ○長石を多く含む。 ○褐色 2.5YR 6/6. ○ ○ ○ 4 層。	
	219	○ 16.7 ○ 2.45 ○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は尖らず。	○口縁部内外面被覆ナダ。	○良好。 ○長石を多く含む。 ○褐色 2.5YR 7/4. ○ ○ 4 層。	

目 種	器 形	番 号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
外 生 土 器	壺	220	○15.0 ○ 6.4 ○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、端部は受口状に上へつまみあげる。	○口縁部内外面横ナギ。 ○体部内外面ナギ。	○良好。 ○1mm前後の長石を含む。 ○にぶい褐色10YR 5/3。 ○ ○ ○4層 (砂シルト)。
	壺	221	○19.2 ○ 3.4 ○ ○ ○口縁 1/3残	○体部があまりほらず、水平に折れしまがる口縁部がつく。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部、体部ナギ。 ○体部内面に粘土の接合面。	○良好。 ○角閃石を少量含む。 ○にぶい褐色3 YR 7/3。 ○生軟弱度。 ○4層。
	壺	222	○21.8 ○ 3.9 ○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、丸く終わる。	○口縁部内外面横ナギ。	○良好。 ○こまかに石英・長石・角閃石を含む。 ○黄褐色2.5Y 4/1。 ○ ○ ○4層。
	壺	223	○20.0 ○ 4.7 ○ ○	○本平方向に屈曲か反する口縁部、端部は丸く終わる。	○口縁部内外面横ナギ。	○良好。 ○1mm程度の長石を含む。 ○にぶい褐色5 YR 6/3。 ○ ○ ○4層 (レキ層)。
	壺	224	○14.0 ○ 4.7 ○ ○	○「く」の字形に外反する口縁部に、端部は面をつくって終わる。	○口縁端部に弦文を施す。	○良好。 ○0.1~1.0mmの長石を多く含む。 ○にぶい褐色7.5YR 7/3。 ○ ○ ○4層 (レキ層)。
	壺	225	○12.6 ○ 3.0 ○ ○	○ゆるやかに外反する口縁部に、端部は面をなす。	○口縁部内外面横ナギ。	○良好。 ○0.1~1.0mmの長石を多く含む。 ○にぶい褐色7.5YR 6/3。 ○ ○ ○4層。
	壺	226	○11.8 ○ 3.5 ○ ○ ○口縁 1/7残	○「く」の字形に屈曲外反する口縁部に、端部は受口状に上方へつまみあげる。	○口縁部内外面横ナギ。 ○体部外側ハケメ (7個/cm)、内面ナギ。 ○体部に様付着。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石を多く含む。 ○にぶい褐色10YR 6/3。 ○生軟弱度。 ○4層。
土 器 器	壺	227	○13.6 ○ 4.3 ○ ○	○本平方向に屈曲し、外反する口縁部に、端部は面をなす。	○体部内外面ナギ。	○良好。 ○0.1~1.0mmの石英粉粒を多く含む。 ○黄褐色7.5YR 8/3。 ○ ○ ○4層。
	壺	228	○11.6 ○ 5.5 ○ ○ ○口縁 1/3残	○球形に近い体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつく。 ○底盤3~4mmと薄手の土器。	○口縁部内外面横ナギ。 ○体部外側ナギ、内面ヘラケメリ。 ○底部に鋸い模がつく。	○良好。 ○0.1~2.0mmの長石・角閃石を多く含む。 ○にぶい褐色5 YR 7/3。 ○生軟弱度。 ○4層。
各 种 土 器	壺	229	○27.7 ○ 7.7 ○ ○ ○口縁 1/7残	○丸瓶をもつ体前に「く」の字形に屈曲外反する口縁部がつく。 ○口縁端部は面をもつ。	○口縁部内外面コナギ。 ○体部内外面ナギ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英を含む。 ○にぶい褐色5 YR 5/3。 ○生軟弱度。 ○4層。

器種	番号	法量(oz)	形態の特徴	技術の特徴	備考
赤土器	230	○33.5 ○6.5 ○ ○口縁1/12強	○229に同じ。	○229に同じ。	○良好。 ○長石・角閃石を含む。 ○灰青褐色10YR 4/2。 ○生割西面底。 ○4層(レキ層)。
	231	○31.8 ○3.5 ○ ○口縁1/9強	○「く」の字形に口縁外反する口縁部に、端部は面をもって終わる。	○口縁部模ナダ。 ○体部内外面模ナダ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石を含む。 ○にぶい褐色5YR 6/3。 ○生割西面底。 ○4層。
	232	○32.8 ○3.8 ○ ○	○229に同じ。	○229に同じ。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石を多く含む。 ○灰青褐色10YR 5/2。 ○ ○4層(レキ層)。
	233	○44.0 ○5.9 ○ ○	○丸脚をもつ体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面模ナダ。	○良好。 ○石英・長石を多く含む。 ○黒褐色10YR 3/1。 ○ ○4層(レキ層)。
	235	○17.8 ○6.6 ○ ○口縁1/9強	○溝状にひらく口縁部に、端部を下方に拡張させた口をつくる。	○口縁部表面に三条の凹線文、内面に横による西点文を施す。 ○端部に口縁部を接合した際の段が残る。	○良好。 ○0.1~2.0mmの角閃石と0.1~1.0mmの長石を多く含む。 ○灰褐色7.5YR 6/2。 ○生割西面底。 ○5層(レキ層)。
	236	○17.6 ○6.8 ○ ○	235に同じ。	○口縁部端面及び端部に唇状文を施す。	○良好。 ○石英とこまかい雲母を含む。 ○灰褐色2.5YR 7/2。 ○ ○5層(レキ層)。
	237	○33.0 ○5.1 ○ ○口縁1/6強	○高く立ち上がる腹部に水平方向に外反する口縁部がつく。 ○口縫端部は上下にわずかに縮張する。	○端部外縫端いハケメ(4条/cm)、内面模ナダ。	○良好。 ○またかな長石と角閃石を含む。 ○にぶい黄褐色10YR 7/3。 ○地脚底座。 ○5層。
	238	○35.0 ○2.7 ○ ○口縁1/6強	○小窓の裏。 ○口縁部は坦く外反する。	○体部外縫ナダ、内面ハケメ(8条/cm)。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英を含む。 ○灰褐色7.5YR 4/2。 ○地脚底座。 ○5層。
	239	○44.8 ○5.55	○丸みをもつ体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつき、端部は面をもって終わる。	○口縫端部に斜面を施す。 ○体部外縫ハケメ、内面ナダ。	○良好。 ○地脚底座3mmの長石を含む。 ○地脚底座。 ○5層。
	240	○17.0 ○5.95 ○ ○口縁1/6強	○丸い作面に「く」の字形に外反する口縁部がつく。 ○口縫端部丸く終わる。	○口縫部内外面模ナダ。 ○体部外縫ヘリミガキ、内面ナダ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英を含む。 ○にぶい黄褐色10YR 5/2。 ○地脚底座。 ○5層。

器 種	器 形	番 号	法 量 (oz)	形 態 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
新 石 器	角 盤 等	241	○11.5 ○ 4.1 ○ ○	○内板する体面に、口縁端部は段次につく。	○口縁端部に櫛による歯状文。 ○体部外面に幾枚文を施文。 ○口縁部に円孔を認められる。	○良好。 ○良石・角閃石を多く含む。 ○淡赤褐色 2.5 Y R 7/4。 ○生割面粗面。 ○5層(砂層)。
	盤	242	○19.0 ○11.0 ○ ○	○縁部から外反する口縁部に、端部の上下を弧張して、尖口状につくる。	○口縁端部に崩形文、縁部に直線文を施文する。	○良好。 ○内閃石と雲母を多く含む。 ○2.5 Y 6/2。 ○5層砂層シルト。
	延 盤 等	243	○13.5 ○ 3.5 ○ ○	○ゆるやかに外反する口縁部。	○口縁部内外面ナグ。	○良好。 ○少量の石英・角閃石と云母が多少に含む。 ○灰青褐色 10 Y R 6/2。 ○ ○ ○5層。
	盤	244	○13.9 ○ 5.8 ○ ○口縁 1/5強	○丸珠をもつ体部に、短く外反する口縁部がつく。小型の器。	○体部内外面ナグ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石・石英を多數含みやすい。 ○に淡赤褐色 2.5 Y R 5/4。 ○生割面粗面。 ○5層。
	盤	245	○15.9 ○ 4.9 ○ ○	○「く」の字形に逆曲外反する口縁部に、端部は面をもって終わる。	○口縁部に1条の沈線文を施す。 ○体部外面ハケメ(5条/ロ)、内面ナグ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石を含む。 ○黒褐色 7.5 Y R 3/2。 ○生割面粗面。 ○5層(砂層)。
	盤	246	○14.6 ○ 4.4 ○ ○口縁 1/10強	○あまり似らない体部に、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。	○体部外面ハケメのものもナグ、内面ナグ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石を含む。 ○に淡褐色 7.5 Y R 5/2。 ○生割面粗面。 ○5層。
新 石 器	盤	248	○14.4 ○ 9.95	○ゆるやかに外反する口縁部に、端部は丸く終わる。	○縁部に横帯直線文を施す。	○良好。 ○こまかい角閃石と雲母を多く含む。 ○に淡褐色 7.5 Y R 5/2。 ○ ○ ○切削断面内(5層盛土)。
	盤	249	○15.9 ○ 9.9 ○ ○口縁 1/7強	○あまり似らない体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつく。	○口縁部内外面横ナグ。	○良好。 ○小粒の石英・長石・角閃石を含む。 ○に淡褐色 7.5 Y R 6/2。 ○生割面粗面。 ○5層。
	高 杯	250	○ ○ 6.3 ○ 12.0 ○ 製端 1/3強	○杯底欠損。 ○ためにひらく縫割に、中空の脚部がつく。	○内外面とも痕跡が微少。	○良好。 ○こまかい長石を多く含む。 ○灰白色 7.5 Y R 6/2。 ○生割面粗面。 ○5層。
体	251	○29.6 ○ 3.2 ○ ○口縁 1/15強	○口縁部を水平方向に外反させ、端部は面をもって終わる。	○口縁端部、体部に幾枚文を施文。	○良好。 ○青石・黄石・黒雲母・角閃石を含む。 ○灰黄色 2.5 Y R 7/3。 ○生割面粗面。 ○5層。	

基 礎	基 礎	番 号	法 量 (m)	形 態 の 特 徴	性 質 の 特 徴	備 考
浮 游	漂 浮	252	○15.0 ○2.7 ○ ○口縁1/11枚	○水平方向に外反する口縁部に端部は丸く終わる。	○内外面磨滅度しい。	○良好。 ○極小の角閃石(多 数)・長石・石英を 含む。 ○暗褐色 7.5YR 5/6。 ○生駒西麓産。 ○5層。
生 土	漂 浮	253	○23.4 ○4.1 ○ ○口縁1/7枚	○「く」の字形に凹曲外反する口縁部 に、端部は丸く終わる。	○底部外縁へラミガキ、内面ナゲ。	○良好。 ○極小の長石・角閃石 を含む。 ○褐色 7.5YR 4/3。 ○生駒西麓産。 ○5層。
漂 浮	漂 浮	254	○24.2 ○5.2 ○ ○口縁1/12枚	○「く」の字形に外反する口縁部に、端 部は丸く終わる。	○内外面とも磨滅度しい。	○良好。 ○小さい長石・角閃 石・石英・黑母石を 数多く含み、粗め。 ○にぶい褐色 7.5YR 6/4。 ○生駒西麓産。 ○5層。
土 砂 岩	漂 浮	255	○28.4 ○6.1	○蝶形の体部に短く斜め上方外反する口 縁部がつく。 ○口縁端部は丸く終わる。	○口縁部内外面磨ナゲ。 ○体部外面ハケメ(5枚/ロ)、内面横 方向のヘラケズリ。	○良好。 ○石英・黑母石を含 む。 ○灰青褐色 10YR 6/2。 ○生駒西麓産。 ○5層。
浮 游	漂 浮	256	○18.0 ○8.4 ○ ○口縁1/11枚	○裏に砂をちらし、まっすぐに立ち上がる 体部に、口縁端部は粘土を貼り付けて、 台形状につくる。	○体部外縁に薄状文、直線、波状文を施 文する。	○良好。 ○中~大的長石を多量 に含む。 ○黒色10YR 1.7/1。 ○堆積構造。 ○5層(底土)。
生 土	透 鏡	257	○ ○3.2 ○1.5 ○底部 1/2枚	○底部平。○底部した平底。	○底部外縁へラミガキ。	○良好。 ○小さな長石・角閃石 を含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 6/4。 ○生駒西麓産。 ○5層。
漂 浮	底 盤	258	○ ○2.35 ○1.5 ○	○塊状。○底部外縁、輪台状に内側が凹む。	○外縁ハケメ、内面ナゲ。	○良好。 ○こまかい角閃石と長 石を多く含む。 ○褐色 2.5YR 7/6。 ○生駒西麓産。 ○5層(埋藏)。
物 質	体	259	○ ○2.85 ○	○土御質土器。	○外縁格子叩き、内面ナゲ。	○良好。 ○長石を多く含む。 ○灰青褐色 10YR 6/2。 ○ ○8X3。
系 土	体	260	○ ○3.15 ○ ○	○土御質土器。	○外縁格子叩き、内面ナゲ。	○良好。 ○長石を含む。 ○にぶい褐色 5YR 7/3。 ○ ○A8第3累。
基 礎	体	261	○ ○3.85 ○ ○	○土御質土器。	○外縁磨削文、内面ナゲ。	○良好。 ○長石を含む。 ○灰白 2.5YR 6/2。 ○ ○5層。

器種	器形	番号	法量 (a)	形態の特徴	技法の特徴	像方
縄 文	壺	262	○ ○ 3.5 ○ ○ ○	○土縛質土器。	○外表面叩き、内面ナゲ。	○良好。 ○長石・角閃石・石英を含む。 ○灰白色 10YR 8/2。 ○ ○ A 8 D 7 上端。
	壺	263	○ ○ ○ 5.4 ○ ○ ○	○陶質土器。	○外表面叩文、内面ナゲ。	○良好。 ○1 mm以上の長石を含む。 ○にぶい赤色 7.5YR 4/4。 ○ ○ A 7 3 層。
土 器	鉢	264	○ ○ ○ ○ ○	○土縛質土器。	○外表面叩文、内面ナゲ。	
	鉢	265	○ ○ ○ 6.4 ○ ○ ○	○土縛質土器。	○外表面叩文、内面ナゲ。	○やや甘い。 ○長石を多く含む。 ○にぶい赤色 5 YR 4/3 - 4/4。 ○ ○ A 10 第 1 層。
製 瓦	鉢	266	○ 5.8 ○ ○ ○ 3.5 ○	○口縁部は直口し、端部は丸く終わる。	○体部外壁叩き目、内面ナゲ。	○良好。 ○長石・石英を多く含む。 ○灰青褐色 7.5 YR 8/3。 ○ ○ 不明。
	鉢	267	○ 4.4 ○ ○ ○ 3.7 ○ ○ ○	○口縁部がひっかに内側する。	○体部内外面ナゲ。	○良好。 ○1~3 mm 大の長石を多く含む。 ○灰黄褐色 7.5 YR 8/4。 ○ ○ S X - 8 A 10。
土 器	鉢	268	○ 8.6 ○ ○ 4.9 ○ ○ ○	○口縁部は直口し、端部は丸く終わる。	○体部内外面ナゲ。	○良好。 ○長石・石英を含む。 ○灰青褐色 10 YR 8/3。 ○ ○ S X 3。
	鉢	269	○ ○ 3.4 ○ ○ ○	○	○体部外壁叩き目 (5 条/mm) 、内面ナゲ。	○良好。 ○角閃石を含む。 ○にぶい褐色 2.5 YR 6/4。 ○ ○
鉢	鉢	270	○ ○ 3.6 ○ ○ ○	○口縁部が内側する。	○体部内外面ナゲ。	○良好。 ○長石・角閃石を含む。 ○灰白 7.5 YR 8/1。 ○ ○ A 10 S X 3。
	鉢	271	○ 3.1 ○ ○ 2.4 ○ ○ ○	○ 270 同 C。	○体部外壁叩き目 (3 条/mm) 、内面ナゲ。	○良好。 ○角閃石・長石を含む。 ○碧赤褐色 2.5 YR 5/6。 ○ ○ A 8 S D 12。
	鉢	272	○ 3.3 ○ 4.3 ○ ○ ○	○縫隙で一直くびれたものも、口縁部が内側する。	○体部内外面ナゲ。	○良好。 ○石英を含む。 ○灰白色 10 YR 8/1。 ○ ○ A 10 S X 3。

岩種	番号	法面 (m)	形態の特徴	性質の特徴	備考
表層	273	○ 3.2 ○ ○ ○	○	○体部外表面凹凸、内面ナメ。	○良好。 ○大きな長石と石英を含む。 ○灰白色 2.5Y 8/1。 ○A 5 S 第 3 層。
	274	○ 9.2 ○ 2.5 ○ ○ ○	○口縁部は内湾し、端部は丸く終わる。	○体部内外面ナメ。	○良好。 ○石英・長石を多く含む。 ○灰白色 2.5Y 8/2。 ○ ○ ○ A 10 S X 3。
土器	275	○ 33.0 ○ 3.2 ○ ○ ○	○ 274 と同じ。	○ 274 と同じ。	○良好。 ○角閃石を多く含む。 ○灰黄色 2.5Y 8/3。 ○ ○ ○ A 4。
	276	○ ○ 4.1 ○ ○ ○	○	○体部外表面凹凸、内面ナメ。	○良好。 ○角閃石・長石を含む。 ○灰白色 2.5Y 8/2。 ○ ○ ○ A 8 S D 1。
粘質	277		○開孔通常。	○坚硬 (968年)	
粘土岩	278	○ 4.4 ○ ○ ○ 4.3 ○ ○ ○	○大量的粉塵。		○良好。 ○ 0.1~1.5mm の黒色砂粒と白色砂粒を多く含む。 ○灰白色 10YR 7/1。 ○ ○ ○ 4 层 (レキ層)。
透視石墨	279	○ ○ 長さ 5.45 ○ 幅 2.0 ○ ○	○亜欠損。		○ ○ ○ 10Y 5/1 灰色。 ○ ○ ○ ○ A 4.
同文	280	○ 36.8 ○ 4.0 ○ ○ 口幅 1/2 倍	○キャリバー状の口縁で、口縁端部は平滑に面をもって終わる。	○口縁部に施るのあらい繩文を複数。 ○口縁下に尖端の形状をつくる。 ○内面ナメ。 ○船元口式。	○良好。 ○黑色 5 Y 2/1。 ○灰色 10Y 4/1。 ○他地底層。 ○不明。
	281	○ 33.0 ○ 3.2 ○ ○	○キャリバー状の口縁で、口縁端部は尖く終わる。	○口縁部に繩文複数後、円形刻文を複数。 ○内面ナメ。 ○船元口式。	○良好。 ○浅黄色 2.5Y 8/3。 ○他地底層。 ○ A 4.
土器	282	○ ○ 5.6 ○ ○	○体部くびれ部。	○くびれ部は近くに縦方向の瓜形文を複数後、横方向に他地の瓜形文を複数。 ○内面ナメ。 ○船元口式。	○良好。 ○ 1~2 m の長石を含む。 ○ ○ ○ ○ ○ 7.5Y 8/1。 ○他地底層。 ○ A 5 S D - 1。
	283	○ ○ 3.45 ○ ○ ○	○体部破片。	○体部上半に地文に網文を複数後、円形刻文を複数。 ○内面ナメ。 ○船元口式。	○良好。 ○長石・石英・角閃石を多く含む。 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ 5Y 7/2。 ○他地底層。 ○ A 8 S D 1。
透視	284	○ 41.2 ○ 10.6 ○ ○ ○	○外反する口縁部に、端部は外側に肥厚。	○外表面具波状、内面ナメ。 ○後期中葉 (縄文土器)。	○やや甘い。 ○ 0.1~1.5mm の黒色砂粒と白色砂粒を多く含む。 ○浅黄色 2.5Y 7/3。 ○生野西壁底。 ○ A 8 S 層。

器 種	器 形	番 号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	性 質 の 特 徴	備 考
圓 周 文	盤	285	○ ○25.55 ○	○口縁底に刺み目 (D字形) 凸帯を貼り付ける。	○体部内外面ナゲ。 ○凸帯は二等辺三角形を呈す。	○やや甘い。 ○粗い長石を多く含む。 ○灰黄褐色10YR 6/2 - 5/2。 ○生側面開窓。 ○3号人骨脛辺の盛土内。
	盤	286	○29.6 ○2.7 ○	○口縁部から少し下がった位置に、低い 凸帯を貼り付ける。 ○刺み目はD字形。	○内外面ナゲ。	○良好。 ○長石・角閃石・黑雲母を含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 5/3。 ○生側面開窓。 ○A 8第6層。
	盤	287	○ ○○ 5.6 ○	○体部端片。 ○凸帯は下向く。 ○刺み目は小さなD字形。	○凸帯以下の外縁ケメリ、内面ナゲ。	○良好。 ○1~2mmの大の黒雲母とこまかの角閃石を含む。 ○灰褐色 7.5YR 4/2。 ○生側面開窓。 ○腹内。
土 器	盤	288	○ ○4.05 ○	○口縁部より少し下がって凸帯を貼り付ける。 ○凸帯の幅は狭く、刺み目はO字形。	○内外面ともナゲ。	○良好。 ○角閃石・長石を含む。 ○灰白色 2.5YR 8/2。 ○他地成産。 ○
	盤	289	○ ○○ 3.7 ○	○凸帯は二等辺三角形を呈し、小さなV字形の刺み目。	○内外面ナゲ。	○良好。 ○長石・角閃石を含む。 ○にぶい褐色 7.5YR 5/4。 ○生側面開窓。 ○A 8層。
圓 周 文	盤	290	○ ○○ 2.5 ○	○口縁部より下がって凸帯を貼り付ける。 ○凸帯は二等辺三角形を呈し、小さなV字形の刺み目。	○内外面ともナゲ。	○良好。 ○長石・角閃石を含む。 ○にぶい黄褐色10YR 6/3。 ○ ○A 8盛土 (S D 22)。
	盤	291	○ ○○○○	○口縁部より少し下がって凸帯を貼り付ける。 ○凸帯は二等辺三角形を呈し、小さなD字形の刺み目を呈す。	○体部外縁ナゲツケ、内面ナゲ。 ○体部外面に擦れ道。	○良好。 ○2~3mmの大長石・ こまかの角閃石を含む。 ○生側面開窓。 ○A 7.5層。
你 生 土 器	盤	331	○ 7.0 ○ 10.1 ○丸底 ○完形	○小型の丸底盤。 ○葉筋形の体部に短く直する口縁部がつく。	○体部外縁ナゲメののちナゲ。 ○体部中央に径1.2mmの円孔を穿つ。	○良好。 ○2~3mmの大長石・ 石英粒を含む。 ○他地成産。 ○SD 5上層。
	盤	332	○ 13.0 ○ 25.2 ○ 8.5 ○完形	○蝶形の体部に溝4枚にひらく口縁がつく。 ○口縁部に下方に斜面して要をつくる。 ○小さな平底の底盤。	○口縁端部に波状文一帯。 ○口縁部に波状文5带、葉次文1等を施文する。 ○体部下平、ヘラミガキ。	○良好。 ○こまかの角閃石・長石を多く含む。 ○生側面開窓。 ○D区土器群一括。

図 版



上：調査前の状況

下：調査地航空写真

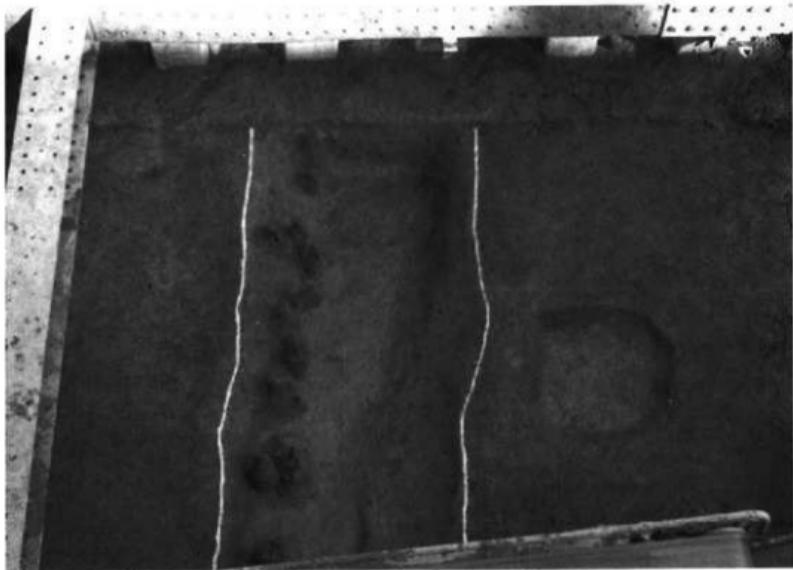




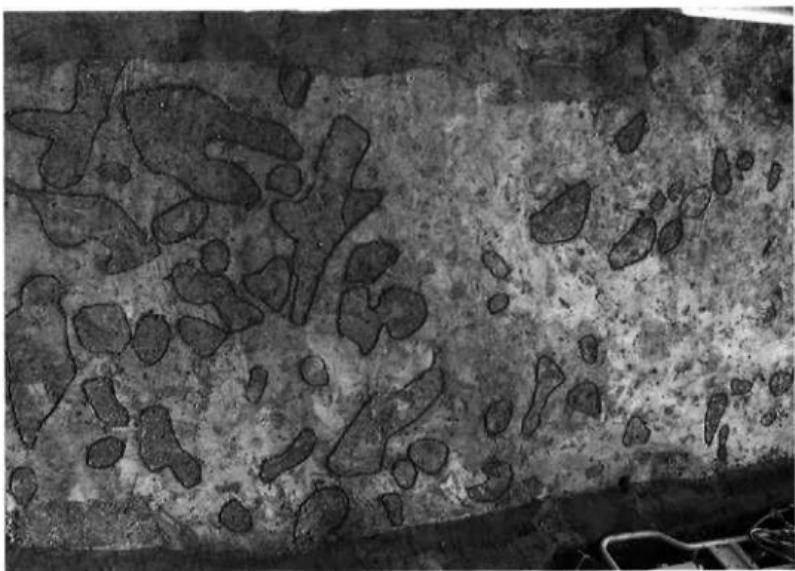
1. 機械掘削風景



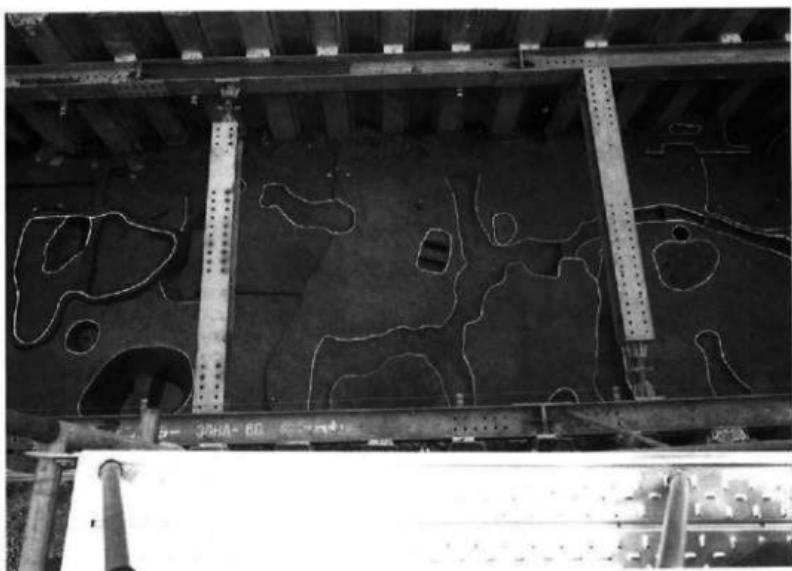
2. 人工掘削風景



1. SD 1 完掘状況



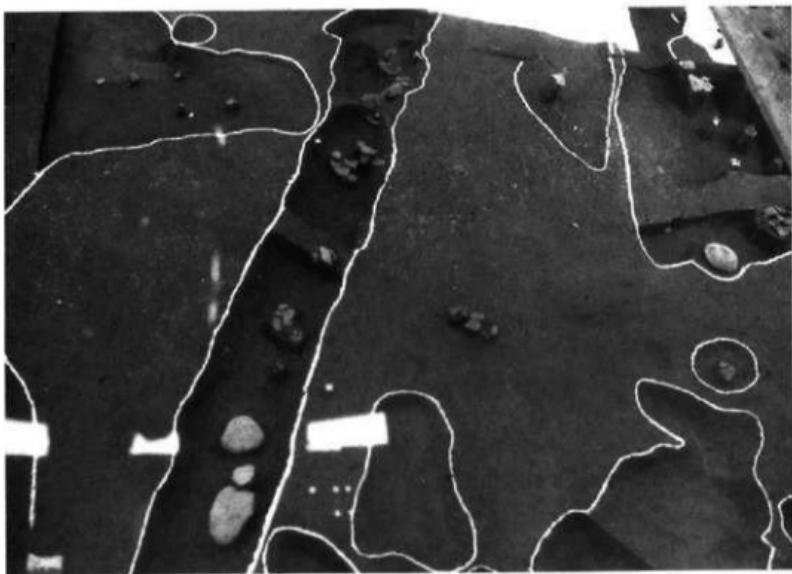
2. 足跡状遺構検出状況



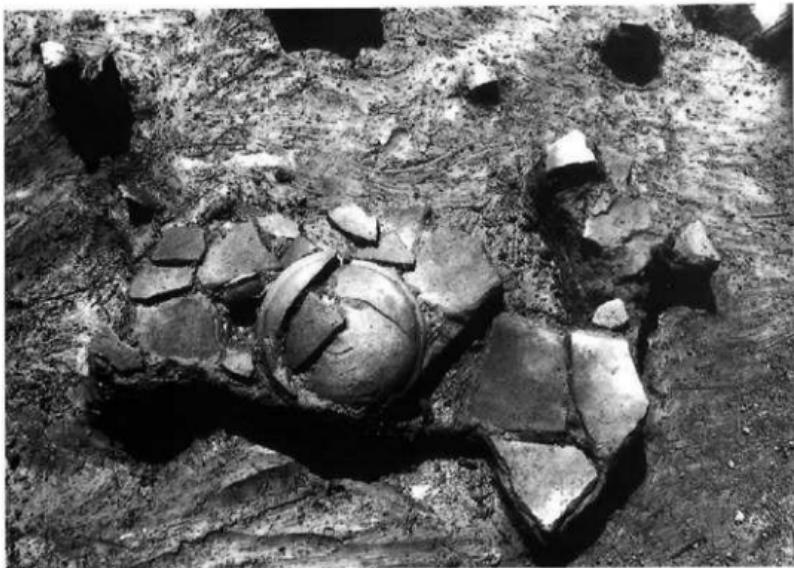
1. SD13・SD15・SK 8 完掘状況



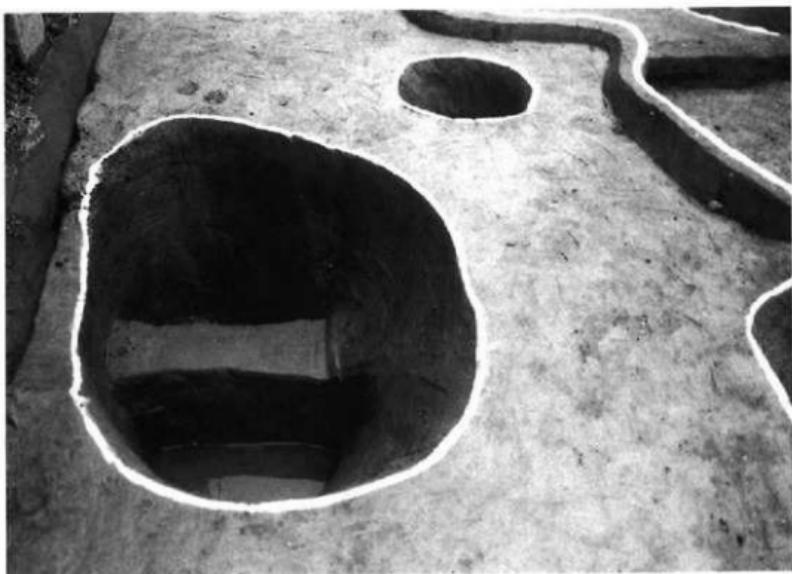
2. SK 10 完掘状況



1. SD 14内遺物出土状況



2. 須恵器出土状況



1. SK18完掘状況（東より）



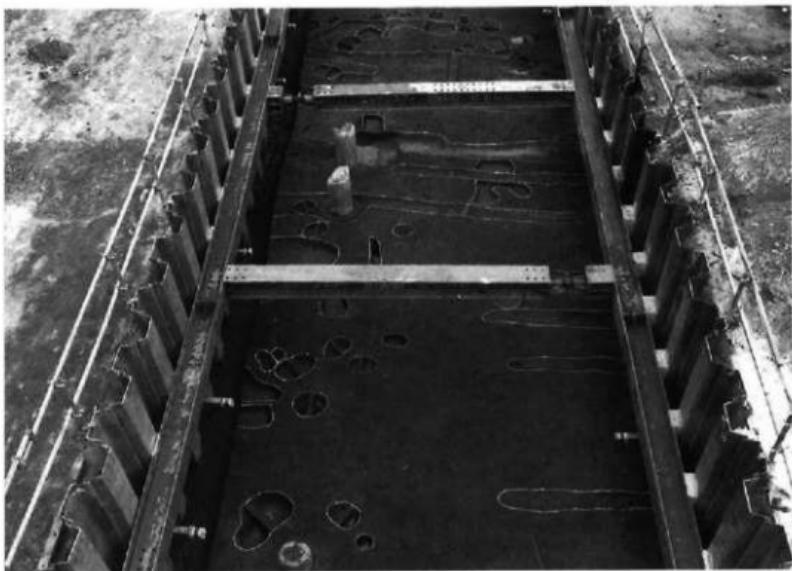
2. SK18完掘状況（北より）



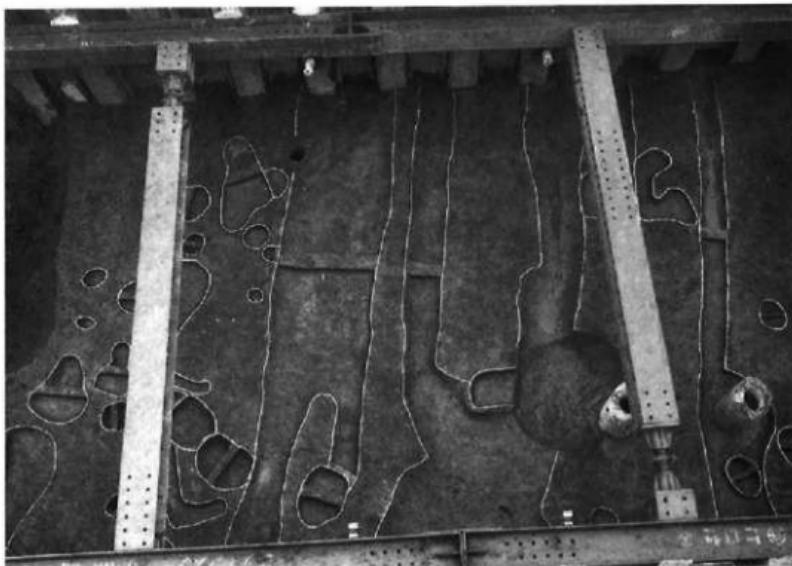
1. 土器出土状況



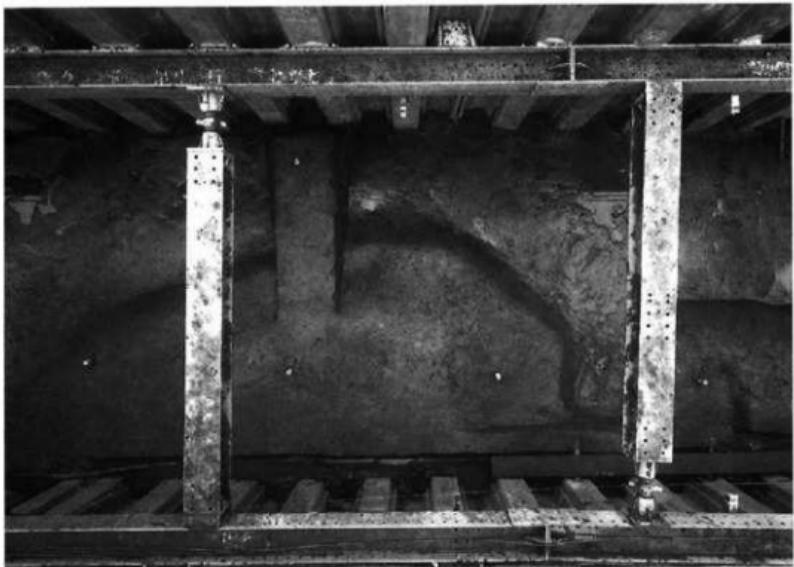
2. 柱材立剝状況



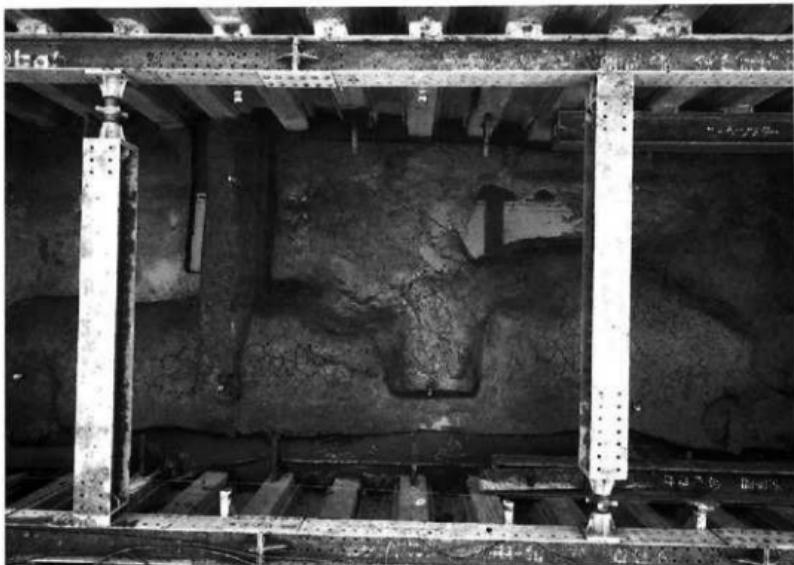
1. D地区遺構検出状況



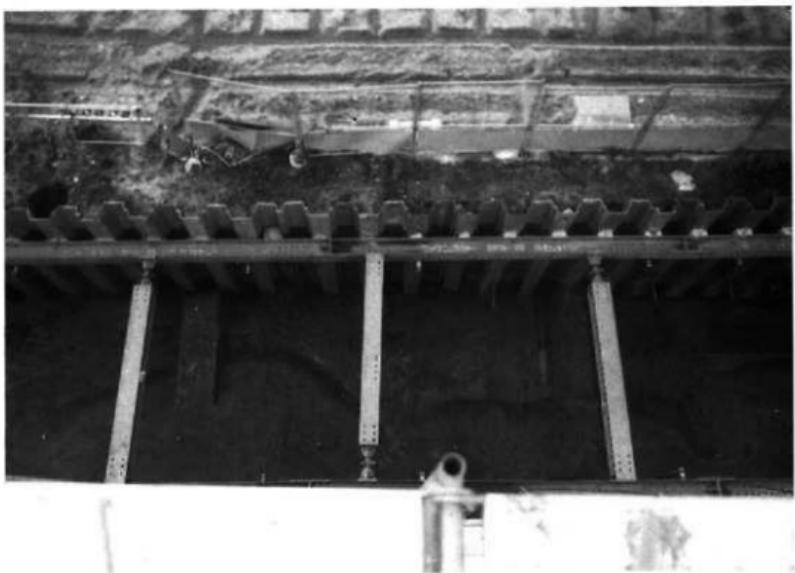
2. D地区遺構検出状況



1. 第3号方形周溝墓全景



2. 第2・3号方形周溝墓全景



1. 第2・3号方形周溝墓検出状況



2. 第1～3号方形周溝墓検出状況



1. 第4号方形周溝墓板材検出状況



2. 第4号方形周溝墓板材検出状況



1. 第5号方形周溝墓マウンド断面



2. 第5号方形周溝墓主体部検出状況



1. 第5号方形周溝墓主体部人骨検出状況



2. 第5号方形周溝墓主体部人骨検出状況

図版一四
弥生時代の遺構



1. 第7・8号方形周溝墓全景



2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺検出状況



1. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺底板



2. 第7号方形周溝墓第1主体部木棺小口板



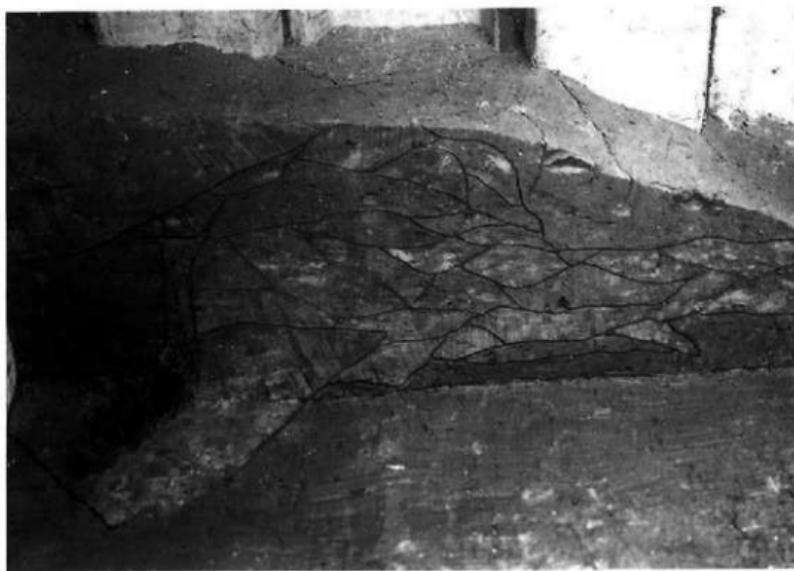
1. 第7号方形周溝墓第1主体部撮影



2. 第7号方形周溝墓第2主体部人骨



1. 第8号方形周溝墓マウンド検出状況



2. 第8号方形周溝墓マウンド断面



1. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺小口板検出状況



2. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺・人骨検出状況



1. 第8号方形周溝墓第1主体部木棺底板検出状況



2. 第8号方形周溝墓第1主体部墓域掘形全景



1. 第9号方形周溝墓全景（北より）



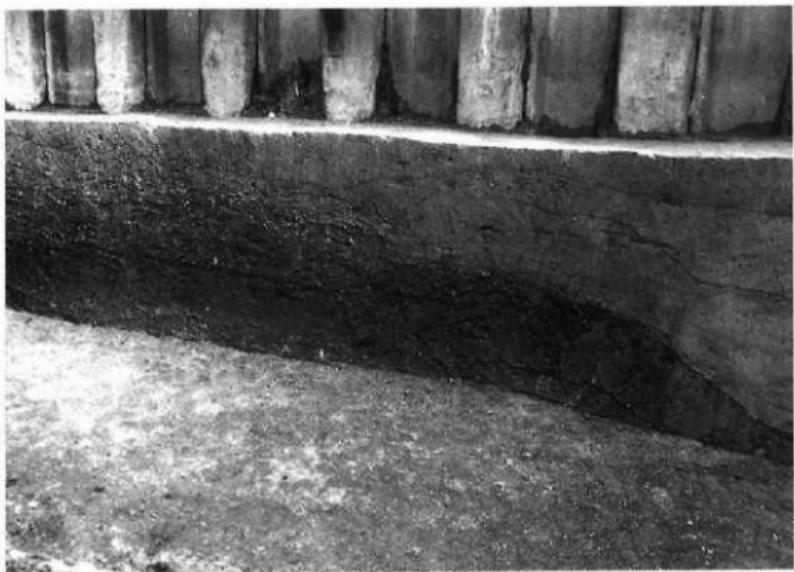
2. 第9号方形周溝墓とヤナギの木の柵（西より）



1. 第9号方形周溝墓とヤナギの木の根（西より）



2. 第9号方形周溝墓北西周溝内出土土器検出状況



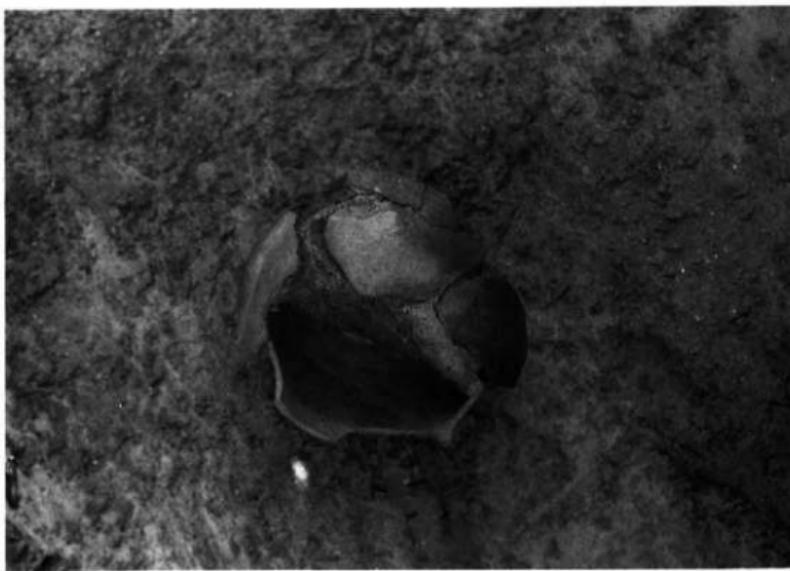
1. 第9号方形周溝墓マウンド断面



2. 第9号方形周溝墓西周溝断面

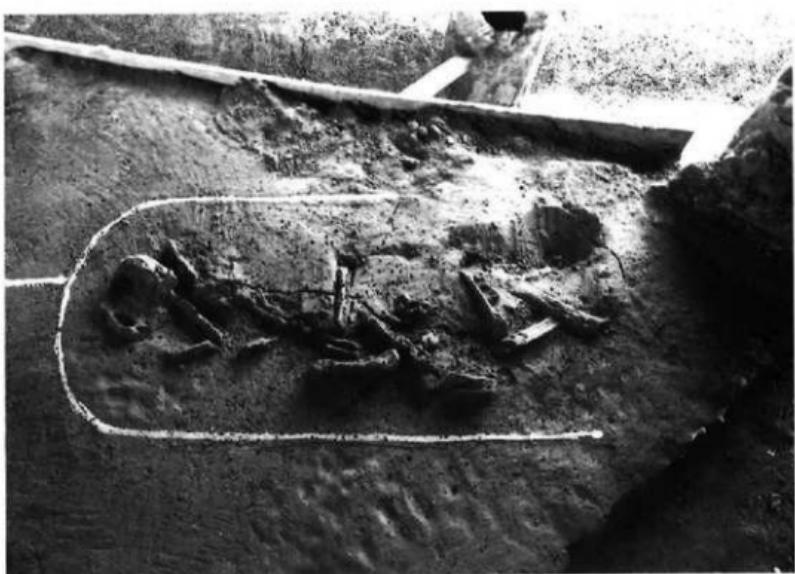


1. 第9号方形周溝墓北側土器群一括出土状況



2. 第9号方形周溝墓北側土器群一括出土状況

図版二四
弥生時代の遺構



1. 1号土塚墓人骨検出状況



2. 5号土塚墓人骨検出状況



1. 2号土塙墓人骨検出状況（西より）



2. 2号土塙墓人骨検出状況（北より）



1. 3号土塚墓人骨検出状況（北より）



2. 3号土塚墓人骨検出状況（西より）



1. 2号土塚墓人骨検出状況



2. 4号土塚墓人骨検出状況（南より）



1. SE 1、第7・8号方形周溝墓全景



2. SE 1・第8号方形周溝墓全景（北より）



1. SE 1 内西壁断面



2. SE 1 全景（北より）



1. SE 1 内土器（159）出土状況



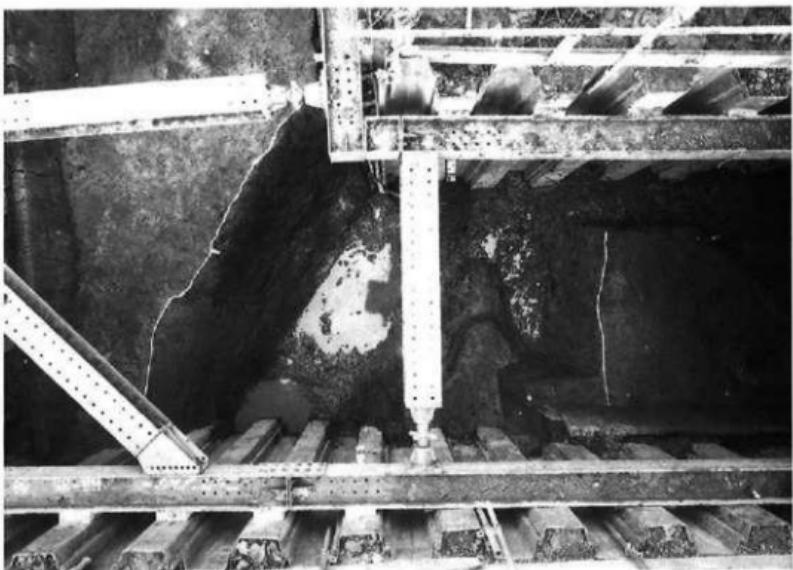
2. SE 1 内土器（296）出土状況



1. SD 22検出状況



2. SD 22検出状況



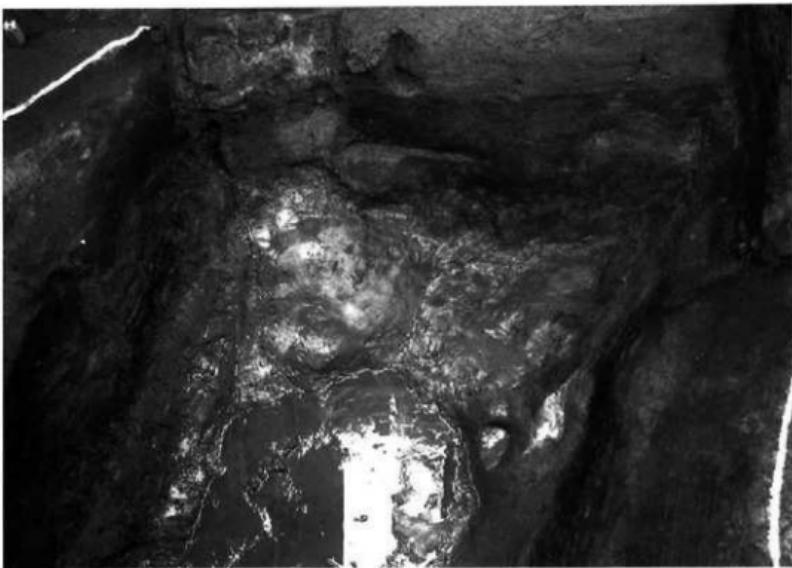
1. SD 21全景



2. SD 21西壁断面



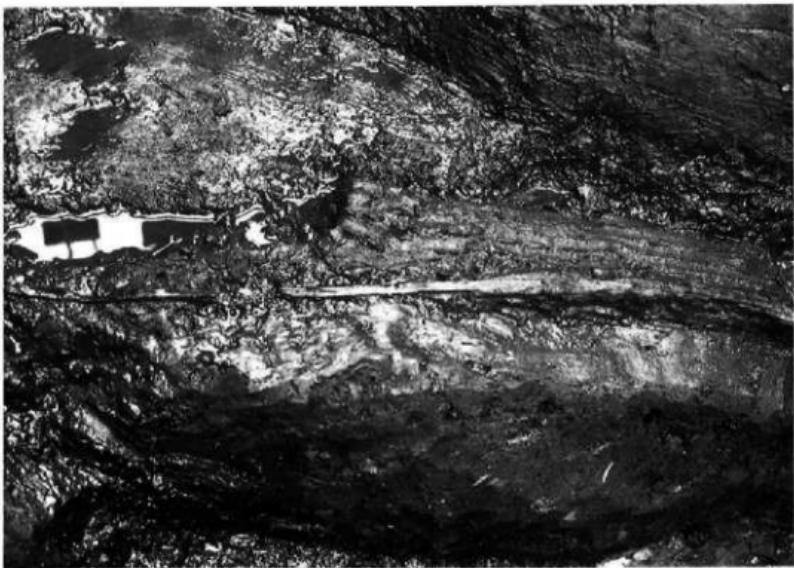
1. SD 20全景



2. SD 20西壁断面



1. SD 20内矢柄付石鏃出土状況



2. SD 20内矢柄付石鏃出土状況



1. SD 26全景



2. SD 26全景（東より）

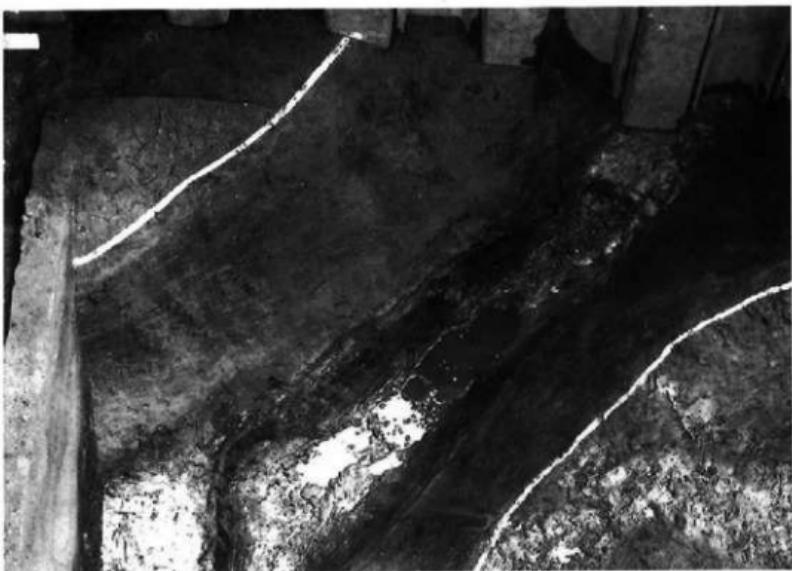
図版三六 弥生時代の遺構



1. SD 5 全景



2. SD 5 南壁断面



1. SD 3全景

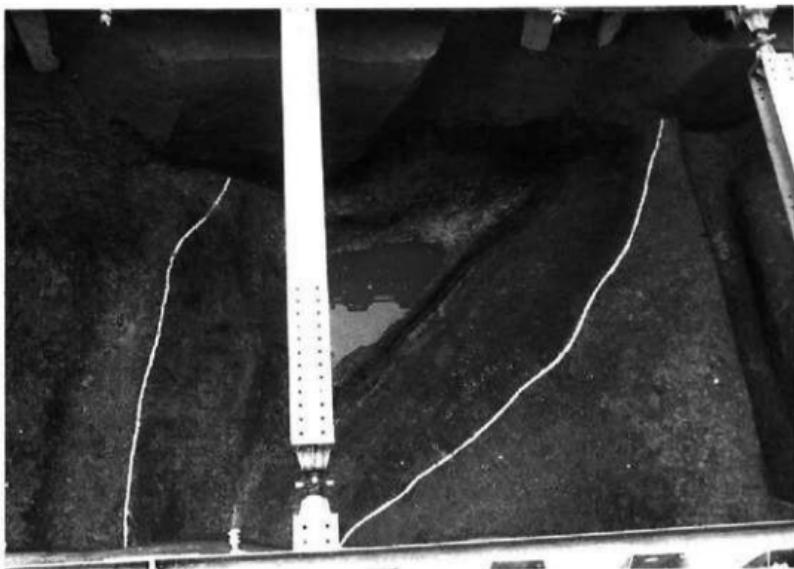


2. SD 3北壁断面

圖版三八
弥生時代の遺構



1. SD 7 全景



2. SD 2 全景



1. A 4区、SD 22内出土状況



2. 磨製石鉗出土状況



3. D地区土器出土状況



1. A 3～A 5区、縄文時代の海岸線



2. A 7～8区、鰐骨・シカの骨出土状況



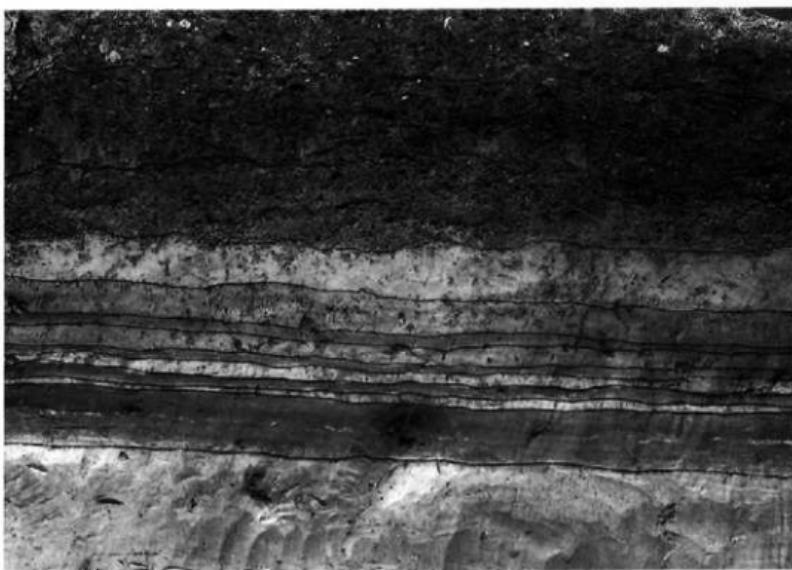
1. 動物遺体出土状況



2. 動物遺体（タヌキ）出土状況



1. D 地区断面下層



2. D 地区断面下層

図版四三 古墳時代の遺物



31



28



38



325



37



14



326

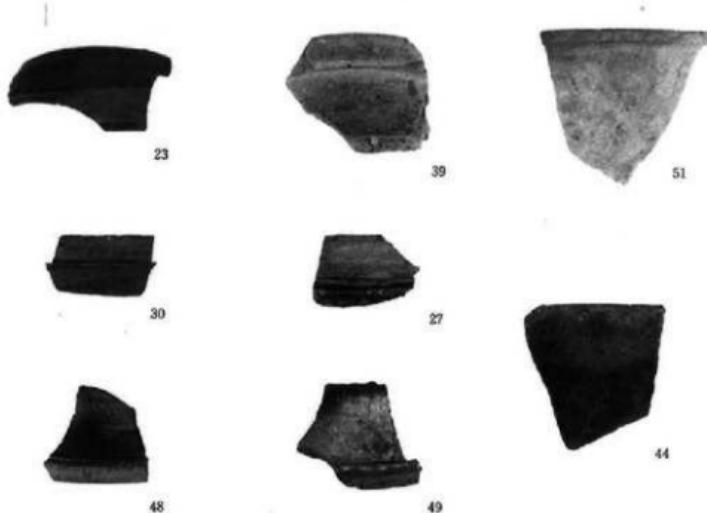


21

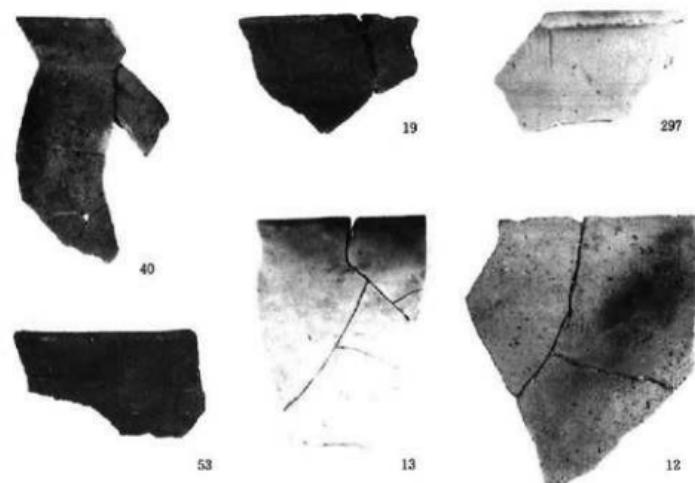
須恵器杯、土師器杯・甌



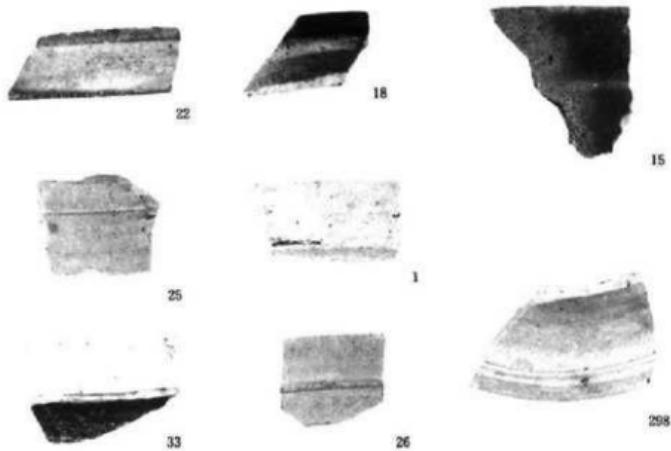
1. 造構内出土須恵器杯



2. 包含層内出土須恵器杯、土師器



1. 造構内出土土師器



2. 造構内出土須恵器、土師器



69



79



70



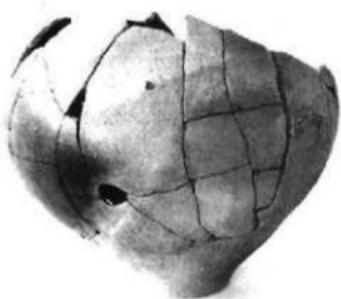
54

広口壺 (69・79)、細頸壺 (70・54)



77

78



85

84

壺 (85)、短頭壺 (77・78)、細頭壺 (84)



87



90



88



101



97

壺 (87)、広口壺 (90)、短頸壺 (97)、高杯 (88)、鉢 (101)



105



183



116



57



甕 (105)

広口甕 (57)

甕 (116)

小型甕 (183)

鉢 (86)



330



112



91



113

広口壺 (112・330)、甕 (91・113)



159



181



201



331



205

短頸壺（159）、小型壺（331）、壺蓋（181）、把手付鉢（201）、高杯（205）



96



81



278



328

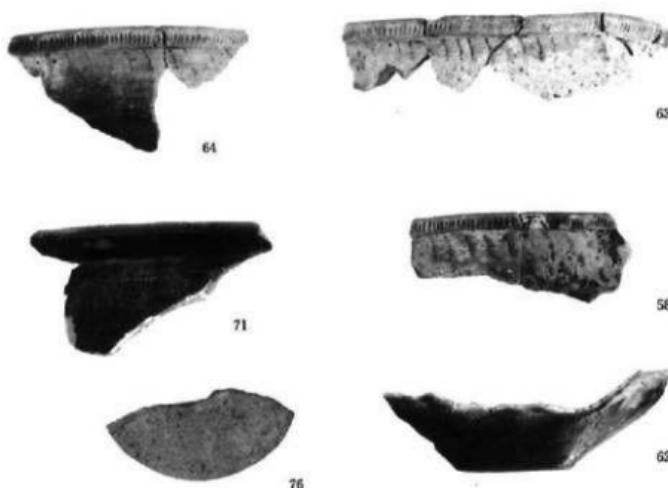


329

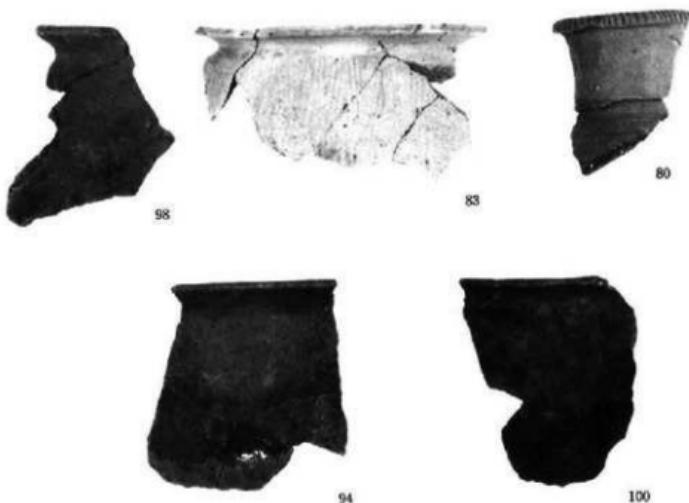


277

壺（96）、繩彌壺（81）、紡錘車（278）、不明土製品（328）、双孔円板（329）、開元通宝（277）



1. 遺構内出土土器



2. 遺構内出土土器

図版五四
弥生時代の遺物



92



13



95



99

1. 造構内出土土器



104

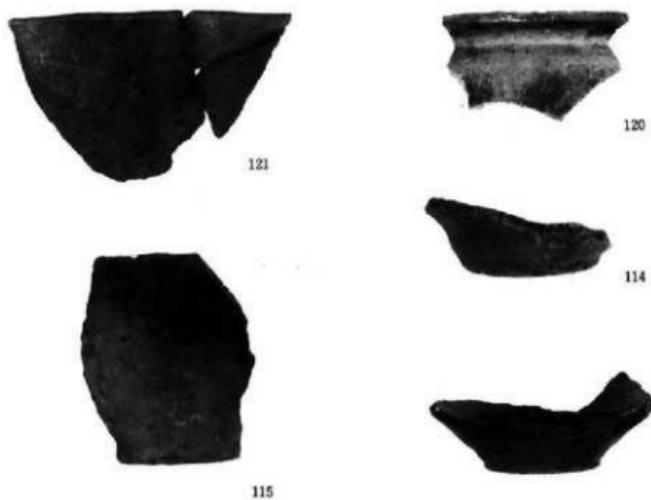


105

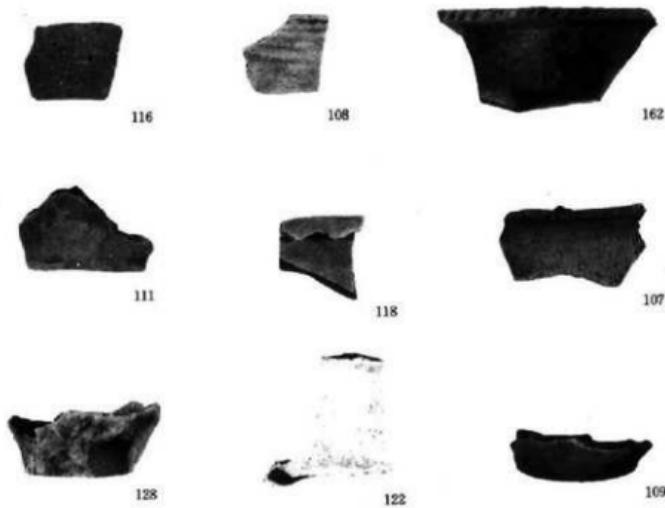


106

2. SD 3 内出土土器

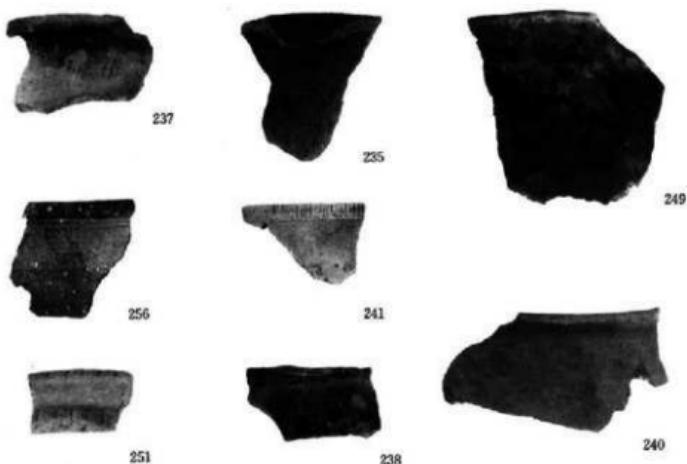


1. 遺構内出土土器

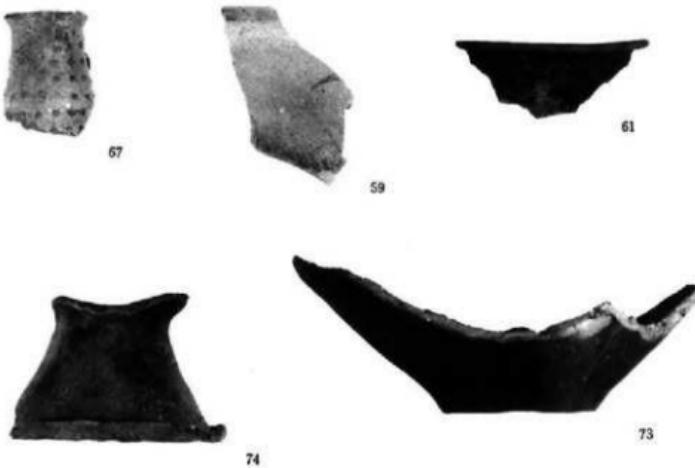


2. 遺構内出土土器

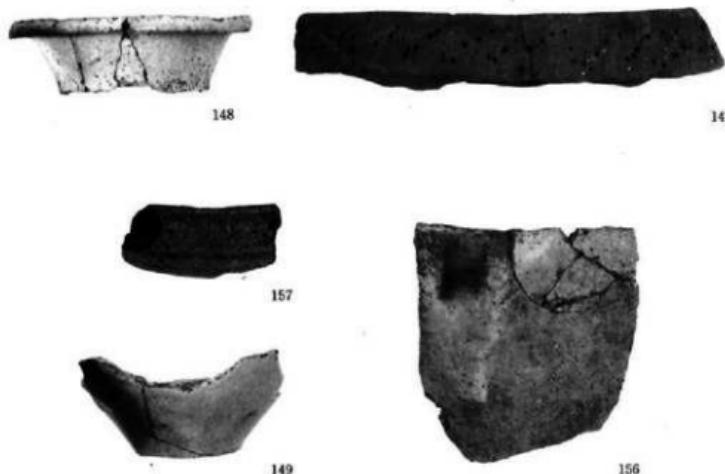
図版五六 弥生時代の遺物



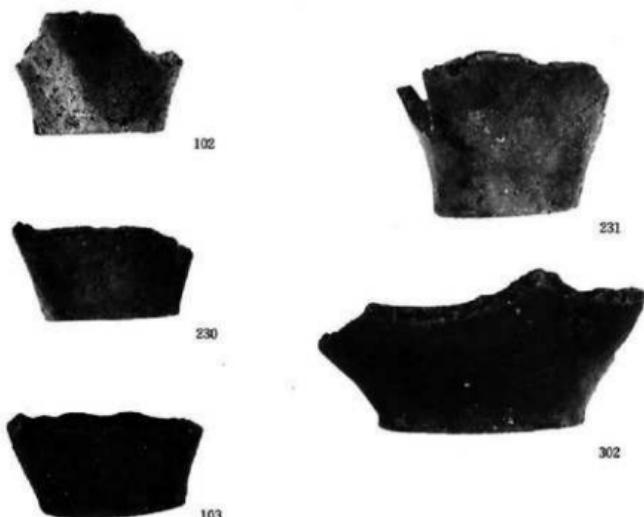
1. 包含層内出土土器



2. 遺構内出土土器

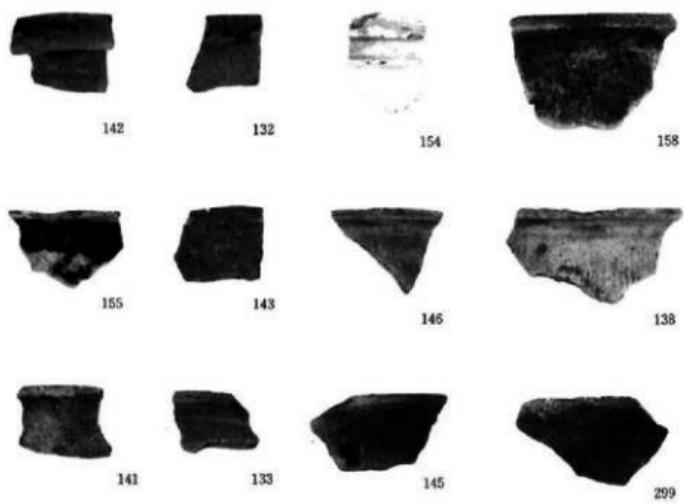


1. 造構内出土土器

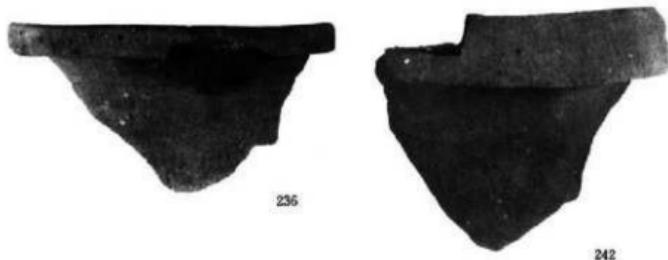


2. 造構内出土土器

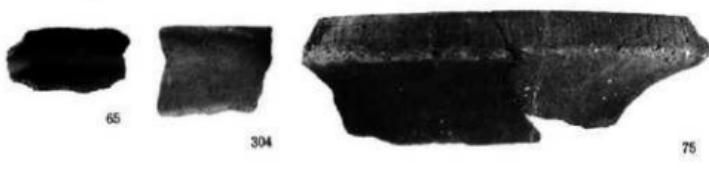
図版五八 弥生時代の遺物



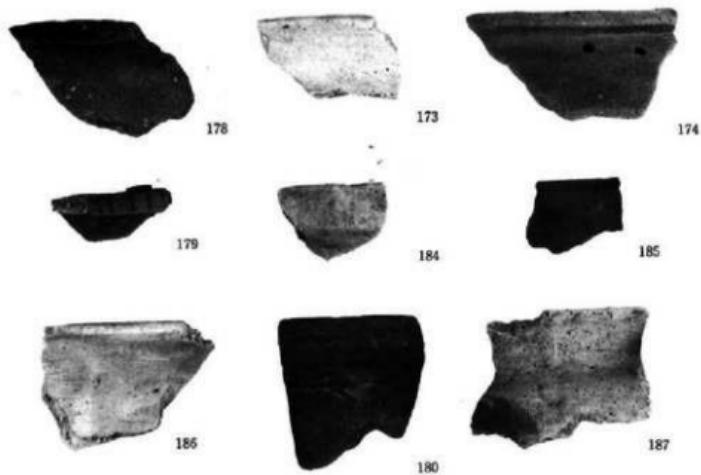
1. 造構内出土土器



2. 包含層内出土土器



1. 遺構内出土土器



2. 包含層内出土土器



168



176



175

1. 包含層内出土土器



171



170



177



303



167



182



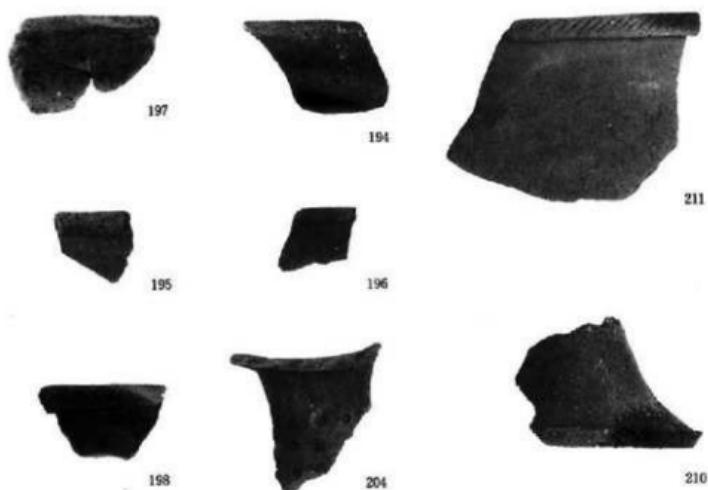
188



172

2. 包含層内出土土器

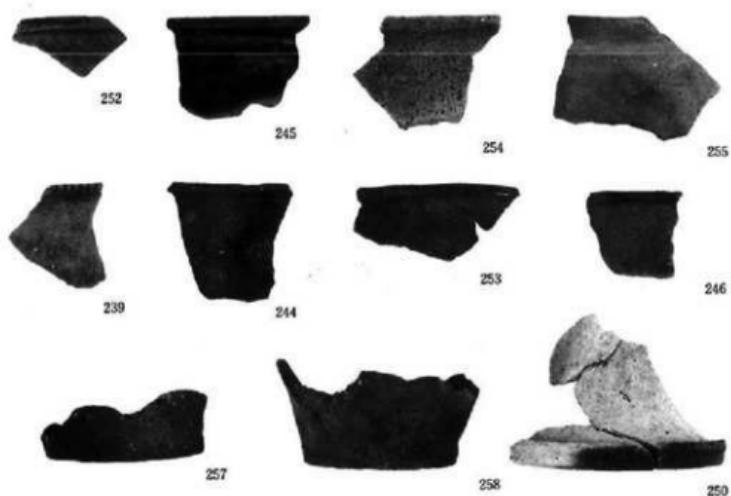
図版六一
弥生時代の遺物



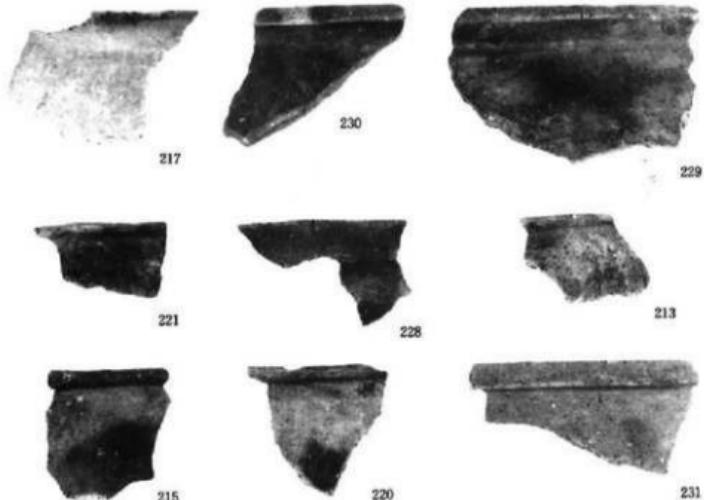
1. 包含層内出土土器



2. 包含層内出土土器

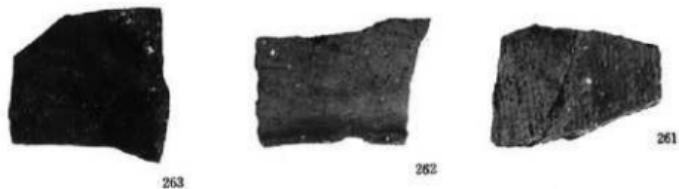
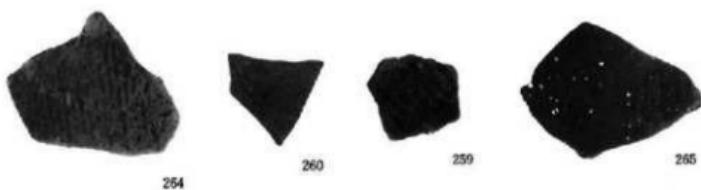


1. 包含層内出土土器

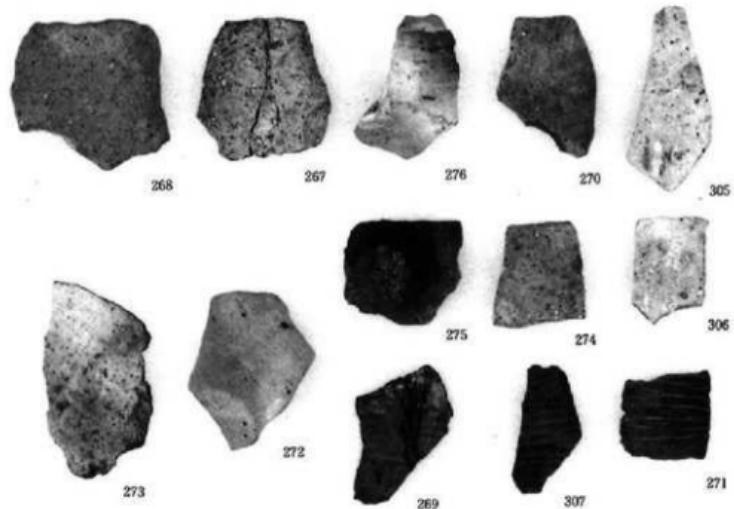


2. 包含層内出土土器

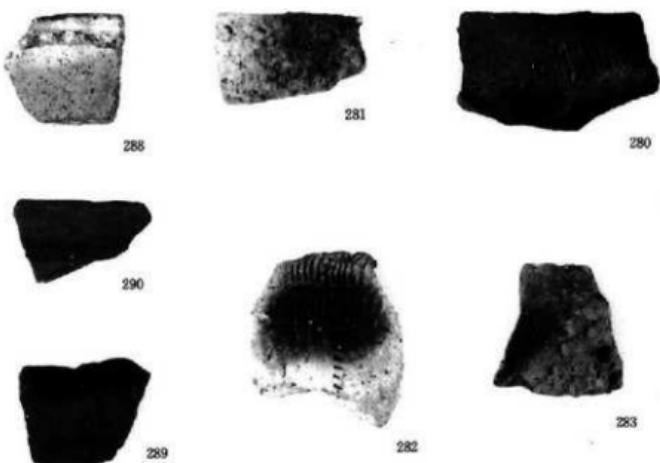
圖版六三 古墳時代の遺物



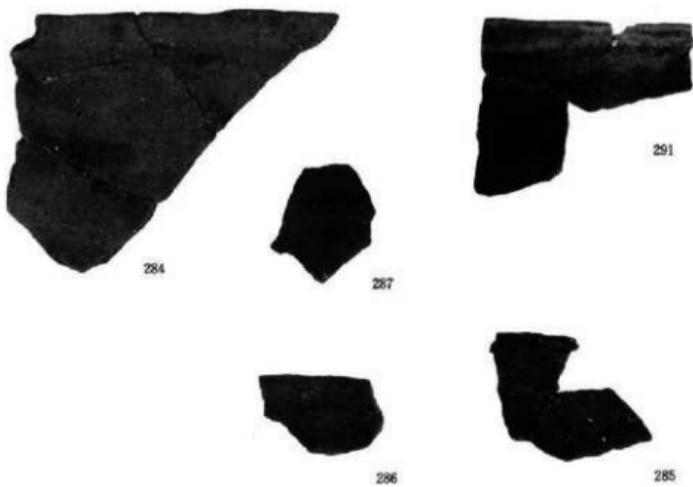
1. 韓式系土器



2. 製塙土器



1. 縄文土器深鉢



2. 縄文土器深鉢



295



296

293：板状木製品

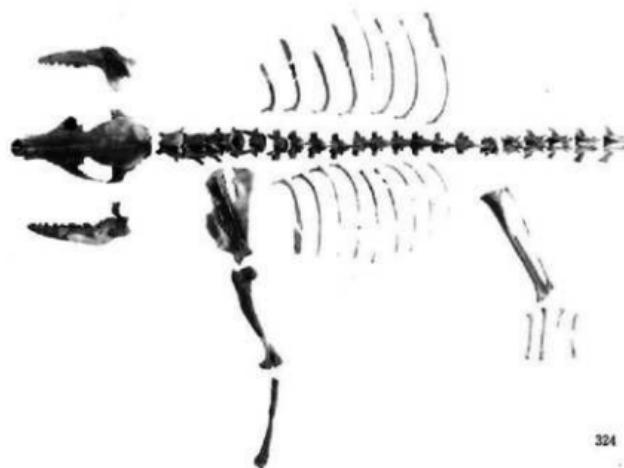
294：加工木

295：鋤

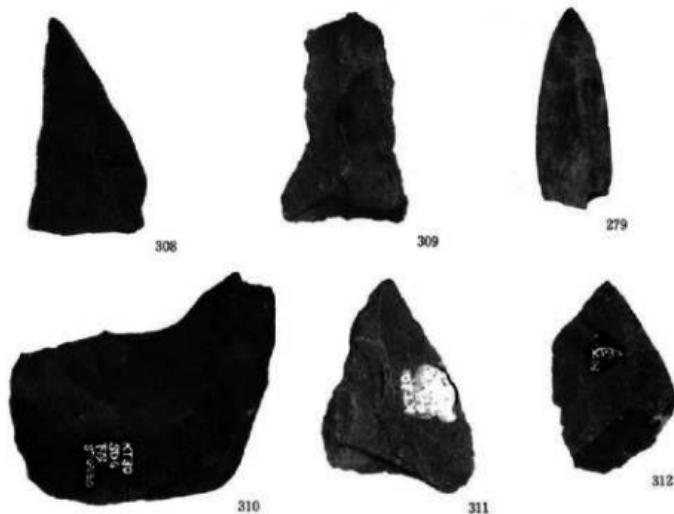
296：鋤

293

294



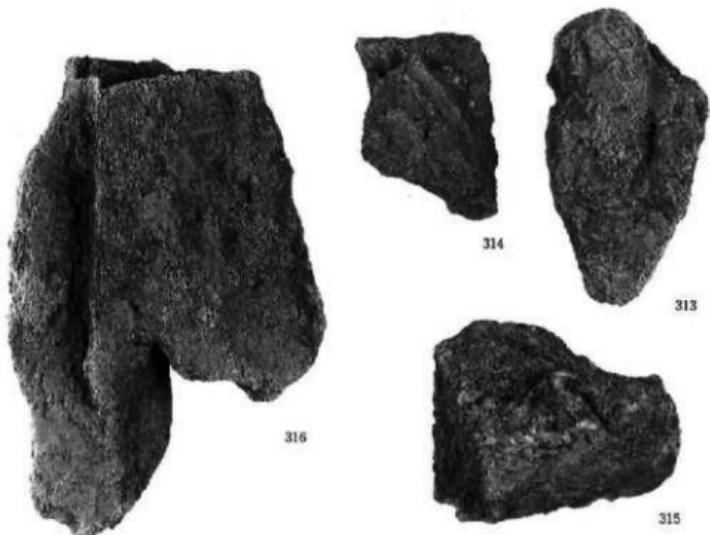
1. 動物遺体 (タヌキ)



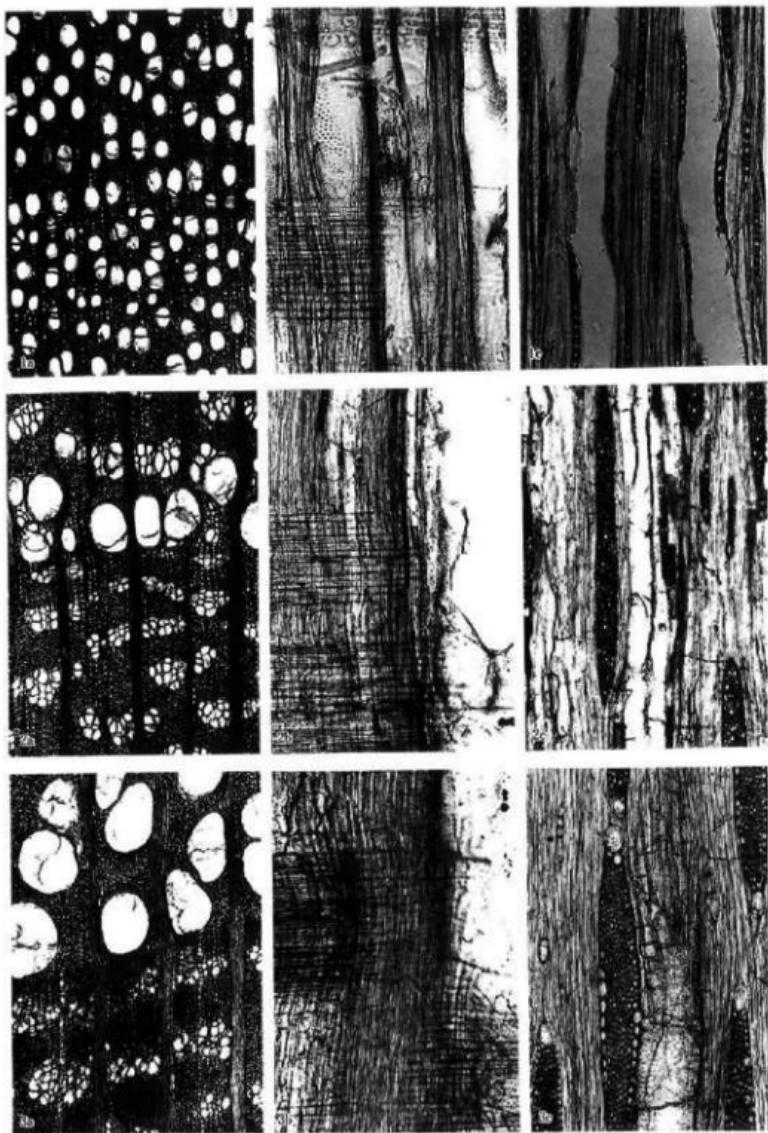
2. 磨製石器 (279)



1. クジラ肋骨 (317・318)、シカ大関骨 (319)、シカ (320・321・322)、イノシシ (323)

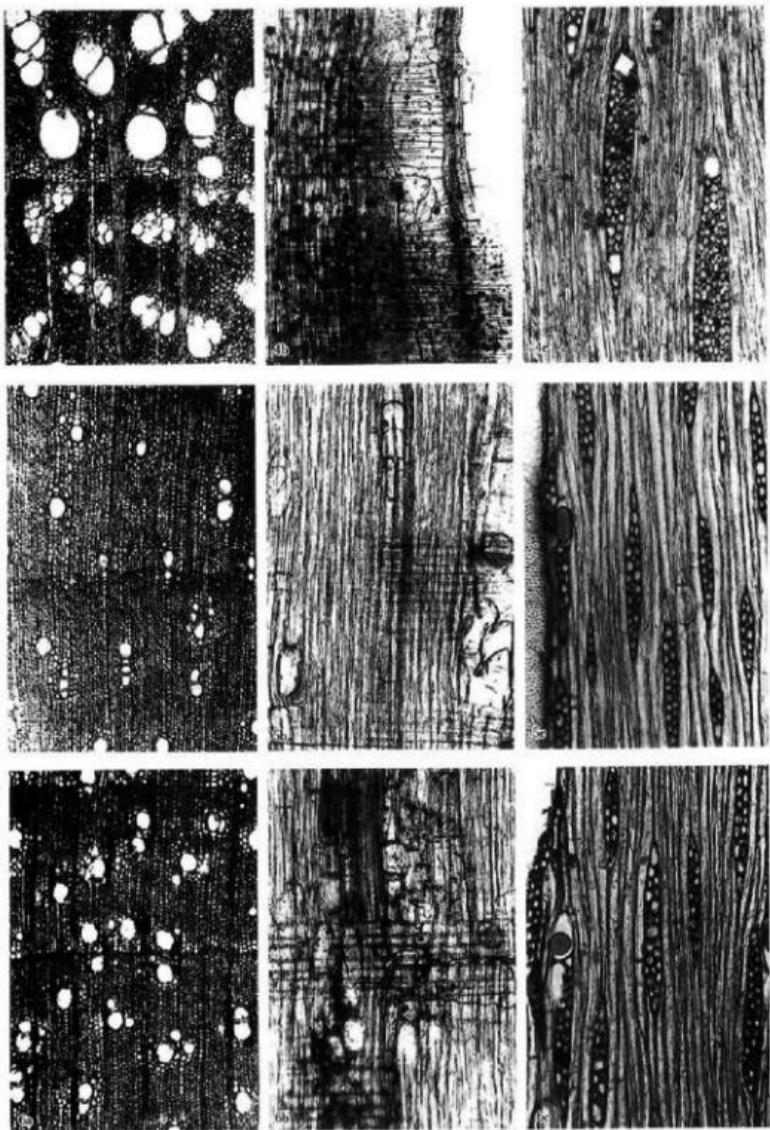


2. クジラの骨



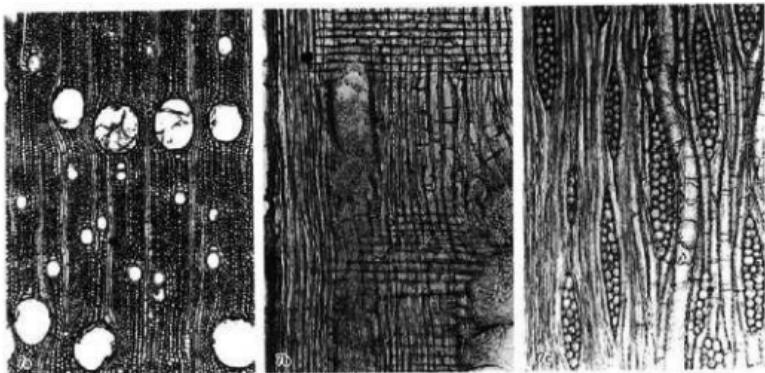
1. ヤナギ属の一種 No.7 2. ニレ属の一種 No.2 3. エノキ属の一種 No.6

a : 木口×40 b : 柄目×100 c : 板目×100



4 : ヤマグワ No.1 5 : ヤブニッケイ類似種 No.3 6 : タブノキ類似種 No.4

a : 木口×40 b : 横目×100 c : 板目×100

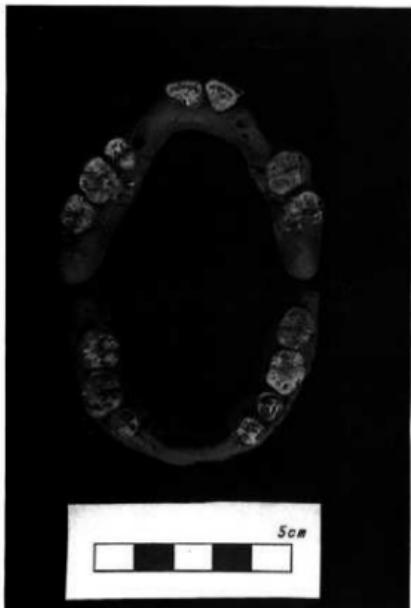


7：トリネコ属の一種 No.10

a : 木口×40

b : 横目×100

c : 板目×100



上：4号人骨四肢骨。左より順に、右尺骨、
右大腿骨、右脛骨、左脛骨、左腓骨、左大
腿骨、左上腕骨。

左：2号人骨の歯。上半は上顎歯。下半は下
顎歯。

鬼虎川遺跡第29・30次発掘調査報告

昭和63年 7月30日

発行所 東大阪市教育委員会

財団法人 東大阪市文化財協会

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所